

# 室川貝塚第1～3次発掘調査概報

高宮廣衛・玉城朝健・平安秀子・東江千栄子

## I はじめに

室川貝塚は荻堂式、伊波式、大山式、宇佐浜式など数型式の土器を含む縄文後期から同晩期初頭に対比される時期を主体とする遺跡である。

本遺跡が発見されたのは1974年。駐車場をつくる目的で始められた整地作業が端緒となって、先史遺跡であることが確認されたわけだが、発見者は本誌前号でも紹介したように、当時、コザ中学校の3年生であった当山一博君である。幸いにして同地域が急斜面で駐車場に不適なところから、この工事は中止された。

当山君の表採資料には前記土器のほかに市来式の影響を受けたとみられる口縁破片が1点含まれていた。南九州の縄文後期を代表する市来式土器は北の奄美諸島では宇宿貝塚(1)や嘉徳遺跡(2)で知られ、またこの土器の影響を受けたとみられる土器は面縄第四貝塚(1)でも数点発見されている。

市来式土器は数年前、沖縄本島の浦添貝塚(3)でも発見され、市来式土器の長駆南下渡海を示すものとして注目されたが、浦添貝塚の土器が奄美系の土器で占められていたことから、移入の時期が明確に掴めぬまま今日にいたっている。

本貝塚の表採資料は前にも述べたように沖縄の土器が主体を占め、その中に類市来式土器が1点含まれていたのである。このことから本遺跡では市来式発見の可能性もあり、市来式あるいは類市来式に伴う土器の確認も調査目的(他に遺跡の範囲確認と学術資料の蒐集)の一つであった。

本貝塚の発掘調査は1974(昭和49)年冬の第1次調査以来、1昨年(1976)の夏まで3回にわたっ

て実施された。第1次発掘調査は採土による露頭部(西北地区)から開始した。しかし、調査が進むにつれ未攪乱層の存することが分り、第2次調査以後、未攪乱地区の調査に力を注いだ。

第1～3次で延べ46日間の調査を実施したが、天候に恵まれず、後述のように調査期間の長かった割には発掘面積はそう大きくはない。調査目的の一つであった市来式に伴う土器の確認という点では肝心の市来式土器が未発見で、浦添貝塚の調査成果の域を出ないが、他方、荻堂式土器や伊波式土器に先行する土器(室川下層式)を発見するなど予期せぬ成果もあった。

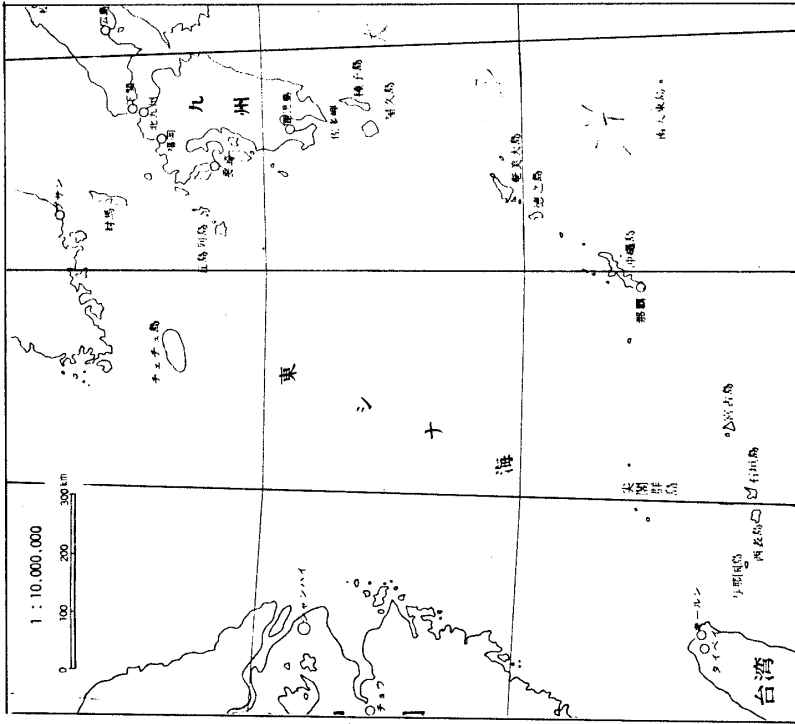
今回は第1～3次調査の一部について報告する。自然遺物については魚骨など未だ種の鑑定を得てないものがあるので、これについては次の機会にゆづりたいと思う。

なお、本貝塚の石器や自然礫の岩石鑑定については琉球大学教授木崎甲子郎氏に、また獣骨については動物化石の調査で来県された国立科学博物館の長谷川善和博士に同定をお願いし、チャート製の石器については筑波大学教授加藤晋平氏より懇切な教示を頂いた。また、発掘調査に際しては沖縄市教育委員会の山城清輝委員長をはじめ砂川玄依課長、棚原敏雄係長、仲本朝彦その他の方々に大変お世話になり、同市区画整理課の兼島兼忠氏には遺跡の地形図を作成して頂いた。記して感謝申し上げる次第である。

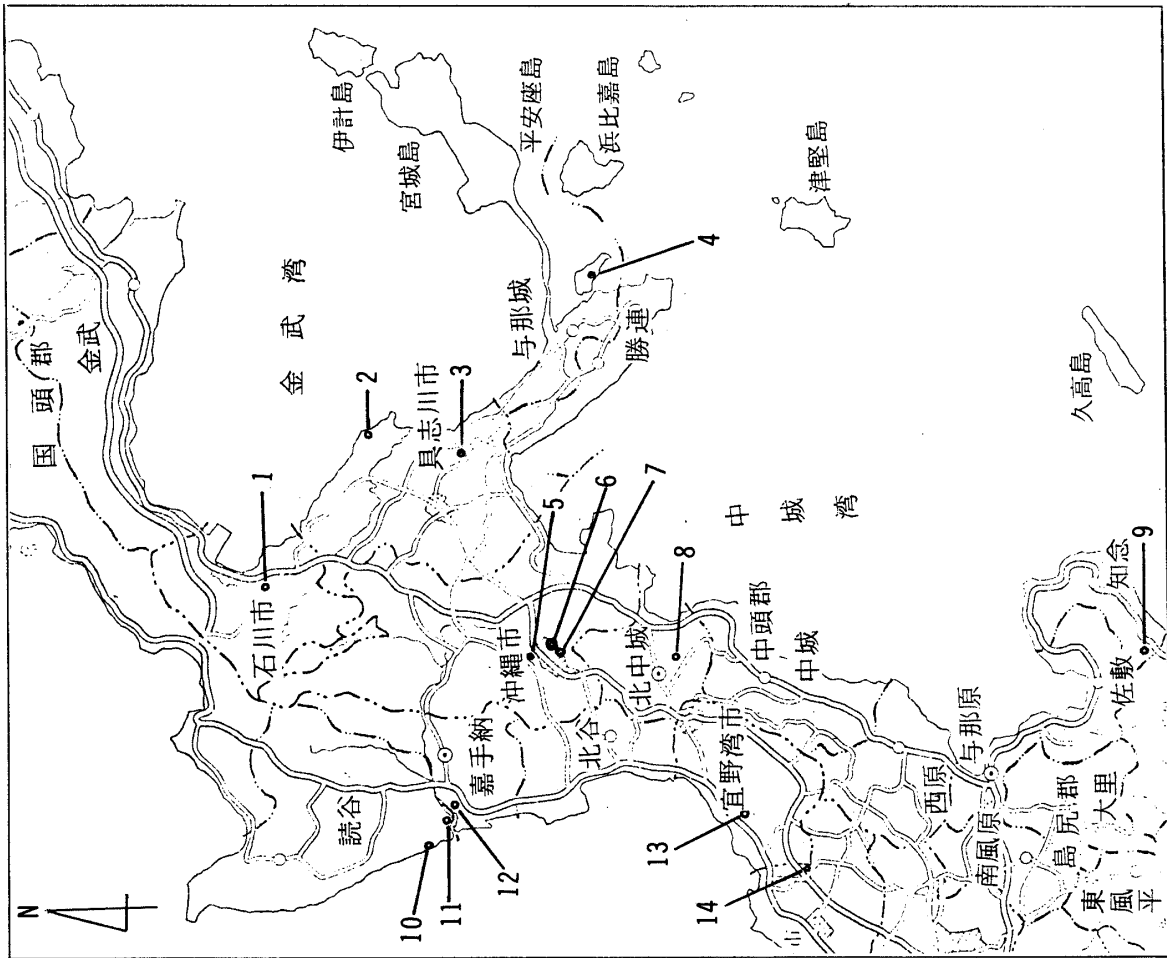
## II 遺跡の位置と環境

室川貝塚は北緯26°19'50" , 東経127°48'30"

( ) は註の文献番号



- |   |         |    |          |
|---|---------|----|----------|
| 1 | 伊波貝塚    | 8  | 荻堂貝塚     |
| 2 | 隅原遺跡    | 9  | 熱田原貝塚    |
| 3 | 地荒原貝塚   | 10 | 渡具知木綿原遺跡 |
| 4 | ヤブチ洞穴遺跡 | 11 | 渡具知東原遺跡  |
| 5 | 八重島貝塚   | 12 | 嘉手納貝塚    |
| 6 | 室川貝塚    | 13 | 大山貝塚     |
| 7 | 仲宗根貝塚   | 14 | 浦添貝塚     |



第1図 室川貝塚の位置



に位置し、沖繩市字仲宗根室川原88および304番地に所在する。

本貝塚の南西部には琉球石灰岩の台地が発達し、台地上には戦後、基地の街として発展してきた沖繩市（旧コザ市）の官庁や商業地・住宅地が広がり、その西に極東一といわれる嘉手納米空軍基地が続き、そして東シナ海となる。台地東北端部は石灰岩台地特有の絶壁を形成し、東方へ傾斜して太平洋岸に達するが、台地以東のこの斜面ではシルト質泥岩の島尻層が地表に露出し、大部分が耕地になっている。

室川貝塚はこの台地東北端崖下に形成された斜面の既耕地に立地し、標高はおおよそ95m。東方200mの台地崖下には同時期の仲宗根貝塚がある。直線距離で遺跡から太平洋岸までは約3km、東シナ海まで約5km、どちらかといえば萩堂貝塚や八重島貝塚のように内陸部の遺跡といえる。

本貝塚検出の貝には陸産、海産、淡水産などがあるが、海産の貝についてみるとアラスジケマンガイが圧倒的に多い。この貝は砂泥性で、この種の海は中城湾の西北部、つまり泡瀬海岸一帯に広がっている。前記のように泡瀬海岸までの直線距離は約3kmであり、室川貝塚人たちはこの海岸との結びつきが強かったように思われる。つまり、至近の海が利用されたことになろう。

### III 調査経過

第1次発掘調査は1974年12月26日から翌年1月5日までの11日間実施した。まず、遺跡西北部の造成工事による露頭部に、斜面にそって2×12mのMトレンチを設け、これを2m四方の6ピットに区分し、各層とも10cmレベルで掘下げた。伊波・萩堂期の遺跡はふつう貝塚を構成する。本遺跡のSトレンチでも萩堂式や伊波式は下層の貝層で出土する。しかし、Mトレンチ地区は伊波式や萩堂式を主体とするにもかかわらず、貝塚を構成していないのである。ここに西北部地区の特異性がみられるわけだが、同一遺跡におけるこのような相違を如何に解釈すべきか、未だ結論は得てい

ないが、今後も引き続き検討していきたいと考えている。

第1次調査は天候に恵まれず、6ピットのうち1・2・4・6の4ピットの調査に終わってしまった。ところで、遺跡の範囲確認のため設定したピットS-5（遺跡東部）では、南壁側で暗褐色の遺物層下に混土貝層の一部を確認した。本ピットの状況からこの東南部地区には未だ良好な層序を有する部分が残っているのではないかと推察された。

第2次発掘調査は前回の調査所見に基き、遺跡東南部を中心に1975年7月8日から同月18日までの11日間行った。まず、前回のテストピットS-5を南方へ8m延長し、これをSトレンチと呼ぶことにした。第3次調査は1976年7月4日から約2週間実施し、本トレンチを中心に行った。本トレンチの成果については次回報告することになるが、過去3次にわたる調査の結果、下層の貝層に伊波式や萩堂式が集中していることが分り、地山の黄褐色土層では新型式の室川下層式土器を発見した。また、第1次調査の際着手できなかったMトレンチの3・5・7の各ピットも第2～3次調査によって一応完了することができた。

前述のように伊波式や萩堂式を主体とするMトレンチは貝塚を構成せず、Sトレンチでは貝層中に両型式が多かった。このような両トレンチの相違を検討するため、両トレンチの中間にテストピット(O-7)を設け調査を行った結果、後述のようにSトレンチの下層の貝層がこの地域に延びていることが分った。

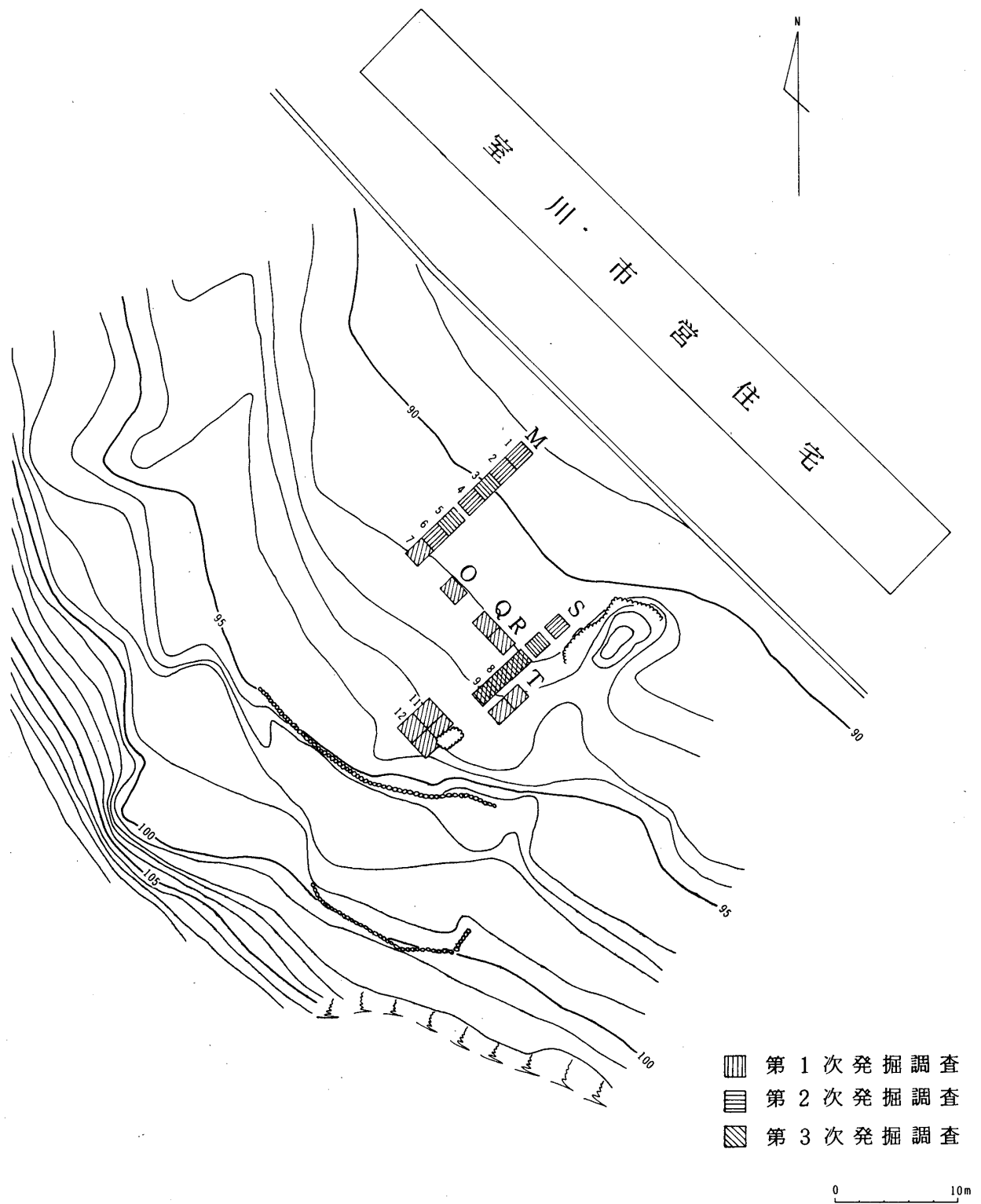
過去3回の発掘調査を通じ、Mトレンチ、Sトレンチ、テストピット(O-7)の3地区については調査を完了することができた。今回はこの3地区について報告を行う予定をしていたが、Sトレンチの出土遺物が膨大で、整理におお時間を要し、そのため今回はMトレンチとテスト・ピットの成果について報告書をまとめることにした。

遺物の整理、実測図の作成および執筆は下記のように分担し、写真は比嘉賀盛が担当した。

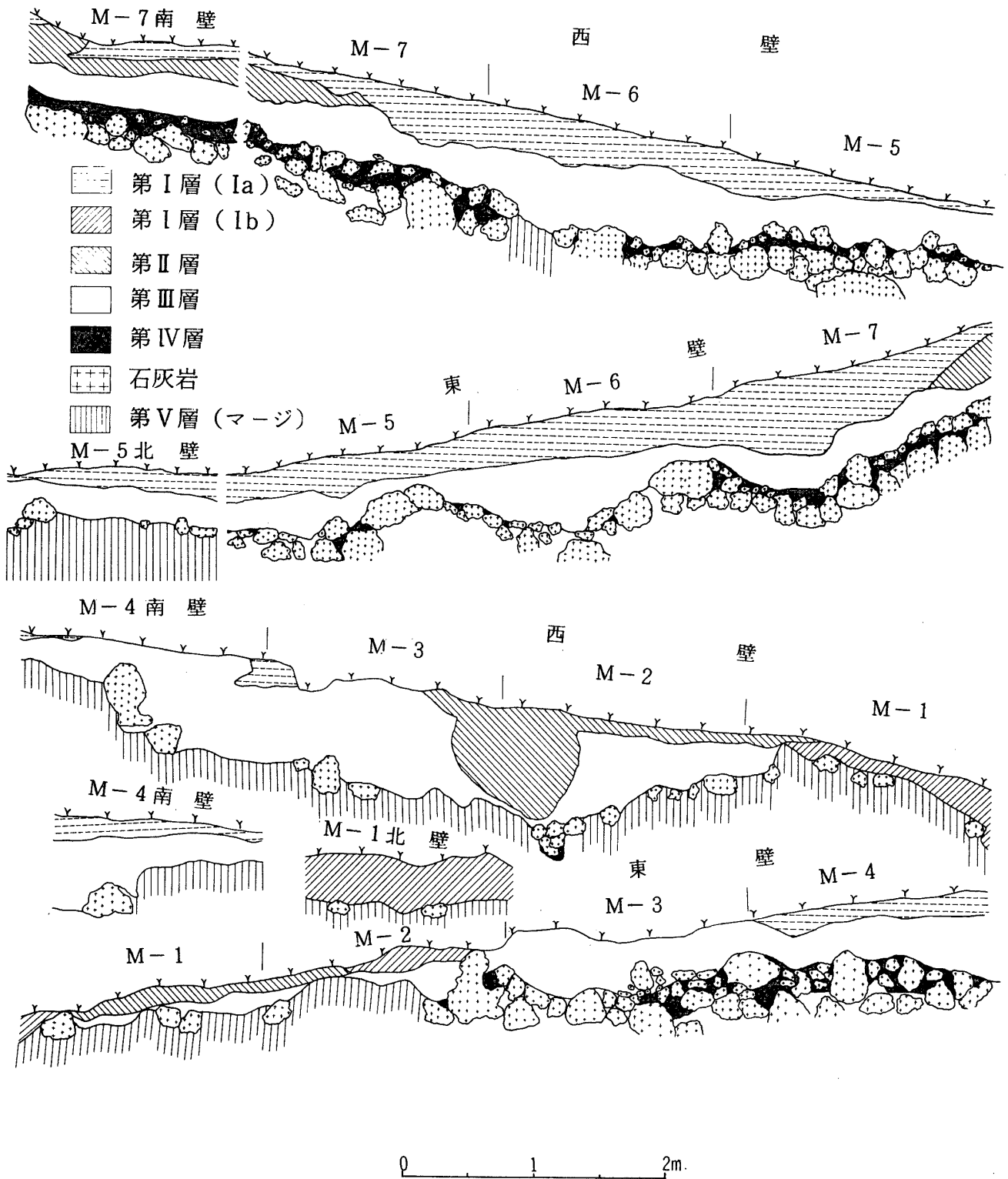
記

Mトレンチ 玉城朝健・平安秀子  
テスト・ピット 東江千栄子





第3図 第1～3次発掘調査のトレンチ



第4図 Mトレンチ側壁図

## IV M ト レ ン チ

Mトレンチは先にも述べたように、本遺跡西北端部に設けた1.5×14mの試掘溝で、今回の第3次発掘調査で予定の範囲を終了した。

この地域は駐車場造成作業時に損壊を受けた箇所当り、上部はブルによって剥ぎ取られ遺物包含層の露頭が観察された。現地表面は南西から北東に向けてゆるやかに傾斜している。

本トレンチではリュウキュウザルボウが6個検出されたが、貝塚を構成するところまではいかず、その点、同種の土器を埋存するSトレンチ下層（混土貝層）と異なっている。

### i) 層 序

層序は5層からなり、最も深い所は地表下110cm、浅い所は5cmであった。

第I層は表土攪乱層で、斜面上方と下方の2ヶ所で見受けられた。上方の表層は主としてシルト質泥岩（Ia層）からなり、10～40cmの厚さを有し、ピットM-7からピットM-4の一部を被覆していた。シルト質泥岩層は、本来ならマージ（赤土）層や琉球石灰岩の下位にくる地層であり、考古学的には無遺物層であるが、この層が本地域で最上位にあるということは攪乱を意味するもので、本層からは土器や石器など先史遺物のほかに、鉄釘、ガラスの破片、現代陶磁片などが検出された。これをIa層とし、斜面下方の攪乱層（Ib層）から区別したが、このIa層はピットM-7で厚く、下方へ次第に薄くなり、ピットM-4あたりで消滅する。

斜面下方の攪乱層はピットM-2東壁側の一部とM-1西北側および東壁の一部でみられ、ここでは黒土層とマージ（赤土）が入り乱れ、先史遺物の他にガラスの破片なども散見された。土質の相違からこの部分の攪乱層をIb層とし、上方のIa層と区別した。しかし、M-1の南壁側には一部未攪乱層があり土器片が若干採集された。なお、Ib層はM-1西壁側では一部第II層に被われ、下位の層に見えるが、M-1地区攪乱後、上方の

第II層露頭部が浸蝕などにより被覆したものである。

第II層はM-7の南半部と、ピットM-3以東（斜面下方）に見られた10～20cmの薄い暗褐色土層で、ピットM-2の西壁側では一部に深さ60cmに及ぶ箇所があった。各期の土器が得られたが、伊波・荻堂系の土器が比較的多かった。この層は土の色では下位の第III層と区別し難いが、硬度に差があり、土層は第III層により軟弱であった。

自然遺物としては、獣魚骨が比較的多かった。貝はみられなかった。

第III層は黒褐色土層で、10～60cmの厚さを有する。この層は一部に露頭部（M-3）が見られるが、安定した層で、人工遺物の出土量は最も多かった。土器は伊波式や荻堂式土器が主体を成している。

第IV層は第III層の下位にくる移行層で石灰岩礫の間にみられ、礫層の上部はやや黒味がかかったマージ（赤土）で埋められ、遺物が僅かながら検出された。同じ礫層でも下部は他の地山と同じ赤土が混入し、無遺物層となる。この礫層はトレンチ上方（ピットM-5～7）ではやや広範囲に見られたが、下方（ピットM-1～4）ではM-3・4の東壁側に集中していた。

第V層は礫層の下位にくる赤土の層で、下方のM-1～4地区ではM-2以北とM-3・4の西北側でみられ、この部分では礫層が介在せず、第III層は直接第V層に接していた。また、M-5～7地区では前述のように礫層は広範囲にみられたが、第III層の黒土層が直接第V層の赤土層に接する箇所も見受けられた。

### ii) 自然遺物

Mトレンチ出土の自然遺物には、貝・獣魚骨・自然礫等がある。貝はリュウキュウザルボウが6個検出されただけで、本地区が貝塚を構成していないことは前述のとおりである。獣魚骨の一部を長谷川善和氏に見ていただいたところ、下記の種が含まれていることが分った。

海 棲

ジュゴン・ブダイ

陸 棲

イノシシ・イヌ・ケナガネズミ・カエル

上記のうちで最も多かったのはイノシシで、各ピットで出土をみた。イヌは下顎骨が4個のほか下顎から遊離した歯が16個、大腿骨が2本発見された。ケナガネズミは現在では沖縄本島北部にしか生息していないが、地質時代には南琉球の宮古諸島にも分布していたようで、沖縄本島では港川遺跡(4)でも報告がある。

本トレンチ出土の自然礫を琉球大学の木崎甲子郎教授に鑑定していただいたところ、11種含まれていることが分った。全体としては名護層に由来するものが最も多かった。石質および出土量は第1表のとおりである。

iii) 人工遺物

本トレンチ出土の人工遺物は土器、石器、骨器(牙製品を含む)の3種で、貝器は出土がなかった。以下、上記諸製品について簡単に説明する。

A) 骨牙製品

本トレンチ発見の骨牙製品は8点で、実用品と

装飾品に分けられる。

実用品の明確なものは第8図7・8(第10図版7・8)の2点で、骨錐と考えられるが、いずれも基部を欠損している。7は全面に研磨が施され、横断面は扁平である。第Ⅲ層40~50cmレベルの出土で、長さは5.2cm、幅は約1cmである。8は尖端部の片面のみを研磨加工したもので、横断面は扁平である。長さ4cm、幅0.9cmで第Ⅱ層30~40cmレベルの出土。

装飾品とみられるものは5点である(同図9~13)。9(第10図版5)は猪の牙を利用したもので、図の左端には小孔の一部が認められるが、破損が大きく、全形は不明である。第22図28(ピットO-7)に類似した製品であろう。

10(同図版6)は管骨の一部を切り取り、周縁を研磨したもので、下端は欠失し全形はうかがえない。原形は長方形を呈していたかと思われる。長さ2cm、幅0.8cm、第Ⅱ層30~40cmレベルの出土。

11・12(同図版2・4)はイタチザメの歯の骨質部に径約2mmの2孔を両面から穿ったもので、2孔とも両側上部に糸ずれの痕がみられる。両者ともサイズは2×2cmほどで、完形品である。11は第Ⅱ層0~10cmレベル、12は第Ⅲ層20~30cmレベルの出土。識名貝塚でも類例の報告(5)がある。

第1表 Mトレンチ出土の自然礫

層序	石材	砂岩	輝緑岩	輝緑凝灰岩	千枚岩質輝緑凝灰岩	シルト岩	砂質千枚岩	凝灰質千枚岩	粘板岩	石英	ヒン	軽石	チャートの剥片	計
表面採集													1	1
第Ⅰ層													3	3
第Ⅱ層		23		1		1			4	1			5	35
第Ⅲ層		43	2	6	2	1	4	1	2		3	1	32	97
第Ⅳ層		18		2									3	23
層序不明		12	1	1						1			1	16
計		96	3	10	2	2	4	1	6	2	3	1	45	175

以上の他に同図13（同図版3）に示したものは、前記11・12とは別のサメの歯を利用したもので、裏面より孔を穿っているが、表面には達していない。この標品は上部が破損し、そのため1孔だけか複数の孔が穿たれていたかも不明である。実用品か装飾品か、類例の出土を俟って検討したい。第Ⅲ層40～50cmレベルの出土。

5（同図版1）は扁平な肋骨を加工したもので、全体的に彎曲している。彎曲部内面の一側縁には基部側から先端にかけて浅い刻みが密に施されており、他の側縁にも同種の刻みがみられるが、そこでは基部側だけに存し、先端部におよんでいない。外面は光沢を有するほど磨かれている。基部は破損しているがこれに接続する破片が1点あり、孔が穿たれている。この孔は一方から穿ったものようである。現資料から孔が幾つ穿たれていたかは不明。破損前のサイズは分らないが、現資料は長さ12.8cm、最大幅1.5cm、厚さはほぼ一定しており、約6mmである。なお、類例は「鋸歯状刀子」として崎樋川貝塚(6)で報告されている。第Ⅲ層40～50cmレベルの出土。

以上、骨牙製品8点について記述したが、そのうち同図5・9・10・11・13の5点は本誌前号で紹介した資料である。

## B) 石器

本トレンチの石器は用途不明の小破片も含め総数105個発見された。そのうち用途の判明するものは、石斧・磨石・敲石・石皿・凹石・グレイヴィング・ツールなど6種である。その他に扁平楕円礫や垂飾りかともみられる石製品が1点ある。種類および出土量は第2表のとおりである。

### 石斧

石斧は完形2個、破損品27個の計29個である。層位的にみると、第Ⅰ層で7点、第Ⅱ層で6点、第Ⅲ層で16点、第Ⅳ層では出土がなかった。これを製法の上から打製・磨製（半磨製、局部磨製を含む）に大別した。

打製石斧は2点である。第5図2（第3図版2）

は、やや肉厚の刃部破片で、極く一部に自然面が認められるほかは全面調整剝離が加えられている。ヒン岩製で、ピットM-4第Ⅲ層の出土。同図1（同図版1）は完形に近い扁平の打製石斧で、一面は自然面をそのまま利用、他面および両側縁は調整剝離によって整形、長軸に平行の両側縁には抉りが設けられている。砂岩製で表採品。

磨製石斧（半磨製・局部磨製を含む）は、破損品を含め27点の出土があったが、そのうち主なものの17点を第5・6図に示した。横断面でみると概ね扁平、扁楕円形、楕円形の3種に分類できる。

扁平に属するものは7点である。第5図3（第5図版1）は完形の片刃石斧で、打裂、敲打のあと表裏両面から研磨によって刃を研ぎ出している。刃先は極めて鋭い。表面は刃部のみに研磨が施され、大部分は敲打仕上げとなっているが、一部に裂痕も見受けられる。敲打痕の部分は手なれ様の滑面となっている。裏面は刃部および身の中央部に研磨が施されているが、裂痕・敲打痕が大部分を占めている。M-3、第Ⅲ層の出土で、輝緑岩製。

同図4（同図版2）も扁平の片刃石斧で頭部を欠く。刃部の一部と側縁部に裂痕が認められるが、表裏両面とも大部分自然面を残している。刃部は両面から研ぎ出され、鋭利である。ピットM-6第Ⅲ層の出土で、輝緑凝灰岩製。

同図6（同図版6）は扁平片刃石斧の刃部破片で、残存部は全面研磨が認められる。おそらく全面磨製の石斧であったかと思われる。ピットM-6第Ⅲ層の出土で、輝緑凝灰岩製。

同図7（同図版4）は扁平の自然礫を利用したもので、刃部のみ両面研磨が施されているが徹底していない。刃部を除けば表面は打裂、裏面は敲打仕上げとなっている。M-7第Ⅲ層の出土で輝緑凝灰岩製。

同図5は扁平型に属するとみられる石斧の刃部破片である。上面は研磨面が大部分を占めているが、裏面は刃部の一部を残して欠失している。刃先は比較的鋭い。M-4第Ⅲ層の出土で、輝緑凝灰岩製。

同図8（同図版5）は石斧の破損品を再加工、利用したもので、研磨面は破損前の形状をとどめている。再利用するにあたって縁辺部を打ち欠きによって調整、裏面は剝離面の一端を磨いて刃としている。M-2第II層の出土で、輝緑岩製。

同図9（同図版3）は扁平両刃の刃部破片で、刃部のみ研磨された、いわゆる局部磨製の石斧である。刃部以外は敲打仕上げで、一部に裂痕を残す箇所もある。短冊型に類した形態を有していたかと思われる。M-6第III層の出土で輝緑凝灰岩製。

同図10（第4図版1）は断面長楕円形の局部磨製石斧で、両刃である。頭部は欠失。M-7第I層の出土で、凝灰角礫岩製。

第6図1（第4図版2）も断面扁楕円形に属するものであるが、一面が平坦で、他面が彎曲し、いわゆるアヒルのクチバシ状を呈する。彎曲面は大部分が研磨されているが、破損部以外では敲打痕を残す部分もある。他の平坦の面は刃部を除き敲打仕上げとなっている。M-4第II層の出土で、輝緑岩製。

同図2（同図版3）は図でははっきりしないが、横断面は前記9に類似し、いわゆるアヒルのクチバシ状を呈している。彎曲面は一部研磨、他は自然面。裏面の平坦部は敲打仕上げとなっており、刃部のみ研磨されている。M-3第III層の出土で、輝緑凝灰岩製。

同図3・4・5はそれぞれ頭部・胴部の破片で、横断面は楕円型に属するものと思われる。3はやや扁平であるが、片面は研磨が施され、他の面は

敲打仕上げとなっている。M-6第III層の出土で、輝緑岩製。同図4（第5図版9）は一つの側面と平面の一部を除き研磨が施されている。磨製石斧の頭部と思われる。M-7第III層の出土で、輝緑凝灰岩製。同図5は磨製石斧の胴部破片である。M-6第III層の出土で、輝緑凝灰岩製。

同図6（第4図版4）は蛤刃磨製石斧の半欠品で、横断面は楕円形、敲打のあと研磨を施しているが、側縁部の一部と片面の平坦部には敲打痕が未だかなり残っている。M-6第III層の出土で、輝緑岩製。

同図7（同図版5）は刃部が広く基部が尖って平面がいわゆる三角形をなすもので、刃部を欠失する。敲打や裂痕が僅かに認められるが、研磨は比較的徹底している。側面は垂直方向に整形され、全体として断面は四角形に近づいている。M-6第III層の出土で、輝緑岩製。

同図8（第5図版8）は乳棒状石斧の頭部破片である。一部研磨の施された箇所があるが、大部分は敲打仕上げである。断面でみると一面は平坦で、他の面は彎曲しているが、全体としては楕円形。M-1、第I層の出土で輝緑凝灰岩製。

同図9（同図版7）は刃部が欠損しているが、ノミ形石斧に属すると思われるもので、一面は自然面を残すが、他面は研磨が施されている。現存部の長さ8.4cm、幅2.3cm、石質は輝緑凝灰岩で、表土層よりの出土である。

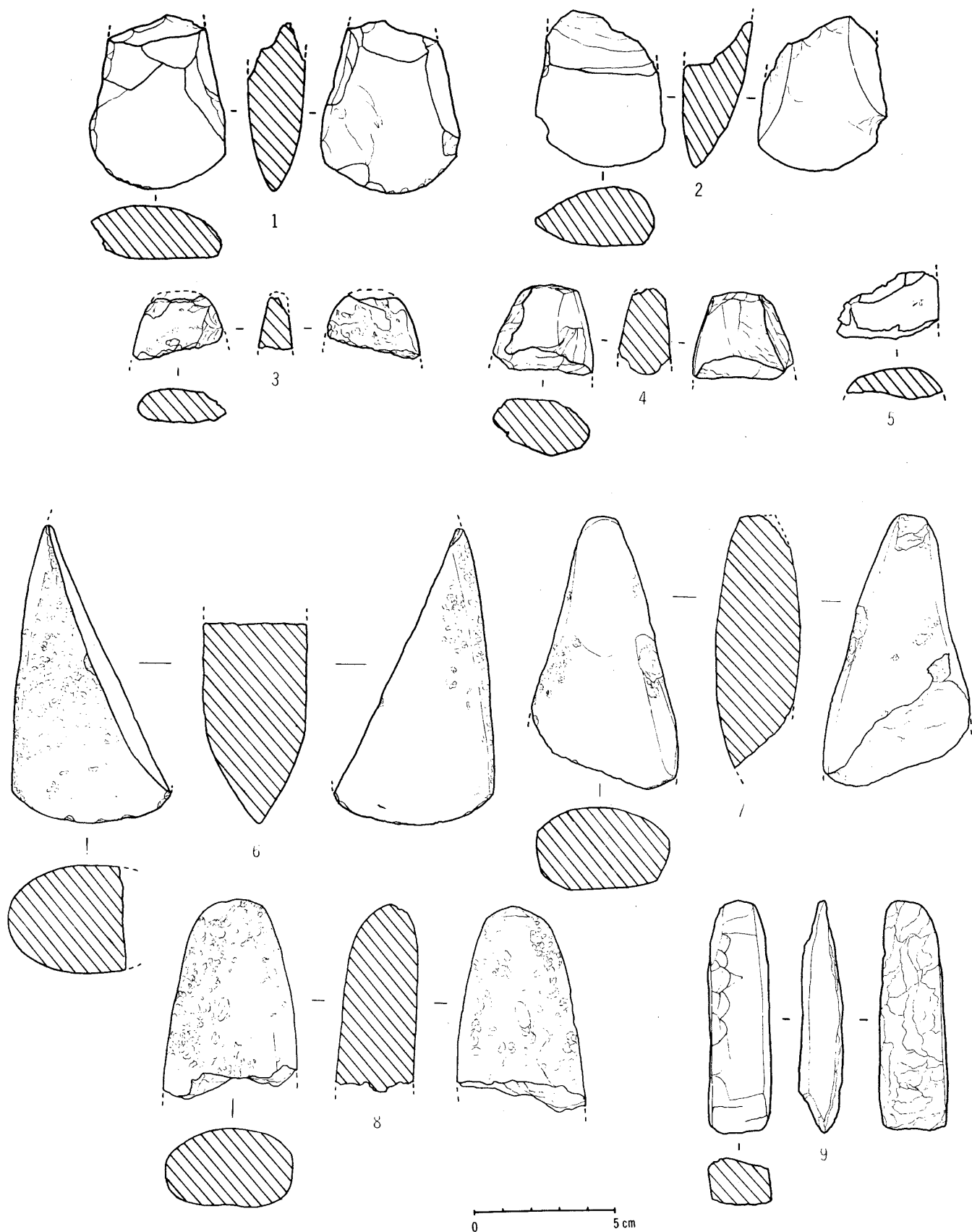
以上の他に石斧の破片が11点あるが、資料が小さく、形状や特徴がはっきりつかめないで、記述を省略した。

表2表 Mトレンチ出土の石器および骨製品

層序	種類	石斧	磨石	敲打石	凹石	石皿	扁平楕円礫	石英	垂飾	チャート製品	不明	計	骨製品
	表面採集											2	2
第I層		7				1					3	11	
第II層		6	5			2		1			13	27	1
第III層		16	5	3	1	2	1	3		2	27	60	7
第IV層			1								4	5	
計		29	11	3	1	5	1	3	1	2	49	105	8

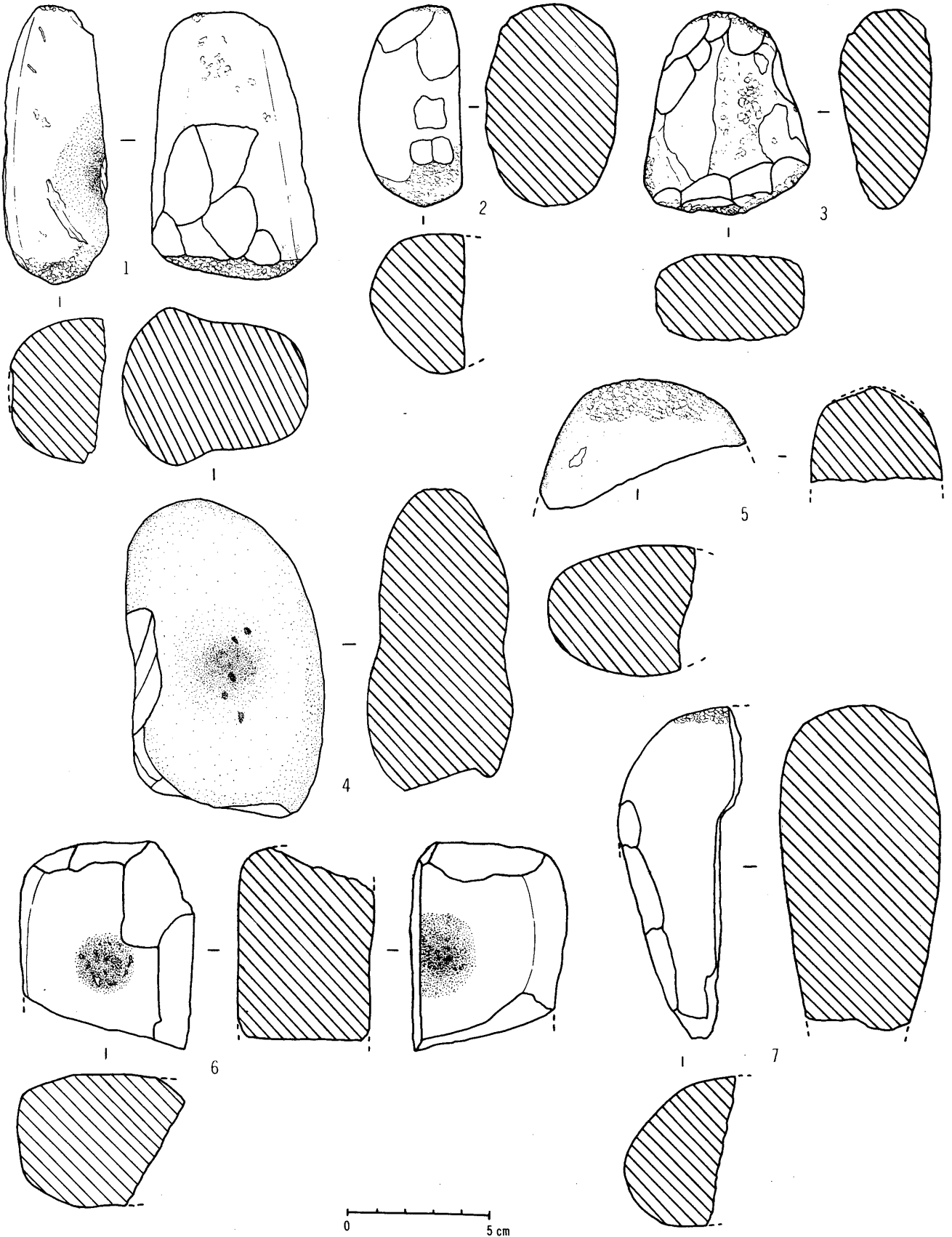


第5図 Mトレンチの石器

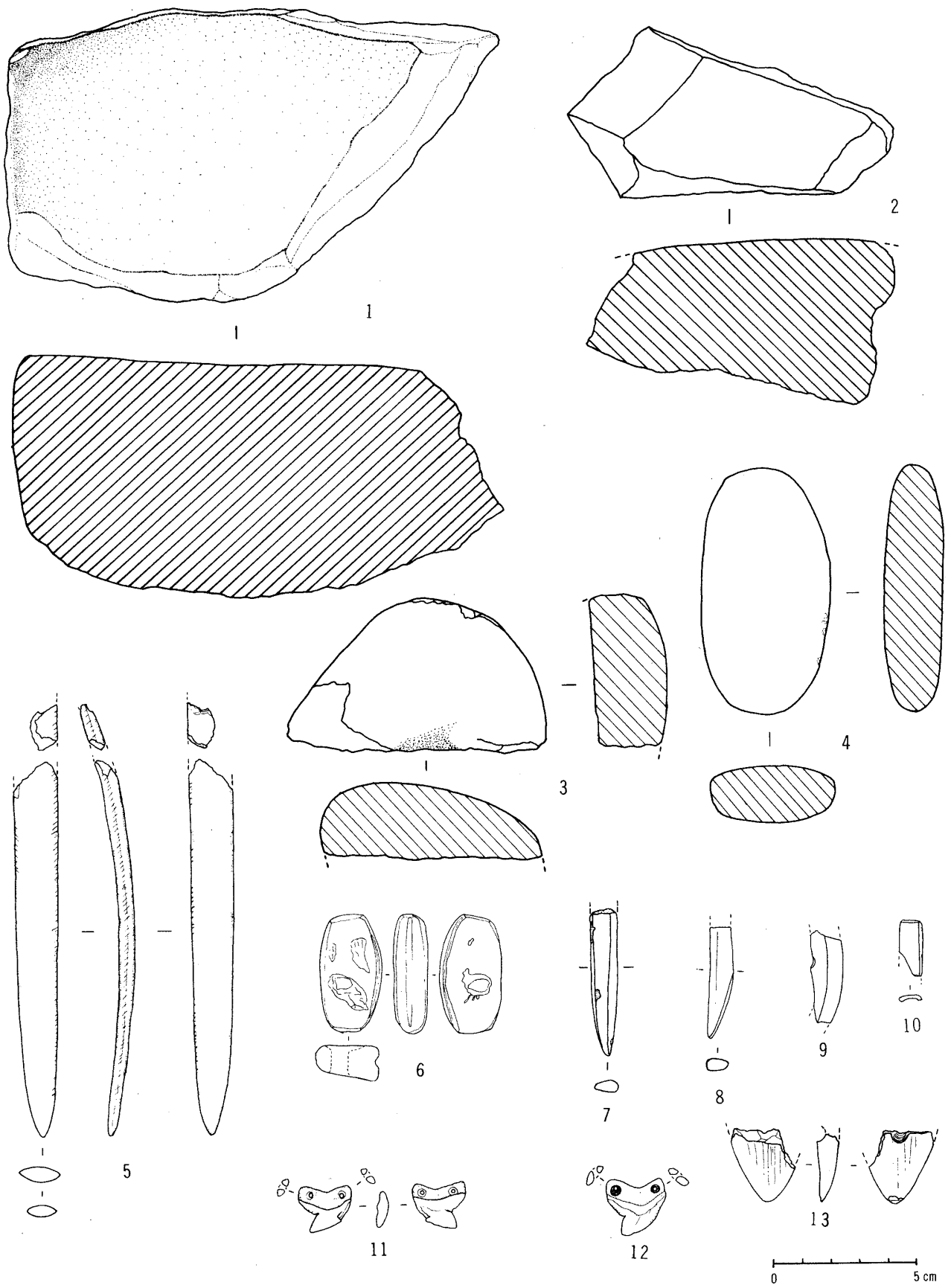


第6図 Mトレンチの石器





第7図 Mトレンチの石器



第8図 Mトレンチ出土の石器および骨牙製品

## 敲石

これに分類したのは3個であるが、いずれも石器の破損したものを敲石に転用したものである。

第7図1(第7図版8)は磨石の側縁部破片で、上下二面は研磨され、そのうちの一面、中央部寄りの箇所には敲打による浅い凹みが認められる。以上の状況からは磨石の部類に含めるべきであるが、この石器は破損後、敲石に利用しているので、磨石の部から外した。長軸の下端が敲石としての使用面である。砂岩製で、M-6第Ⅲ層の出土。同図2(第7図版4)も前記と同じく磨石の破片を敲石に使用したもので、上下両端に敲打痕が認められる。小型の敲石である。砂岩製で、M-6第Ⅲ層の出土。

同図3(第6図版4)は石斧の破片を利用したもので、両側縁には浅い抉りが設けられ、下端刃部側の面を敲打に使用している。砂岩製で、M-7第Ⅲ層の出土。この石器は敲面が若干滑らかになっており、敲打だけでなく、播りの用途も有していたかと考えられる。国分直一教授の「皮革加工具」(7)や白木原和美教授の「搗判用」(8)に類するものかもしれない。

## 凹石

第7図4(同図版5)に示した1例だけで、上下両面の中央部に浅い凹みが認められる。風化のためか、磨面はみられず、全面ザラザラしている。砂岩製で、M-4第Ⅲ層の出土。

## 磨石

11点の発見があり、層位別にみると第Ⅱ層で5点、第Ⅲ層で5点、第Ⅳ層で1点の計11点である。完形品はなく、すべて破片である。大きさはさまざまで、平面形の推定できるのは僅かに3点だけである。第7図5・7(第7図版5・6)に示した2点は、平面形が石鱗状に近いものであろう。いずれも第Ⅱ層の出土である。図示はしなかったが、この形状に属するものが、同じく第Ⅱ層で1点検出されている。

同図6(第8図版5)は不規則な形体を有する

石器の破片で、磨面は光沢を有するほど磨かれており、そのことから磨石の1種かと考えられるものである。相対する二面には凹みが認められ、凹石としても使用されたであろう。第Ⅱ層の出土である。

磨石にはすべて砂岩が用いられている。前にも記したように11点の発見があったが、そのほとんどが小破片のため形状は不明で、層位上の変化をおさえることができなかった。

## 石皿

5個発見されたが、破損が著しく、片面のみを使用したか、それとも両面使用したかは不明。磨面は中央部へ僅かに傾斜している。

第8図1はM-3第Ⅱ層、同図2(第8図版9)はM-7第Ⅱ層、同図版8の6はM-3第1層、同図版10はM-4第Ⅲ層の出土で、いずれも砂岩製。

## 扁平楕円礫

第8図4(第8図版4)に示したもので、用途は不明だが、渡具知東原遺跡(9)でも曾畑式土器に伴ってこの種の礫が若干発見されているので記載することにした。本遺跡での発見はこの1個だけで、M-6第Ⅲ層の出土である。石質は砂岩。

## チャート製品

本トレンチではチャートの剥片が46点検出された。第Ⅰ層で3点、第Ⅱ層で5点、第Ⅲ層で34点、第Ⅳ層で3点、出土層位不明1点の計46点である。その他に表採品が1点あり、それを含めると47点となる。これらの剥片を加藤晋平氏にみて頂いたところ、第9図版3はグレイビング・トゥール、同図版2はコアの由で、前者はM-4第Ⅲ層40~50cmレベル、後者はM-6第Ⅲ層10~20cmレベルの出土である。

## 石製装身具

第8図6(第9図版1)の製品で、一部に自然の凹みを残すところもあるが、研磨は徹底してい

て全面光沢を有するほど磨かれている。平面の中央部近くには1孔が設けられているが、これは自然の凹みを利用して両側から穿ったもので、径は約5mmである。また、弧状に彎曲する側面の平坦部には、図のように中央部を長軸の方向に浅い溝が1本走っている。この溝はこの側面だけに限られ、周縁を圍繞しない。輝緑凝灰岩製で、長さ4cm、幅2cm、厚さ約1cmの完形品。M-3第II層の出土。

#### その他

研磨痕を有し、明らかに加工品であるが、小破片のため、その用途を推察し得ないものが第2表のように49点ある。第I層で3点、第II層で13点、第III層で27点、第IV層で4点出土し、その他に表採品が2点ある。石質は砂岩、輝緑岩、輝緑凝灰岩、砂質千枚岩、粘板岩の5種で、砂岩は各層で見受けられたが、他はIII~IV層に限られていた。

#### C) 土器

本トレンチでは第1~3次調査を通じ2,743点の土器片を得た。復元して完形を示しうる資料が数点、また、図上復元可能なものが20点ほどある。これらの土器は沖縄の土器と奄美系のものに大別され、その他に製作地不詳のものも1点発見されている。

土器は奄美系や製作地不詳のものを除くと6類に大別される。しかし、前記6類に分類せしめ得ないものが若干あり、それらを暫定的に第七類として取扱うことにした。以上の七類の中では伊波式土器(第二類)と荻堂式土器(第三類)が最も多く、他の型式は僅少であった。

以下、沖縄現地の土器から記述をはじめ。

##### a 第一類土器(室川下層式土器)

本誌前号で「赤連系」として紹介した土器であるが、これまでの調査から本遺跡最古の型式であることが分かったので、室川下層式の呼称を与えることにする。本トレンチでは23点の破片が採集された。しかし、Sトレンチのように最下層に集中

することはなく、各層で出土をみた。層位的出土状況は第3表のとおりで、第III層で最も多かった。

23点のうち文様を有するものは7点、条痕を有するものは13点である。23個の中には口縁破片が1点、底部破片が1点含まれている。他は胴部の破片である。

この土器を文様の種類によって次の3種に細分した。

第1種 篋のみで文様を施文したもの

第2種 篋と貝の腹縁を使用して施文したもの

第3種 貝の腹縁のみによって施文したもの

以下、層位別に記述する。

第I層では2点得られた。そのうちの1点は無文の胴部破片、他の1点は第9図5(第10図版12)に示したもので、篋による大・小の列点文が施されている。大型・小型とも施文は浅い。器色は暗褐色で、多量の石英のほか少量の雲母を含む。

第II層では3点検出されたが、いずれも無文の胴部破片である。

第III層では14点の出土があり、うち6点は有文、1点は内面だけに条痕を施している。第9図1(同図版9)は唯一の口縁破片で、口唇部は一部欠けているが、断面は舌状を呈する。表裏に篋描きの斜行の刻文を施している。下端は粘土帯の接合部で割れている。器色はやや赤味を帯び、胎土には石英のほか少量の雲母がみられる。

同図2(同図版10)は列点文が斜めに施されている例で、点は太めで、比較的幅のある篋を使用している。刺突は深い。胴部の破片で、裏面に条痕はみられない。石英のほか僅かに雲母を含む。

同図3(同図版11)は先端の尖った棒状工具で刺突を施したもので、3列の列点文が斜めに走っている。器壁は薄く、条痕はみられない。多量の石英、少量の雲母を含む。

以上は篋や棒状工具で施文したもので、第1種に属する資料である。

同図4(同図版13)は第2種に属するもので、篋描きの列点文とその上下に貝殻腹縁による小型列点文が施されている。前者は深く、後者は浅い。暗褐色を呈し、多量の石英、少量の雲母を含む。

第Ⅲ層出土の第2種はこの1点だけである。

第3種は同図6（同図版15）と7（同図版14）に示した2個で、貝殻の腹縁のみによる文様を施したとみられるものである。6は斜行の列点文と横位の列点文の組み合わせをもつもので、裏面は無文だが、条痕を消した形跡がある。暗褐色で多量の石英のほか少量の雲母を含む。7は表面に列点文がみられるが、摩耗のため、文様は消えかかっている。この破片は上下とも接合部で破損しているため、粘土帯の幅を知ることのできる資料である。色は明るい褐色、多量の石英を含む。条痕はみられない。

条痕を施すものは同図10の1点だけで、内面にだけ施されている。第Ⅲ層出土の他の7点は無文の胴部破片である。

以上の他に第Ⅲ層では底部の破片が1点検出されている。第20図34（第19図版14）の乳房状尖底はピットM-5第Ⅲ層最下部（地山直上）で発見されたもので、後項で詳記するように第Ⅰ類土器の底部と考えられるものである。

のため消えかかっている。表面の条痕は縦位の方向、裏面は横あるいは斜めの方向である。同図9は裏面だけに条痕が施されている。図示以外のもので1点は表面に条痕が施されているが、これも摩耗のため消えかかっている。他の1点は表裏とも条痕を消した形跡がうかがえる。

第一類土器は一般に脆く、器面の摩耗したものが多く、器厚は1cm前後の厚さのものが多く、石英を多量に含み、また雲母を少量混ざるものがある。器色は暗褐色のものが多いが、明るい褐色のものや、幾分黒味を帯びたものなどもある。

この土器は採集資料が少なく、まだ、全形を窺い得ないが、先述の乳房状尖底はこの土器の底形の一部を示すものとみてよからう。

#### b 第二類土器（伊波式土器）

従来の伊波式土器に高宮の熱田原式(10)を含めたものを第二類土器とした。この土器の特徴は次のように要約される。

第3表 Mトレンチ出土の土器

層序	型式	室川下層式	伊波式	荻堂式	大山式	カヤウチバンタ式	宇佐浜式	その他の土器	奄美系土器	底部	計
表面採集			1	4					3	1	9
第Ⅰ層		2	3	12	1	2		2	2	9	33
第Ⅱ層		3	41	52	1	4	6	6	4	50	167
第Ⅲ層		14	104	120	8	3	2	8	24	77	360
第Ⅳ層		4	14	3		1				4	26
層序不明			7		1					2	10
計		23	170	191	11	10	8	16	33	143	605

第Ⅳ層では4点出土している。すべて瑣細な胴部破片で、いずれも条痕を施すか、さもなければ消した形跡がある。文様を施すものはない。第9図8は表裏に条痕を施す例で、表面のものは摩耗

#### イ) 器形

一般に深鉢形で、口縁部は外反し、頸部でしまり、胴部がわずかに脹る平底器形の土器である。口縁が開くため、器の最大径は一般に口縁にあ

る。

口縁部には普通4個の山形突起が付けられる。山形突起はチェvron状に大きな山形をつくるものや低平なものなどがあるが、荻堂式にみられるような意識的に山形頂部を瘤状に肥厚させる例は見受けられなかった。

本トレンチ検出の伊波式土器は一般に山形頂部でコーナー（上面観）をつくるが、第10図の4は特にそのコーナーの著しいものである。また、この土器は特異の頸部を有し、「く」の字形断面の著しいものである。このように頸部が著しく屈折する例は少なく、本トレンチではこの1例と他にこの器形に属するのではないかとみられる破片が1例（第11図23）あるだけである。

本遺跡出土の伊波式土器で、底部まで完全に復元される土器はないが、渡名喜島の東貝塚例(11)やこの型式の単純遺跡である伊波貝塚(12)および熱田原貝塚(10)を参考にすると、底部はすべて平底と考えていいだろう。

#### ロ) サイズ

サイズは復元された5個および他の口縁破片を参考にすると、口径が20cm前後のものと、15cm前後のもの2種が得られ、本トレンチでは10cm前後の小型のものは発見されていない。高さは大体10～20cmの間におさまり、20cmを越すのは稀である。

本トレンチ出土のものについてみると、第10図1・3は大型に属し、同図2・4および第11図24は中型のものである。

#### ハ) 文 様

文様は胴上部および口唇部に限られ、口縁部内面や胴下半部に施文するものはない。施文具には普通又状工具が用いられるが、稀に単篋を使用する場合もある。口縁に沿って横位に施される文様には点刻文が圧倒的である。次に施文部位別に文様をみてみたい。

##### 口唇部

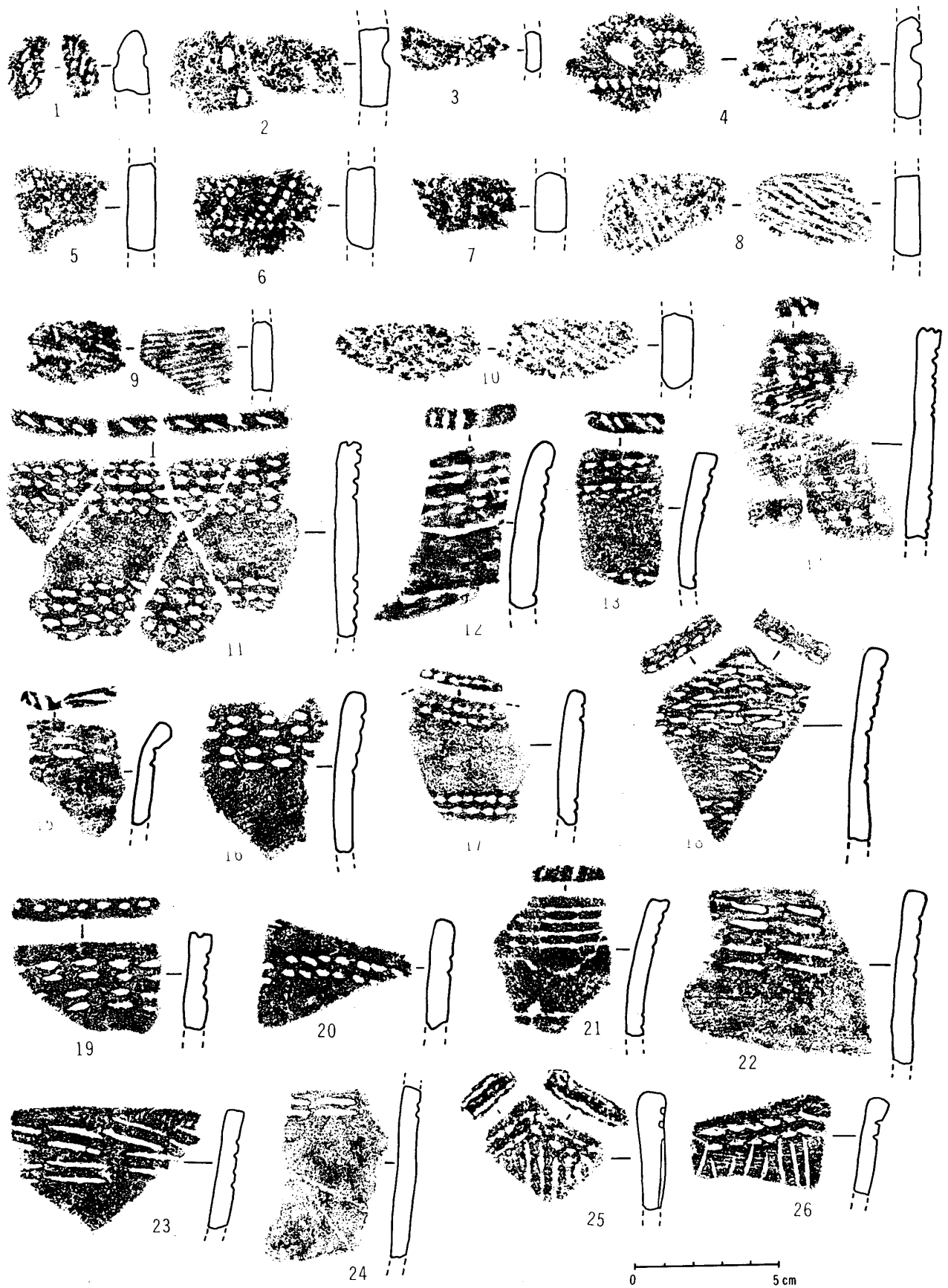
口唇部を有する破片88点について、文様の有無、

および文様の種類などを調べてみた。

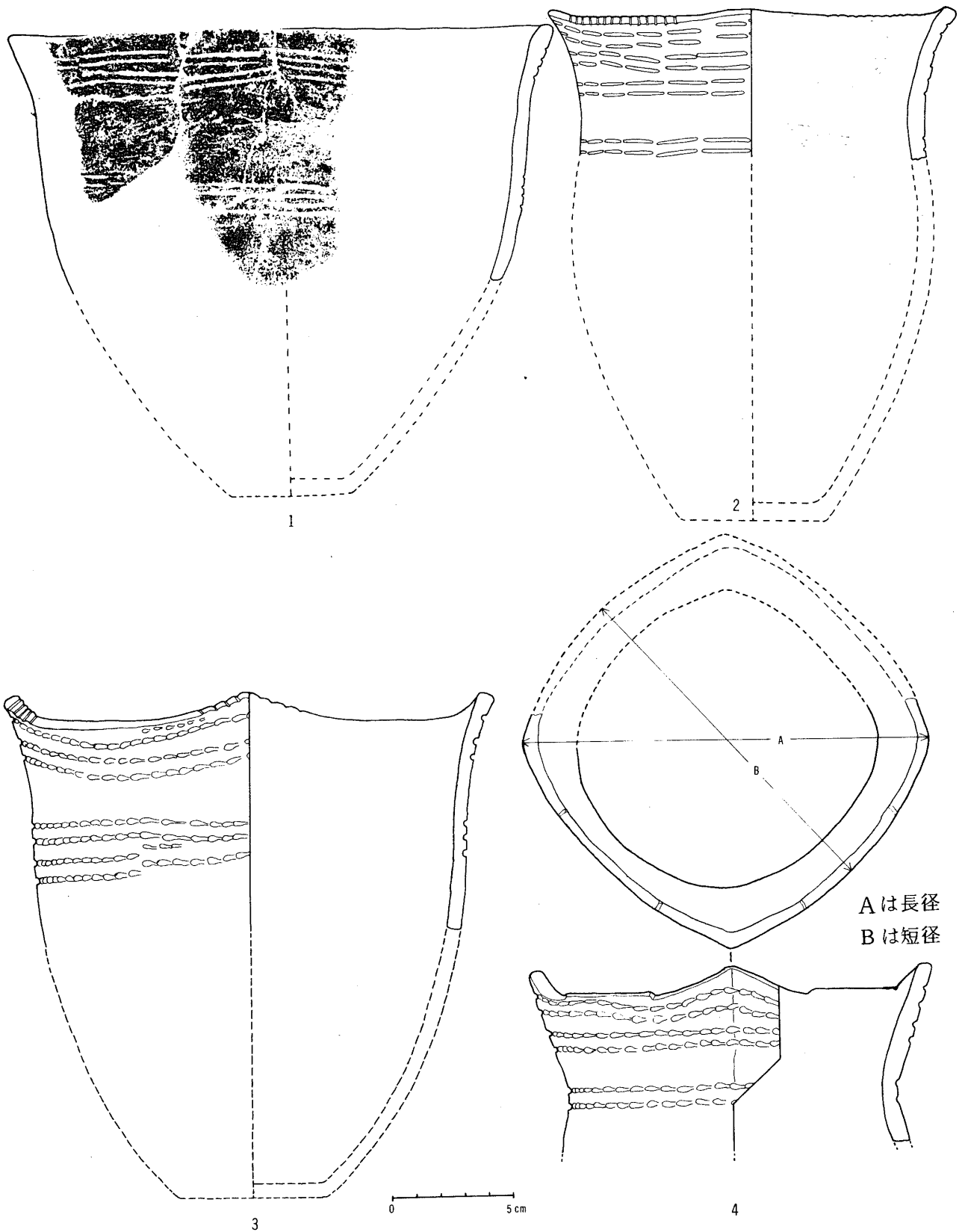
まず文様の有無についてみると50点が口唇部無文、38点が何らかの文様を有しており、無文の方が若干多い。このことは有文と無文が半々の割合で在するように見えるが、後述するように必ずしも口唇全体に施文するとは限らないから、無文としたものの中には完形において、有文口唇の一部をなすものが含まれている可能性が強い。このことを考慮に入れると伊波式土器は大部分が口唇部に施文するものと考えられる。しかし、中には無文に終始したとみられるものもある。（第10図1、第22図版4）。無文のものは伊波式としてはむしろ稀なケースであろう。

口唇上の文様は5種類認められる。点刻、刺突押しき・沈線・刻目の5種である。後者の2種について本文では2cm以上のものを沈線、1cm以下のものを刻目として区別した。また、又状工具により刺突したものを点刻文、単篋によるものを刺突文とした。文様の種類は熱田原貝塚(10)より少ない。出土量は点刻4点、刺突8点、押しき1点、沈線8点、刻目文17点で、刻目文が最も多く、沈線・刺突文がそれに次ぐ。沈線・刻目は又状・単篋の2種類の工具が使用されている。これらの文様を工具別にみると、沈線では又状3点、単篋5点、刻目では又状6点、単篋11点となり、単篋による施文が優位を占めている。

口唇上の文様を口頸部文様との関連でみると、点刻文は第1種で3点、第2種がなく、不明1点となり、いずれも口縁部上段の文様と一致している。刺突文は第1種で3点、第2種で2点、第3種で1点で、口縁部上段の文様と一致するのは第2種Ⅱの1点と、上段の文様を省略する第2種Ⅲでは下段の文様と一致している。押しき文の1点は第1種にみられるが、口縁部上段の文様とは一致しない。沈線文は第1種で2点、第2種で5点、不明1点で、口縁部上段の文様と一致するのは第2種に1例（第11図24）あるだけである。刻目文は第1種で11点、第2種で4点、不明2点で口縁上段の文様と一致するのは第1種に又状工具によるものが3点あるだけである。



第9図 Mトレンチ出土の第一類土器（室川下層式 = 1 ~ 10）および第二類土器（伊波式 = 11 ~ 26）



第10図 Mトレンチ出土の第二類土器（伊波式）



第4表 伊波式土器種別出土表

種 層序	第1種	第2種				第3種	種不明	計
		(I)	II	III	IV			
表面採集		1						1
第I層		2					1	3
第II層	12	10	4			1	14	41
第III層	49	16	8	1	1	1	28	104
第IV層	6	4	1				3	14
層序不明	3						4	7
計	70	33	13	1	1	2	50	170

以上をまとめると第1種で口唇上に施文するのは20点、第2種で11点、不明6点となり第1種に多い。

口唇上における施文部位を分類すると、次の4種となる。

- (1) 山形口縁の両側の一部に施文するもの  
(第10図3, 第22図版2)
- (2) 山形口縁の片側の一部に施文するもの  
(第9図12, 第11図版7)
- (3) 山形と山形の間だけにのみ施文するもの  
(第10図2, 第22図版3)
- (4) 口唇全面に施文するもの(第9図11, 第11図版1)

本トレンチ出土の口縁破片は前にも記したように小破片が多く、施文部位を確かめ得たのは上記4種だけである。ただし、(4)の1点は破片の大きさからみて口唇全面に施文したと推定されるもので、その可能性は大きいと思われる。

なお、第10図1は大きさからみて、口唇部無文とみられるものである。

#### 口頸部

文様上の特徴としては、口縁部と胴上部にそれぞれ同種の文様を水平方向に施し、両者の間、つまり頸部に別の文様を施すか、あるいは無文のまま放置するものなどがある。これらの文様は上・中・下の3段に分けられる。上段と下段を縦位の文様で結ぶ例があり、その場合、縦位文様は山形突起下にくることが多い。本トレンチ出土の伊波

式土器の文様は2種に大別されるが、これに無文を加えると3種となる。

#### 1) 第1種

本トレンチで最も多く検出されたもので、口縁部(上段)および胴上部(下段)に1条ないし2条の点刻文・連点文・短沈線文・長沈線文などを水平方向に施し、両者の間、つまり中段を無文のまま放置するグループである。

#### 2) 第2種

中段を数種の篋描き文で埋めるグループで、次の4種に細分される。

##### イ. 第2種Ⅰ

第1種の空白の部分を斜沈線・縦位沈線文などで埋めるグループである。

##### ロ. 第2種Ⅱ

中段を羽状文、綾杉状文で埋めるグループ。

##### ハ. 第2種Ⅲ

上段の横位の文様を省略し、口縁部直下にすぐ綾杉状文、斜沈線文などを施文するグループで、下段には横位の文様を施す。

##### ニ. 第2種Ⅳ

中段に鋸歯状文を配すものである。

#### 3) 第3種

器形は第二類に属するが、文様の全くみられないものを第3種とした。つまり無文の伊波式土器

である。

### 1) 第1種

このタイプに属するものは、第10図1～4（第22図版2～4、第23図版2）および第9図11～24（第11図版）に示したもので、叉状工具による施文を基本とするが、先端の小さい棒状工具を使用したものも1例ある。

第10図1～3は図上復元を試みたもので、同図1は2条1組の長沈線を上段と下段にそれぞれ2組ずつ施文する。現資料からするとこの土器は平口縁で、口径は推算23cm、本トレンチで発見された第1種土器の中では、口径の最も大きいものである。器高は推算20cm、器形は鉢形に近い。表裏とも器面はなでられ、擦痕はみられない。器厚は6mm、器色は赤褐色、焼成は悪く脆弱である。胎土には石英が含まれている。ピットM-6、第Ⅲ層20～30cmレベルの出土。

同図2は口縁部が低平な山形をなし、胴が僅かに脹る平底の器形で、口縁は外反する。口頸部の文様は不規則で、上段には2条1組の横位の沈線を3組施している。下段には同種の文様が1組認められるが、他の例を参考にすると下方の欠失部にあと1組あったものかと推察される。口唇部における施文部位は、現資料が小さく確言はできないが、山形の両側面ではなく、山形と山形の間中部に施文する例かとみられる。口径は推算17cm、高さ約21cmの中型の土器で器厚は約6mm、胎土には石英のほかチャートが混入される。器面調整、焼成とも良好で、器色は暗褐色を呈する。ピットM-6、第Ⅲ層0～10cmレベルの出土。

同図3は胴の脹りの微弱な平底器形で、口縁部には4つの山形突起がある。突起頂部は上からみると、僅かにコーナーを形成する。この土器の文様も不規則で、上段と下段の連点文が3条になる箇所と4条になる部分がある。文様は叉状工具を用いて描き、奇数の部分は叉状工具の一端を使用したものと考えられる。口唇部は山形の両側面のみ刻目を施す。器面はなでにより調整されており、擦痕は僅かに残る程度である。焼成は良好で

器色は暗褐色を呈し、胎土にはチャートと石英が含まれる。口径は推算20cm、器高は約21cm、器厚は7mmで、ピットM-3、第Ⅲ層30～40cmレベルの出土。

同図4は他の土器とは器形の異なるもので、頸部の屈折が著しく、山形突起部でつくられるコーナーは下方の頸部におよんでおり、口縁部の上面観は方形に近い。この土器は胴部が僅かに脹る器形かと思われる。山形突起の裾の部分では段が設けられ、突起間の中中部が中高となる珍しいケースである。口唇部は無文である。口頸部には連点文が横位に施され、上段では2条1組の2組、下段では1組となっていて、1組省略されている。上段と下段の文様の間隔も狭い。器面調整は丁寧になされておられ、擦痕はみられない。口径は長径（第10図4のA）17cm、短径（同図のB）15cm、器高は不明。器厚は6mm、器色は暗褐色を呈し、焼成は良好である。ピットM-4、第Ⅲ層30～40レベルの出土。

その他第1種に属する口縁破片を第9図に示した。11～20（第11図版1～3、6～7、9・12・13・14）は点刻文を施文するが、17だけは叉状工具を使用せず、先端の小さい棒状工具（単筥）を使用したために上下の点がペアになっていない。

普通、上段にはペアの点刻文が2組施されるが、14・18には3組、15・17・20の3点は1組となっている。21（12図版3）は連点文であるが、荻堂式などにみるように強く押し引きしたために、連点の部分が凹線をつくる手法と違い、点と点をつなぐ溝が浅く、押し引きに強弱のあったことがわかる。22～23（12図版9・10）は上段に短沈線を施す例で、下段にも同種の文様を施したものである。24は口縁部の欠失したもので、胴部に1組の短沈線が認められる。

以上に示した土器の器面調整はなでによってなされており、擦痕はほとんど残らない。胎土には石英、チャートが混入され、色調は茶褐色および赤褐色を呈し、焼成は良好である。

### 2) 第2種 I

第9図25、26（第12図版12・13）、第11図1～

8, 13~17・20 (第12図版14~18, 第13図版1~4・7・8) に示したもので, 上・下段の文様は点刻文が一番多く, 連点文がそれに次ぐ。この上, 下段の文様は基本的には叉状工具を使用するが, 単篋を使用したのも1例ある(同図7)。

中段の文様は縦位の沈線か, 方向の異なる斜沈線を組み合わせたもので, 中には第11図3のように鋸歯状の構成をとるものもある。この第2種Ⅰの中段の文様と上・下段のそれとの関係を第5表に示した。総計33個のうち上・下の文様の不明のもの14個を除くと上・中・下段共に叉状の施文具によるものが37%を占める。また上・下段だけ叉状工具を用い, 中段は単篋を使用したものが47%あるが, これらの中には中段の文様に叉状工具と単篋工具を使用(第11図2・4・7など)したものがあ。この種の文様はおそらく同一工具(叉状)を方向を変えながら使用したものと思われる。

また, 同図5は縦位に凸帯を貼付したもので, 伊波式土器の中では類例の少ないものである。本標品は, 上位に施された点刻文が凸帯へ向って上昇しており, 凸帯上方は山形口縁になるものと思われる。

第2種Ⅰの中段の文様は普通密に施されるが, 第11図17は沈線が一部に密集し, 左側に空白部をつくる。

第2種Ⅰの土器は表面採集で1点, 第Ⅰ層で2点, 第Ⅱ層で10点, 第Ⅲ層で16点, 第Ⅳ層で4点の計33点出土した。

### 3) 第2種Ⅱ

第11図9~11(第13図版6・11)に示したもので, いずれも中段の文様は羽状文で, それぞれ叉状工具, 単篋工具を使用している。

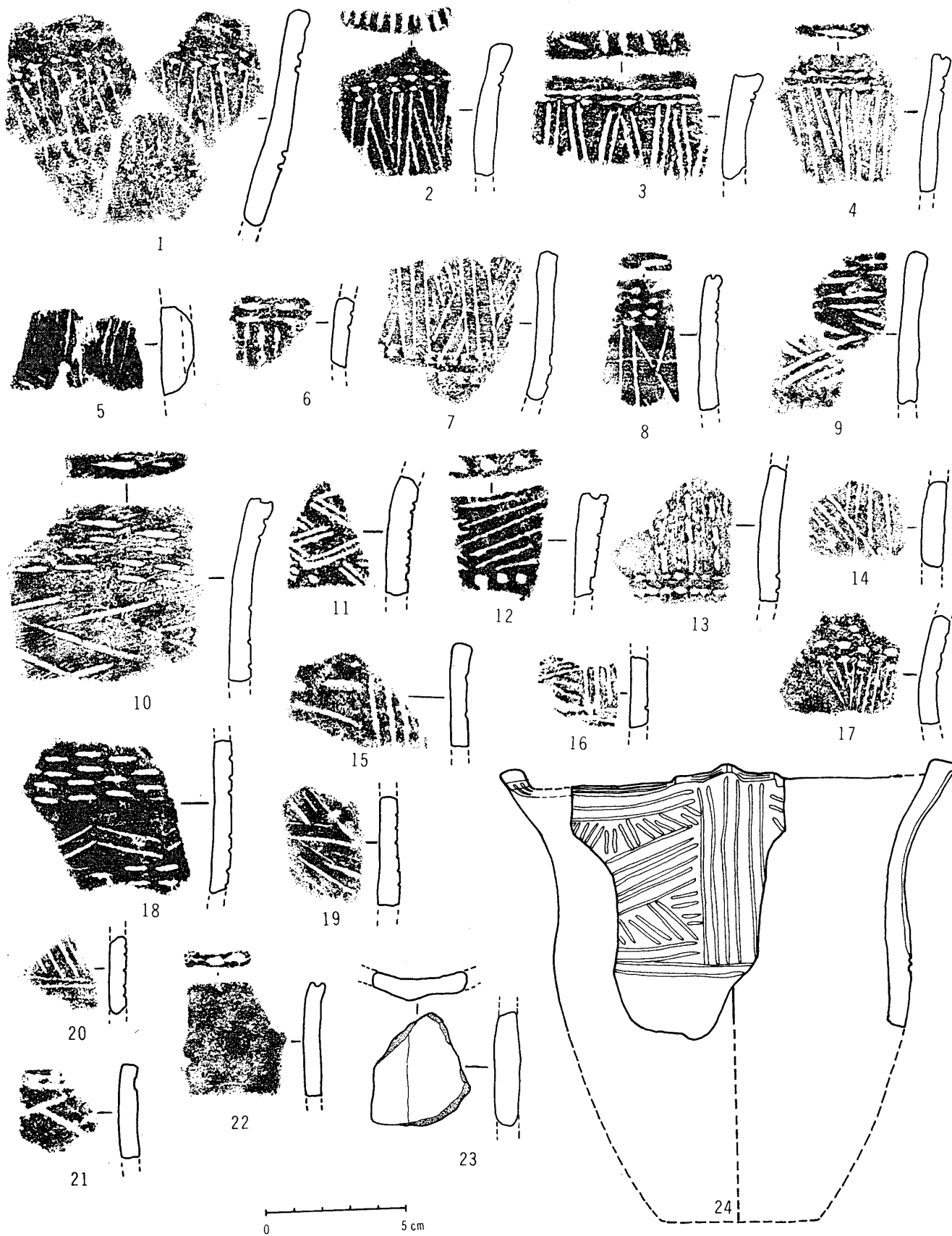
9の上段には2条1組の長沈線が2組みられる。中段の羽状文は上段の文様に接するように施されるが, 下方には空白部がみられる。しかし, この種の文様が下段を省略する例はないので, 若干の空白部をおいてその下方には上段と同種の文様が施されていたと推察される。擦痕はみられない。焼成は良好で胎土には石英が認められる。明るい褐色の土器である。

10は口唇部にも一条の短沈線が施されている。上段の文様からすると下段にも同種の文様が施されていたと思われる。中段の羽状文は単篋によって描かれている。擦痕は内面にもみられるが, 外面の方がより明瞭である。焼成は良好で赤褐色を呈し, 胎土には石英やチャートが含まれる。9・10ともに第Ⅲ層の出土である。

第11図24(第23図版1)は羽状文ではないが, とりあえず本項に含めておく。この土器は図上復元が可能なもので, 口縁は大きく開き, 胴部が僅かに脹る平底の深鉢形で, 口径, 器高とも約16cmの中型の土器である。山形口縁は両側で段を形成する。文様はすべて沈線で構成される。上段は2条1組の横位沈線, 下段は山形口縁下では1組であるが, それ以外の部分では2組になるものと思われる。上段と下段の間隔は広く, その部分に走

第5表 Mトレンチ第二類土器の第2種中段の文様

種	サブタイプ	上・下段の施文具		二 叉	単 篋	不 明	計
		中段の施文具					
第 2 種	Ⅰ	二 叉		7		8	15
		単 篋		9	3	6	18
	Ⅱ	二 叉		5		1	6
		単 篋		2	1	4	7
	Ⅲ	単 篋			1		1
	Ⅳ	二 叉		1			1
	計			24	5	19	48



第 11 図 M トレンチ出土の第二類土器 (伊波式)

向を異にする長短の沈線を密に施す。山形口縁下では2条1組の3組の縦位沈線を施す。焼成は非常に良好で堅緻な土器である。器外面ではなでによる調整が行われている。器色は暗褐色を呈し、胎土には石英とチャートが含まれ、器厚は5mmと割合に薄手である。ピットM-3, 第Ⅲ層10~20cmレベルの出土。

第2種Ⅱは第Ⅰ層での出土はなく、第Ⅱ層で4点、第Ⅲ層で8点、第Ⅳ層で1点の計13点の出土をみた。

#### 4) 第2種Ⅲ

第11図12 (第13図版13) に示した1点だけで上段の横位文様を省略したものである。単篋工具により口唇部と口縁部下段に刻文、その上部に斜沈線を施しているが、左端には走向を異にする斜沈線の一部が認められる。本標品は山形頂部に近い部分の破片である。器色は暗褐色。焼成は良好である。胎土には石英を混入する。第Ⅲ層の出土である。

#### 5) 第2種Ⅳ

第11図18 (第13図版5) に示した1点で文様は上・下段の短沈線文の間に鋸歯文を加えたものである。鋸歯文のあることから荻堂式とすべきかどうか議論があったが、上・下段の間隔が広く、かつ、この上・下段の文様が短沈線であるなど、全体的イメージは伊波的である。器色は赤褐色で、焼成は良好。胎土は細かく、石英を混入する。ピットM-1, 第Ⅲ層30~40cmレベル出土。

#### 6) 第3種

無文の伊波式土器と思われるもので、本トレンチ (第11図22・23) とピットO-7に僅かにみられた。

第11図22は口縁部破片で口唇部には単篋による点刻文が施されている。そのため厳密な意味での無文土器ではないが、口頸部に文様がみられないということで、本項でとり挙げた。この土器の胎土・焼成・混入物・口頸部のカーブなどの諸特徴から伊波式に含めてよいと考えられる。第Ⅲ層の出土。

23はコーナーをつくる破片で、第10図4と同種の器形の頸部破片ではないかとみられる資料である。この破片には文様はみられないが、上・下段に文様が配されていないかどうか、本資料では不明であるが、本文ではとりあえず無文土器部に含めておく。第Ⅱ層の出土。尚、第17図版10も器形から無文の伊波式土器とみられる。

#### ニ) その他の特徴

##### 器面調整

器面に残る擦痕の状況を前記各種の土器との関係で調べてみると、第6表のような結果を得た。

170点の破片のうち器面に擦痕が残っているのは75% (128個) あり、そのうち両面とも残るのが50% (85個)、内面にのみ残るのが25% (43個) で、外面だけに擦痕が認められるものは1点もなかった。また両面ともに残らないのは21% (36個) で、石灰分の付着のため状況のつかめないのが4% (6個) あった。

文様との関係でみると第2種より第1種に擦痕

第6表 第二類土器 擦痕の残存状況

種別	擦痕の有無						計
	両面有り	外面有り	内面有り	両面なし	不明		
1	43		16	11		70	
2	I	14		9	7	3	33
	II	4		6	3		13
	III	1					1
	IV	1					1
3	2					2	
不明	20		12	15	3	50	
計	85		43	36	6	170	

の残るものが多い。器面調整についてみると2種の方法が併用されている。つまり、まず擦痕を施し、次になで消すのである。しかし、なでの手法は器面全体に及ぶものではなく、表面の文様帯の部分で行うのが最も多く、したがって、文様帯以下に擦痕の残るケースが多い。また、なでの手法は器の内外両面で行われるが、擦痕が内面だけに残るものがあることからすると、外面にポイントがおかれていたようにも考えられる。

#### 焼成

伊波式土器の焼成は一般に不良で、脆弱である。器の表面は比較的原形を保つものが多いが、内面は逆にくずれているものが目立つ。

#### 混入物

伊波式土器の混入物については、前項でも若干ふれたが、石英が圧倒的に多く、それにチャートを混えるものがほとんどで、雲母を混ざるものはない。石英やチャートには角礫や円礫化したものが含まれ、サイズは4mm前後のものは少なく、大体は2mm前後あるいはそれ以下である。

#### ホ) 層位的出土状況

第二类土器(伊波式)を文様の特徴から3種に細分して観察した。出土量は第1種および第2種Ⅰ・Ⅱに集中し、他の文様は稀少であった。層位的にみると第Ⅲ層で最も多く、次いで第Ⅱ層、そして第Ⅳ層の順に減少している。また前記各種文様間の前後関係も検討してみたが、層位上の明確な相違はみられなかった。しかし、第Ⅳ層における出土量は他の型式より若干多く、このことは留意する必要があると思われる。

以上、伊波式土器について述べたが、この土器と次の荻堂式土器は胎土、焼成、混入物、施工工具等の特徴が一致し、両者を区別するためには器形および文様構図等を検討しなければならないが、小破片あるいは文様帯下半部欠失のものについては区別が困難である。

本トレンチでは伊波式か荻堂式が不明のものが、第Ⅰ層で14点、第Ⅱ層で48点、第Ⅲ層で71点、第Ⅳ層で8点の計141点発見されている。第17図9

～15・18・19に主なものを示した。図示したものの大部分は荻堂式かとみられるが、下部あるいは上部を欠失し、このような資料を本文では「不明」として取扱った。

#### Ｃ) 第三類土器(荻堂式土器)

荻堂貝塚出土の土器を標式とするもので、器種は深鉢形が主体をなすが、まれに壺形もみられる。深鉢形の土器の場合、口縁部が山形をなすものや平口縁のものなどがあるが後者は極めて少ない。

本トレンチでは第三類土器の明確なものが191点検出された。その内訳は口縁部60点(有文56点、無文4点)、有文の胴部破片103点である。前者には器形の推定可能な大型の破片が10点含まれている。層位的出土状況は第3表のとおりで、第Ⅲ層で最も多かった。

以下、この土器の特徴について略述する。

#### イ) 器種

前述のように本トレンチでは壺形と深鉢形の2種類の器種が認められた。

#### 壺形土器

第15図17に示した1例だけで、無文の口縁破片である。口径は推算6cm、器厚は8mm。表裏とも赤褐色を呈し、胎土には多量の石英のほか少量のチャートを混入する。焼成は良好とはいえず、脆弱である。第Ⅱ層の出土。

この土器は破片が小さく、口縁部が波状を呈するかどうか不明であるが、胎土、焼成、色調などから荻堂期のものとみられる。嘉手納貝塚<sup>13</sup>や久里原貝塚<sup>14</sup>出土の壺形に類するものであろう。

#### 深鉢形土器

本トレンチ出土の第三類土器は前記1例の壺形を除けば、すべてこの器形に属する。以下、深鉢形について説明する。

#### ロ) 器形

深鉢形は復元可能のものや他の大型の口縁破片で見ると、器形に若干の差異が認められる。今、器形のほぼ明確なもの11点について観察すると、

次のA・Bの2種に分類できる。

A型：口縁が開き、径の最大が口縁部にあるもので、胴部の脹みは弱く、伊波式に近い器形である。第12図2（第16図5・第24図版4）や第13図4（第16図23・第25図版4）の2点がこれにあたる。2個とも器形は伊波的であるが、文様が荻堂式に属することから第三類土器に含めた。この種の器形は極めて少ない。

B型：胴部が脹らむもので、胴の最大径が口径とほぼ同じか、あるいはそれより大きいもの。第12図4（第24図版3）や第13図1（第24図版1）は前者に属し、第12図3（第16図20・第25図版3）や第13図2（第14図版8）は後者に属する。B型の類型に属するものは9点あるが、それらを仔細に観察すると、胴の最大径が上位にあるものと中位にあるものの2種に分つことができる。

胴の最大径が上位にあるものには第12図1（第23図版4）のように張りの弱いものや同図4（第24図版3）のように強いものなどがある。第13図1（第24図版1）は最大径が中位にくる例で、出土量はこの1点だけである。

このことから、B型の一般的な特徴は口縁部が内側へ傾斜し、山形突起部が外反する胴の僅かに張る平底器形ということになり、B型が荻堂式を代表する器形のようなのである。

口縁には平口縁と山形口縁の2種がある。前者の明確なものは第14図2（第25図版2）・3（第24図版2）の2例だけである。

山形口縁は破片も含め23点採集された。数種の形態がみられるが、山形頂部が肥厚するものとし、ないものの2種に大別して観察してみたい。

A) 山形頂部の肥厚しないものは6点あり、2種に細分される。

イ) 山形の形状がチェヴロン状をなすもの（第14図1、第23図版3・第16図25、第15図版10・第17図4、第15図版17）

ロ) 山形突起がM字状をなすもの（第12図2、第13図1）

B) 山形頂部を瘤状に肥厚させるものは7点採集されたが、それらは3種に細分される。

イ) 肥厚部外面が凹むもの（第12図4、第15図18・19・24、第16図版5・19・20）

ロ) 肥厚部外面がV字状に尖るもの（第12図1）

ハ) 肥厚部外面が平坦なもの（第15図21・23、第16図版6・14）

山形口縁が基部で段を形成するものは3点（第12図1・4、第17図4）、段の認められないものが3点（第12図2・第13図1・第14図1）発見されたが、他は破片が小さく、段の有無は不明である。したがって、段を形成するものやしないものと器形、文様との関係は、現段階では明らかにし得ない。

完形の資料が少ないために底部について積極的な発言はできないが、荻堂貝塚や嘉手納貝塚の例を参考にすると、底径6cm前後の平底をなすものと考えられる。

ハ) サイズ

土器のサイズを口径で分類すると、20cm前後の大型、15cm前後の中型、10cm前後の小型の3種に大別される。いずれも器高は口径の1.2~1.5倍内に収まるものと考えられる。

サイズのはぼ推定できるものについてみると、大型に属するものは第12図1、第13図1などで、第12図1は口径が長径（相対する山形突起間の距離（第9図4のA））で約22cm、短径（隣接する山形突起間の中間凹部の相対する距離同図4のB）約20cm、胴の最大径約20cm、高さ約20cm、第13図1は口径約21cm、胴の最大径20cm、高さ26cm、短径が約15cm、胴の最大径16cm、高さ20cmである。

中型に属するものは2点あり、第12図4は口径が長径で約16cm、短径13cm、胴の最大径16cm、高さ約21cmで、第14図1は口径が長径で約16cm、短径が約15cm、胴の最大径16cm、高さ20cmである。

小型土器は最も多く7点ある（第12図2・3、第13図2~4、第14図2・3）。第12図2は口径約12cm、胴の最大径約11cm、高さ約15cm。同図3は口径約11cm、胴の最大径約13cm、高さ約17cm。

第13図2は口径約12cm、胴の最大径約13cm、高さ約16cm。同図3は口径約11cm。同図4は口径約15cm、胴の最大径約13cm、高さ約18cmである。第14図2は口径約11cm、胴最大径約13cm、高さ約15cm。同図3は口径約12cm、胴の最大径約14cm、高さ約14cmである。

以上によってみると、荻堂式土器は一般に小型が多いような印象をうける。

## 二) 文 様

第二類土器と同様に文様は口頸部や口唇部に限られる。施文具は叉状工具、半截竹管、幅広の単篋の3種が使用されるが、半截竹管の使用は少なかつた。施文手法は連点文が圧倒的で、次いで沈線文が多く、点刻文は少なかつた。

### 口唇部

第三類土器の口縁破片は60点採集されている。そのうち口唇部に施文するものは13点で、約22%である。しかし、後述のように口唇全面に施文するとは限らないから、口唇部無文としたものの中には原形において有文口唇の一部をなすものも含まれているであろう。

口唇上の文様は連点、押し引き、沈線、刺突の4種が認められ、連点文が過半数を占める。連点文と押し引き文の相違は叉状工具によるものを連点、単篋工具によるものを押し引きとした。口唇上の文様は口縁部上段の文様とほぼ一致している。例外は2例ある。第15図11は口唇部も口縁の文様も幅広の単篋を用いて描いているが、口唇では刺突文、口縁部では押し引き文となっている。同図20の口縁部の文様は凸帯による浮文となっているが、口唇上には連点文を施している。

口唇上の施文部位は二通り認められる。一つは口唇全面に施文するもの(第12図4)で、他は山形頂部の両側にのみ施文するもの(第12図1、第15図24)である。施文部位のはっきりするのは以上の3点だけで、いずれがより一般的か数量の上では示し得ないが、口唇上無文のものが多いことからすると、山形頂部の両側にのみ施文するものが多かったのではないかと推察される。

なお、口唇部が無文に終始するものがある。第12図2、第13図1、第14図3は口縁部に施文するが、口唇上は無文である。また、第14図1は口縁も口唇上も無文のものである。

### 口縁部

文様は口縁部では横走る連点文や沈線文などと鋸歯文、斜沈線などが組み合わせる例が多いが、凸帯を貼付するものもあり、また無文のものなどもある。本項ではそれらを5種に分類して記述する。

#### 第1種

横位の沈線や連点文などと鋸歯文を組み合わせるもので、鋸歯文の施文部位により次の(イ)~(ロ)の3種に細分される。施文部位の明瞭なものは15点だけである。

(イ)に属するものは文様帯の中間にのみ鋸歯文を施すもので、第13図1(第24図版1)第14図3(第24図版2)、第15図1(第14図版12)の3点がそれにあたる。

第13図1はM字状の特異な突起をもつ土器である。施文具は叉状工具が用いられ、文様はすべて押し引き手法で描かれている。口縁部の文様は上段に2条1組の2列の連点文を施し、その下に鋸歯文を描き、最下段を上段と同じ文様でしめくくる。突起部の文様も特異で、縦、横の連点文で充填している。

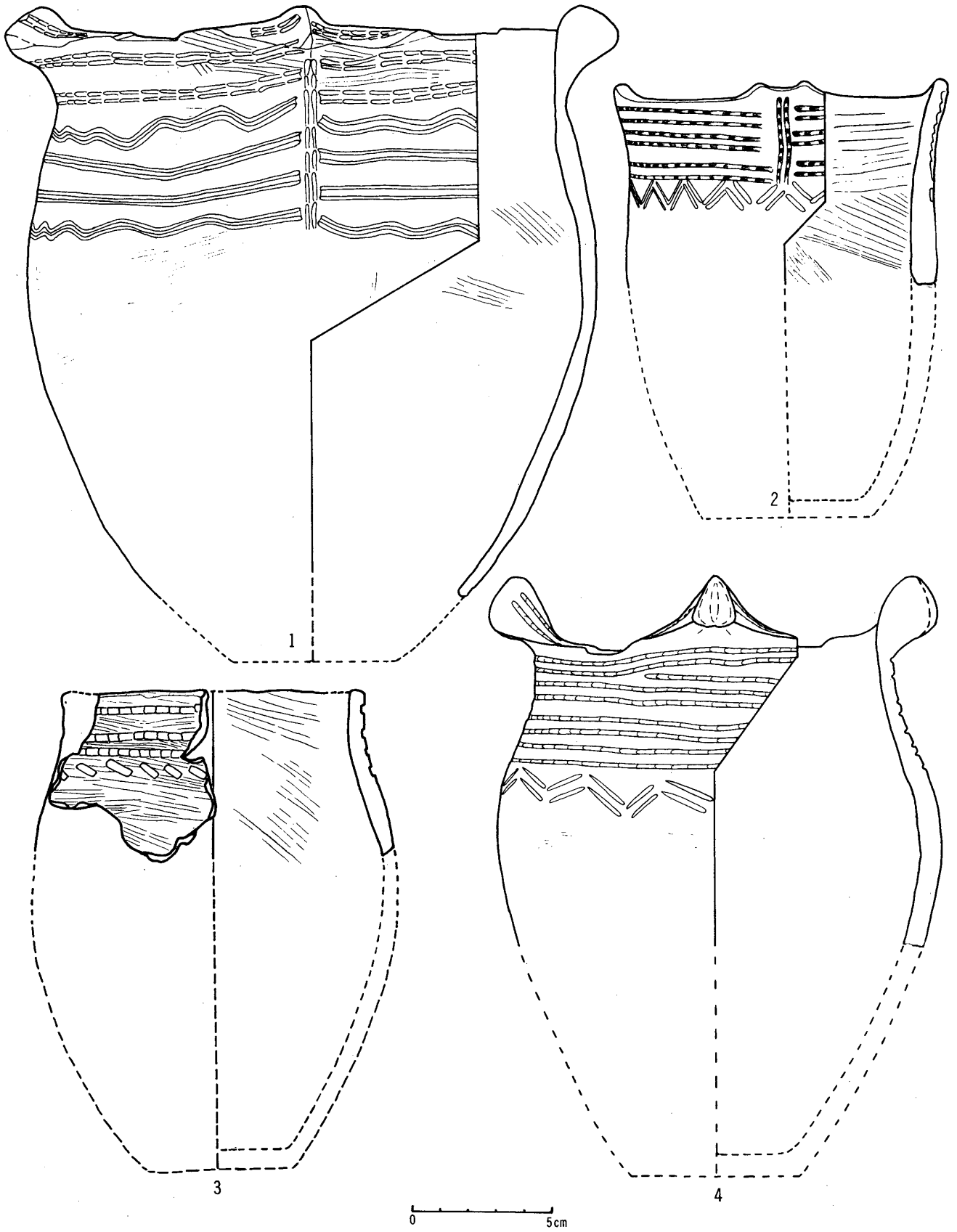
第14図3は幅広の単篋で上段と下段に二条の押し引き文を施し、両者の間に沈線による鋸歯文を施文する。

第15図1は胴部破片で、これも幅広の単篋を使用している。最下段に鋸歯文がみられないことから、この項に含めた。横走の押し引き文の間に沈線による鋸歯文をはさむ。

(ロ)に属するものは文様帯の中央部および最下段に鋸歯文を施すもので、第12図1、第13図3、第15図2~4(第14図版1・7・8・16)に示した5点がこれにあたる。

第12図1は半截竹管が用いられているが、文様効果は叉状的である。文様は同一工具により施文





第 12 図 M トレンチ出土の第三類土器 (荻堂式)

されているが、規則性に欠け、口縁直下では2条1組の連点文が2組、以下は鋸歯文と平行文が交互に施されている。鋸歯文は曲線的である。突起部の両サイドにも一組の連点文を施し、突起直下では一組の縦位の連点文が施文され、文様帯を区画している。

第13図3および第15図3は同一個体に属する口縁破片である。文様は叉状工具が使用され、横位沈線と鋸歯文を交互に組み合わせる。施文は深く明瞭である。口唇部および文様帯はやや右上りになっており、山形口縁に移行する部分の破片かと思われる。

第15図2も叉状工具によって施文された口縁破片である。

横位の文様は連点文が採用され、上段と3段目にそれぞれ二組の連点文を施し、その中間および最下段に沈線による鋸歯文を施している。口唇部にも一組の連点文が施されている。

同図4は単篋を用いて施文した胴部破片である。横位の文様は押引文、鋸歯文は沈線で描いている。

い)に属するものは文様帯の最下段のみに鋸歯文を施すもので、6点の出土があり、第12図2・4、第16図6・8・12・14(第14図版6・15・17、第16図版2)に示した。

第12図2は第13図1と同様の山形突起を有する土器である。叉状工具が使用され、3組の連点文を横位に施しその下方には沈線による鋸歯文が施されている。突起部直下には1組の縦位の連点文を施し、文様帯を区画している。

第12図4は瘤状突起を有する土器で、図上復元が可能である。文様は前記土器と同様で叉状工具を用いて、横位に4組の連点文、最下段に沈線による鋸歯文を施す。また口唇部にも1組の連点文が施されている。

第13図2は器形がある程度うかがえる土器で、文様は幅広の単篋を使用し4条の押引文を水平方向に施し、最下段に沈線による鋸歯文を施文する。またこの土器は口唇下約5cmの箇所にも1孔が穿たれている。この孔は焼成後穿たれ、径は表面で約5mm、内面で約3mmである。口縁の保存状態が悪

く、山形突起の有無は不明。

第16図6・8はいずれも叉状工具を用いて施文したもので、6は口唇部を欠失するが、横走する2組の連点文の下方に沈線による鋸歯文を施している。8は口縁の破片で6と同様の文様を施文するが、線は若干太い。

第16図12・14は幅広の単篋によって施文した口縁破片である。文様はいずれも横走する押引文の下方に沈線による鋸歯文が配されている。12は山形口縁に移行する部分の破片のようである。

#### 第1種の不明

鋸歯文を施文するが、破片が小さいため前記(イ)~(い)のいずれに分類すべきか不明のものが39点出土している。第15図5~10・12・13、第16図1~4、7・9~11・13・15~17(第14図版2・4・5・9・10・13・14・18、第15図版1~3)、第17図8・17(第16図版21)などがこれにあたる。第16図18(第14図版11)は鋸歯文の代わりに菱形文を施文するもので、便宜上ここに含めておく。

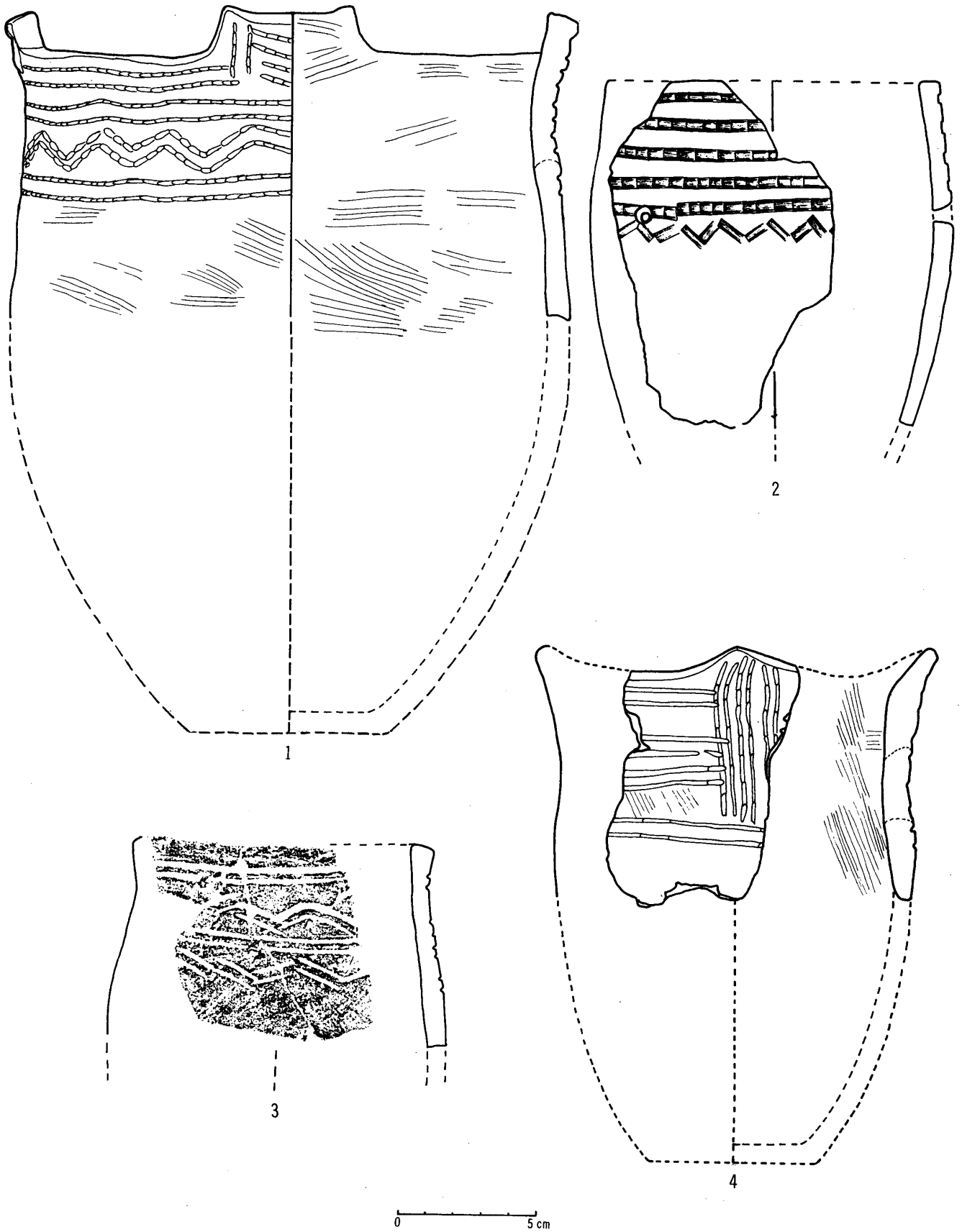
#### 第2種

横走する文様の最下段に斜沈線または斜め方向の刺突文を施すもので、第12図3(第16図20)、第14図2、第15図14(第16図版4)、第16図19・21・22(第15図版5・6・8)、に示したもので、6点検出された。

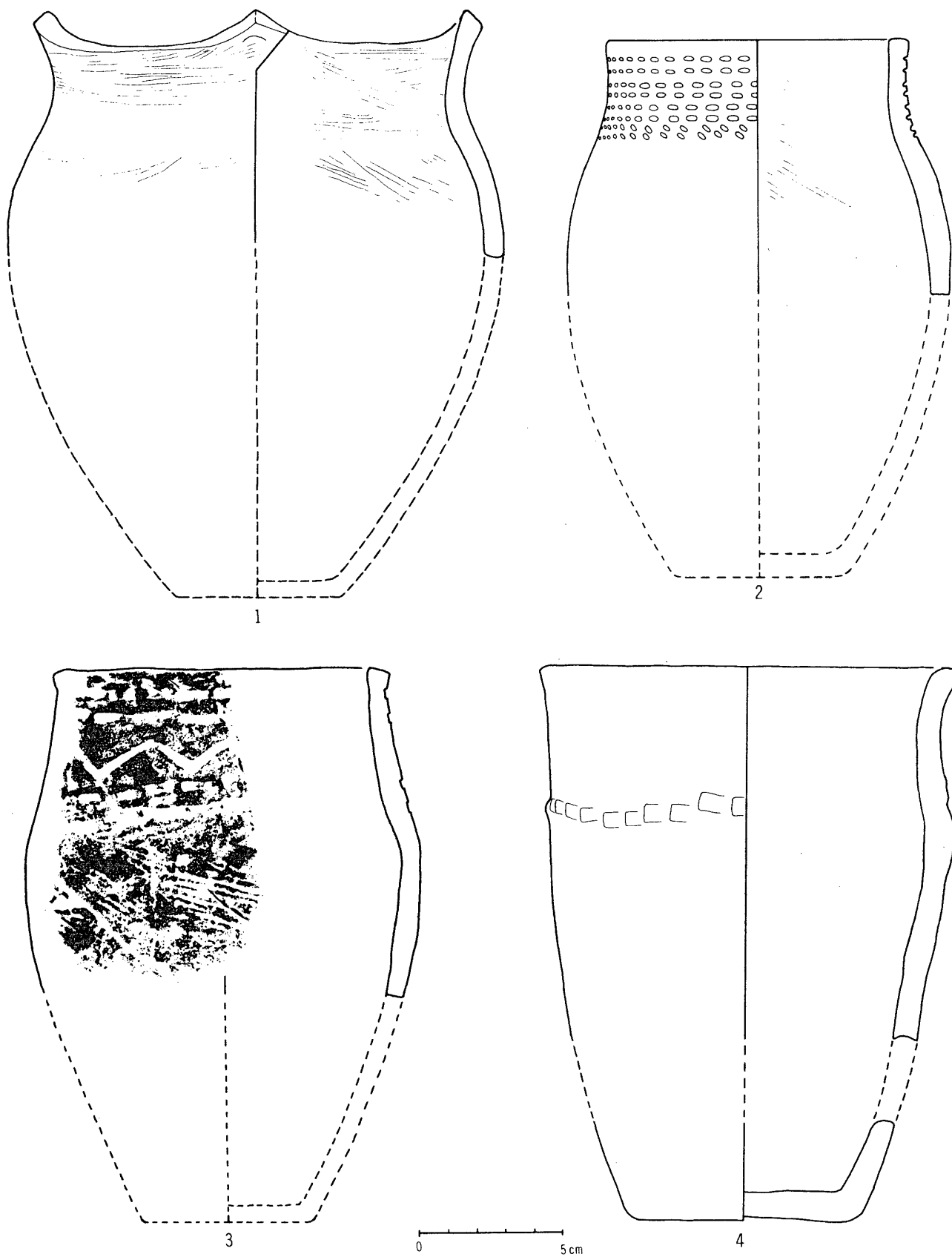
第12図3は図上復元を試みたもので、文様は幅広の単篋を用いて、口縁部に横走する3条の押引文を描き、その下方に斜め方向の短沈線を施している。この土器は口縁の残存部が小さく、山形突起の有無は不明である。

第14図2も図上復元を試みたもので、平口縁に終始する土器である。文様は叉状工具を用いて4組の点刻文を横位に施し、最下段に斜め方向の点刻文を施文している。

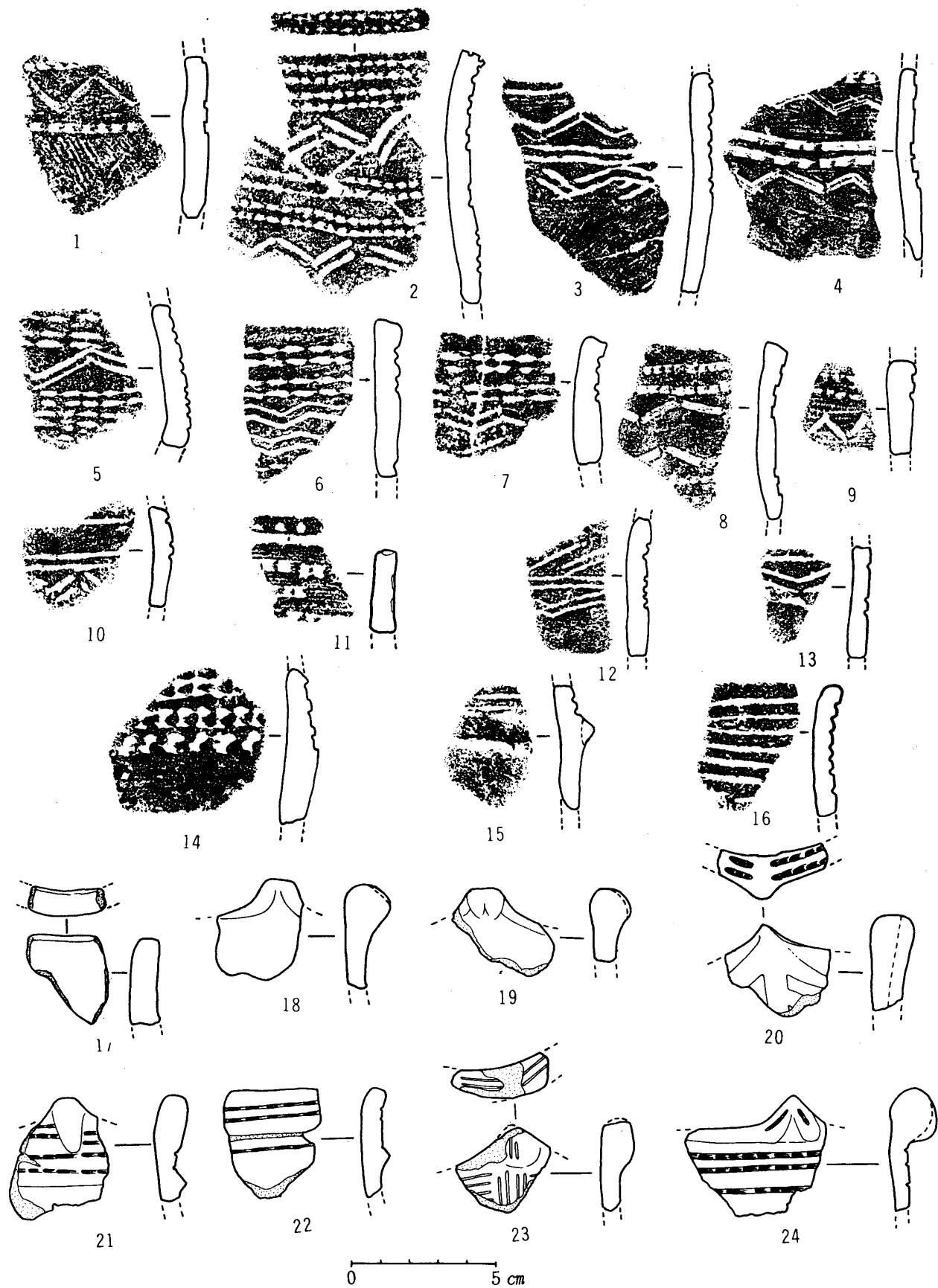
第16図19は異なる施文器具を使用する口縁破片である。文様は口縁下に二条一組の連点文を二列施し、下方に幅の狭い単篋によるシャープな短沈線を斜めに施文している。このように2種の施文具



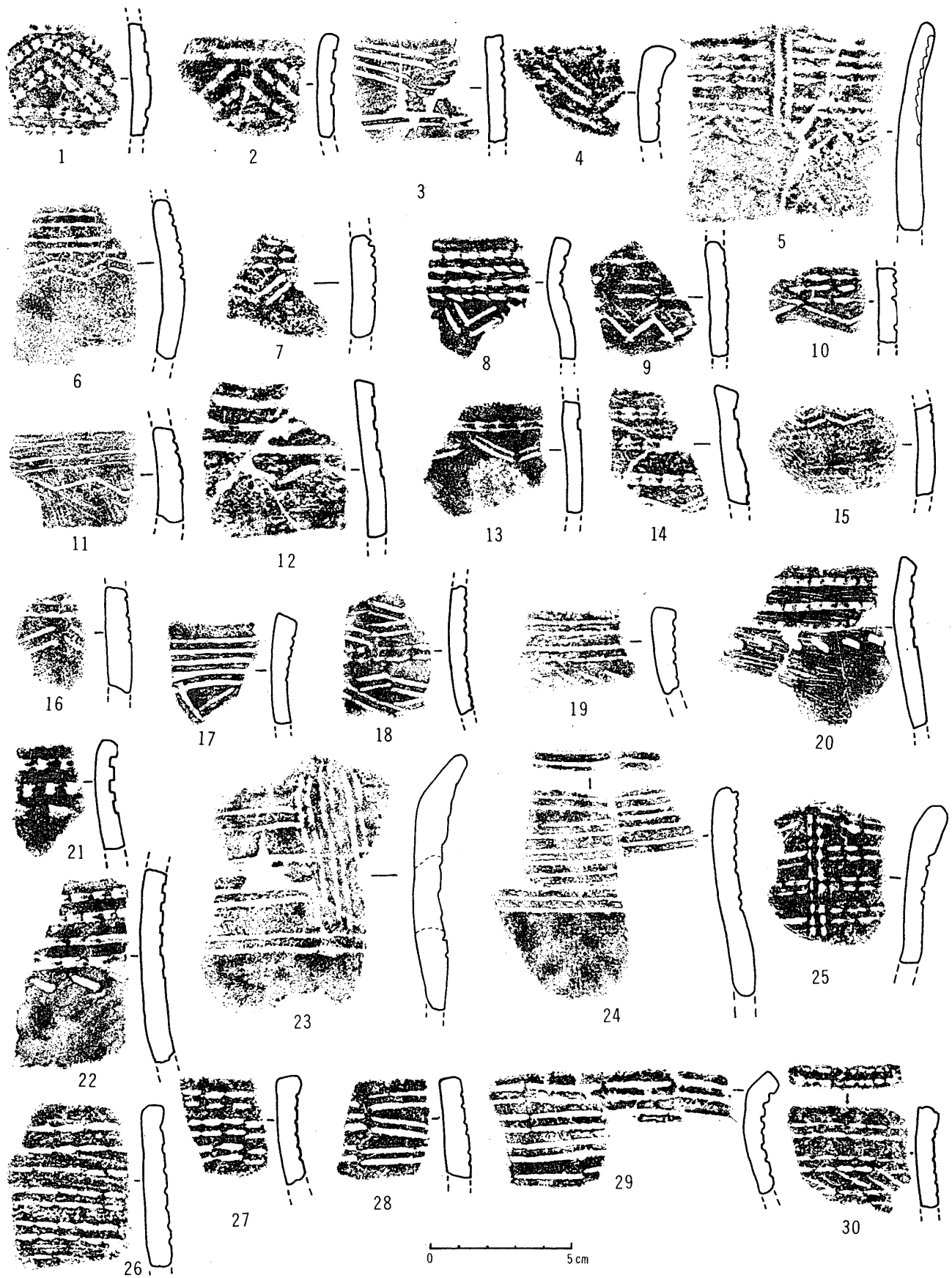
第13図 Mトレンチ出土の第三類土器（荻堂式）



第14図 Mトレンチ出土の第三類土器（荻堂式 = 1 ~ 3）およびその他の土器（4）



第15図 Mトレンチ出土の第三類土器 (荻堂式)



第16図 Mトレンチ出土の第三類土器（荻堂式）

を一つの土器に応用したものは本トレンチ出土の第三類土器の中ではこの1点だけである。

同図21・22は幅広の単篋が使用されたもので、21は口縁破片、22は口唇部の欠失した破片である。文様はいずれも横位の押引文の下方に短斜沈線を施している。21は横位の文様が2条で、22は4条認められる。

第15図14（第16図版4）は半截竹管で施文する胴部破片で、2条の押引文の下方に同じ施文具で斜め方向の刺突文類似の文様を施文する。

### 第3種

口縁の文様が水平方向の平行線文や連点文などに終始するもので下記の2種に大別した。すなわち、

(イ)文様を密に施すもの

(ロ)等間隔を置いて施すもの

(イ)に属するものは第16図24、第17図1・3・6（第15図版14・15、第16図版3・7）に示した4点である。

第16図24の左端は山形口縁に移行する部分で破損している。文様は叉状工具を用いて描き、5組の長沈線文を密に施す。口唇部にも同様の文様が施されている。施文は深く明瞭である。

第17図1・3・6の3点は幅広の単篋を使用した口縁破片である。

同図1と3は同一個体に属するもので、文様は5条の押引文が施され、1の破片右端に文様帯区画文とみられる縦位の押引文が1条認められる。また口唇部にも同種の文様が1条施されている。

同図6は7条の押引文を水平方向に密に施したもので、縦位の押引文が1条認められるが、口唇部が大きく破損しているため、縦位文様は山形口縁下に施したものかどうか不明である。

(ロ)に属するものは横位の沈線文や連点文などがある間隔において等間隔に施されているもので、他の文様と組み合わされることもある。

第16図25（第15図版10）は山形口縁の破片で、横位の連点文が4条認められ、ほぼ等間隔に施されている。この資料は下端部が欠失しているため

に連点文の下方に鋸歯文が加わるかどうか不明である。若し最下段に鋸歯文がくれば、第一種(イ)の資料ということになるが、ここでは等間隔に施文する例として紹介しておく。

同図30（第15図版12）も下端を欠くが、横位の3組の連点文は等間隔に施されている。そして2段目と3段目の連点文の間を斜沈線で埋めている。第17図2（第15図版16）も下端を欠くが、幅広の単篋による押引文が等間隔に施され、本標品では3条認められる。

第13図4は器形からすれば第二類土器（伊波式）に属する。これを荻堂式に含めたのは文様の特徴が荻堂式の範疇にあるとみられるからである。文様は叉状工具を用いて、上・下段に1組、中段には2組の長沈線文を施文する。沈線は比較的等間隔に施されている。また山形突起直下では3組の連点文を縦位に施している。この種の文様の最下段に鋸歯文を加えたものは嘉手納貝塚(13)で1例発見されている。この土器には鋸歯文はないが、上部の文様が嘉手納例に一致することや横位文様が等間隔に施されることなどから、とりあえず荻堂式に含めることにした。

### 第4種

凸帯を貼付するものをここにまとめた。5点採取されている。

第15図20（第16図版18）は山形口縁の破片で、突起部直下に縦位の凸帯を1条貼付し、その左右には1～2条の凸帯が認められるが、下端欠損のため、下方の状況は不明。口唇部には2条1組の連点文が施されている。

同図21・22（同図版13・14）は同一個体に属する口縁破片で、8は瘤状突起を有する。文様は口縁と平行に横走する2条1組の連点文を2列施し、その下方に1条の凸帯が施されている。凸帯下方には文様を施していないようである。

第17図21（同図版15）は右端が山形に移行する部分で、文様は口縁部に2組の連点文を施し、その下方に凸帯を1条めぐらし、その下方に1組の連点文を施している。凸帯には刻目が施されてい

る。破片の右端には縦位連点文の一部がみられる。この縦位連点文は山形口縁の下にくるものと思われる。

第15図15は胴部破片で、横位の凸帯が1条認められ、その上方には叉状工具による沈線文が1組みられる。荻堂式の胴部破片であろう。

第5種

無文の荻堂式土器は3点得られた。前にもふれたように、器形が荻堂式に属する土器である。

第14図1は山形口縁を有するもので、図上復元によると中型の土器である。頸部がしまり、山形突起の部分で外反する。赤褐色の土器で焼成は良い。

第15図18・19はいずれも瘤状突起を有する口縁破片で、突起の外表面は凹面を形成し、以下に文様はみられない。無文の荻堂式としてとらえてよいであろう。

不明

第15図16、第16図26～29に示したものは横走する文様のみが残存するもので、この文様に終始したか、他の文様要素が加わったか不明である。

ホ) 器面調整

191点の破片について器面の観察を行った。擦

痕を施すものは30点で極めて少なく、残りの161点には認められなかった。この30点を文様との関係でみると第1種11点、第2種3点、第3種3点、第4種には認められず、第5種1点、種不明のもの12点となり、第1種に比較的多い。

器面の表裏における有無について観察した結果、外面のみに認められるもの13点、内面だけのもの8点、表裏に認められるもの9点となり、外面のみに施した例が若干多い。外面に擦痕を有する22点についてみると、文様態の部分ではなで消すのが一般的で、文様帯以下に残る例が多い。なでは外面では比較的徹底しており、器面の滑かなもの一般的で、内面はくずれてザラザラしたものも多く見受けられた。

へ) 層位的出土状況

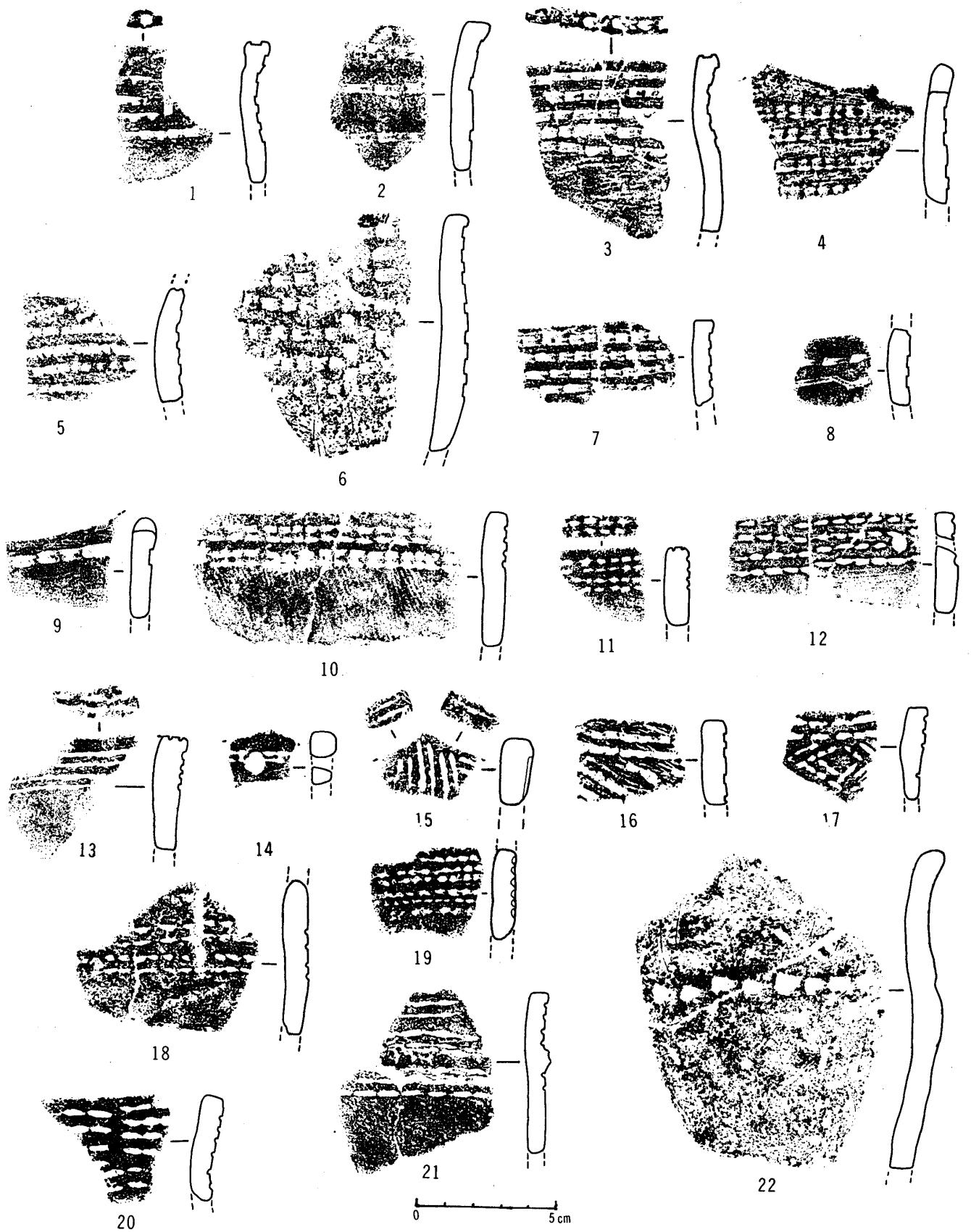
第三類土器(荻堂式)は文様の有無および文様構成上の特徴から5種に細分した。第3種を除けばいずれも第Ⅱ・第Ⅲ層で出土しているが、第Ⅲ層に集中する傾向がみられる。第3種は5点出土し、第Ⅱ層ではみられない。このことはこの文様の古さを暗示しているようにもみえる。しかし、文様や器形の特徴はむしろ荻堂式の中では新しい方に属するように考えられる。第3種の古さについては資料の増加を俟って検討したい。

第三類土器は第二類土器同様第Ⅲ層に集中し、

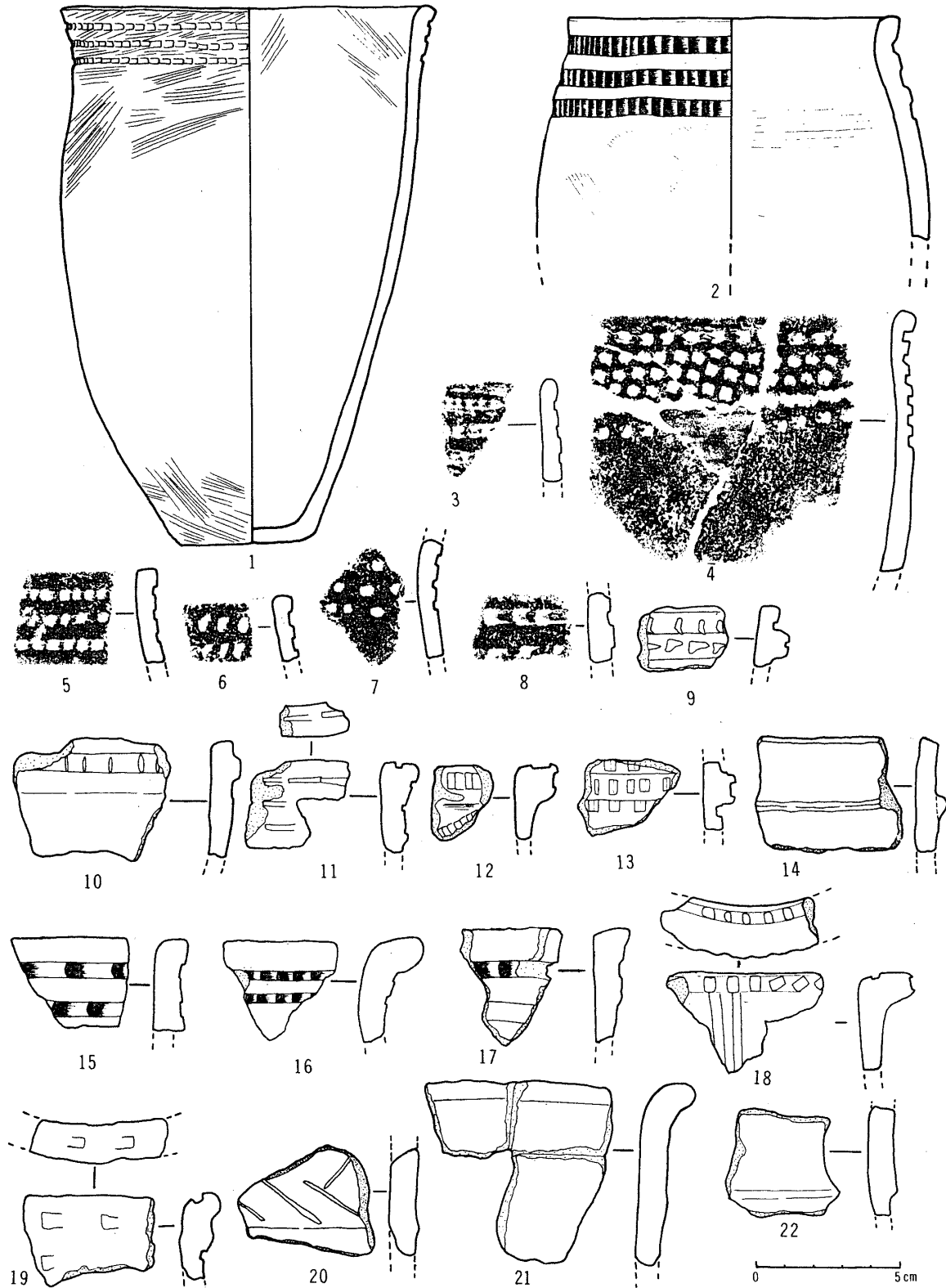
第7表 Mトレンチ第三類土器文様別出土状況

種類 層序	第1種								第2種		第3種				第4種	第5種	不明		計	
	イ		ロ		ハ		不明		又状	単	イ		ロ				又状	単		
	又状	単	又状	単	又状	単	又状	単			又状	単	又状	単						
表面採集																		4	4	
第Ⅰ層																		7	5	12
第Ⅱ層	1	1		1	1		10	3		1					1	1	22	10	52	
第Ⅲ層		1	3	1	3	2	18	8	2	3	1	3	1		2	3	54	15	120	
第Ⅳ層																	3		3	
計	1	2	3	2	4	2	28	11	2	4	1	3	1		3	4	86	34	191	





第 17 図 M トレンチの第三類土器（萩堂式 = 1 ~ 8、16 ~ 17、20 ~ 21）、  
不明（伊波か萩堂か不明 = 9 ~ 15、18、19）およびその他の土器（22）



第 18 図 M トレンチの第四類土器（大山式 = 1 ~ 10. 13）第五類土器（カヤウチバンタ式 = 11. 15. 17. 19. 20. 22）および第七類土器（その他の肥厚口縁 = 12. 16. 18. 21）14. 凸帯文土器

第Ⅳ層では種不明のものが3点発見されている。同層における伊波式と萩堂式の出土量についてみると前者が若干多い。このことは両者の前後関係を考える上で留意する必要があるように思われる。

#### ト) 混入物

萩堂式土器の混入物は石英が一般的で、それにチャートを混えるものもある。大きさは1mm程の石英粒を多量に含むものや、それに2mm前後のやや大きな石英やチャートを少量混じるものがある。量的には後者が多い。また、泥胎質で混入物が認められないものも1点検出されている。

#### チ) 焼成

焼成は伊波式土器同様不良で、一般に脆弱である。外面は器面調整が比較的良く、原形を保つものが多いが、内面はくずれてザラザラしたものが多い。

押捺刻文や同種の押し引き文は萩堂式および大山式の両型式にみられる。両者は胎土・混入物・焼成・器面調整等が一致し、また器形にも相通するものがある。上記文様を有する小破片では両型式の識別が困難である。このような小破片は第Ⅰ層で2点、第Ⅱ層で11点、第Ⅲ層で15点、層序不明2点の計30点検出されたが、第Ⅳ層での出土はなかった。

#### D) 第四類土器 (大山式土器)

本トレンチで出土した第四類土器は3点だけである。そのうちの1点は復元可能で、他の2点は図上復元が可能である(第18図1・2・4、第26図版2～4)。その他にも大山式土器を特徴づける横捺刻文を施す破片は8点あるが、前項で記したように萩堂式と区別するためには器形や他の文様要素との組み合わせなどの検討が必要であり、前記3点以外は破片が極めて小さく、識別が困難である。

前記の復元、または図上復元の可能な3点についてみると、器形は胴長の深鉢形、口縁部は平担で波状口縁はみられない。また胴の最大径は普通胴上

部にある。このうち第18図1は口径が胴の最大径より大きく、同図2・4は小さい。いずれも底部は平底である。

文様は口頸部に限られ、以下に及ばない。

口唇部および口縁内面は無文である。施文具は先端の幅2.5mm至5mmの篋が使用され、口縁に沿って横捺刻文や押し引き文を数条施すのが一般的である。以下、前記3点および大山式の可能性を持つ土器について記す。

第18図1は、口径約13cm、高さ約19cm、底径4.6cmの小型の深鉢形で、胴部の形状は左右不相称である。最大径は口縁部にあり、片側ではやや丸味のあるカーブで底部へ移行するが、他方は比較的直線的である。文様は先端の幅約2.5mmの単篋工具によって3条の押し引き文を口縁部に施す。施文は右から左の方向で、他の土器とは施文方向が逆になっている。押し引きの間隔は比較的狭く、施文は深い。器面は比較的良く調整されているが、一部には擦痕が残っている。擦痕は口縁の内外面の一部と底部の一部にみられ、他はなでにより消されている。器壁は薄く約5mmであるが、焼成は良好で比較的堅緻である。胎土には粒の粗い石英の他、少量のチャートが含まれ、器色は茶褐色を呈する。ピットM-2、第Ⅲ層10～20cmレベルの出土。

第26図版3は大山貝塚の土器を参考に復元したものである。口径約12cm、高さ(推定)19.6cm、左右均整のとれた深鉢形である。径の最大は胴上部にあり、口縁部へすばまり、そしてゆるやかなカーブをもって底部に至る器形が推定される。頸胴部の境は不明瞭。器面には擦痕がみられ、表面では口縁部から胴部にかけて主として斜め方向に、裏面では口縁下端から胴部にかけて横位に施されている。この土器も擦痕を施したあと、なでているが、擦痕は消えきっていない。器厚は約7mm、焼成は良好で固く、器色は茶褐色を呈するが、すすけて黒くなった部分もある。胎土には石英、チャートが含まれている。ピットM-6、第Ⅲ層30～40cmレベルの出土。

第18図4は口径約17cm、高さ約23cmの、前記1

・2より大型の深鉢形で、器形は2に類似する。文様は先端の幅約4mmの篋を使用し、口縁部に5～6条の刻文を施すが、施文方向は他の土器と異なっている。すなわち最上段と最下段の2列は右から左方向へ施文し、中間の刻文は上から下へと施文している。器面調整は前2者と同じで、擦痕は表面では文様帯下方にみられ主として縦方向の、裏面では口縁部付近は斜位、以下は横位となっている。器厚は約7mm、焼成は普通である。胎土には石英やチャートが含まれ、器色は茶褐色を呈するが、すすけて黒くなった部分もある。ピットM-6、第Ⅲ層20～30cmレベルの出土。

以上3点のほかに本トレンチ出土のもので、横捺刻文を施す破片のうち、比較的大きなものを第18図3・5～10・13（第17図版1～3・6・7・9）に示した。3・5・6・9・10の5点は口縁破片で、他は胴部の破片である。これらの土器は茶褐色ないし赤褐色を呈し、胎土に石英やチャートの破片を混入する。器面は摩耗したものが多く、調整痕を残すものは少ないが、擦痕を施したとみられるものやなでたものなどがみられる。文様は先端の幅4～5mmの篋を用いて、横捺刻文や押引文を施している。3と8は文様の上下の間隔がやや広く、荻堂式の可能性もある。5は口縁の状況や色調からすると大山式とみたいが、小破片のため保留にしておく。6・7は刻文が施されており、大山式とみていいだろう。9・10・13の3点は凸帯文が1条認められるもので、横捺刻文や沈線などが組み合わされている。この種の凸帯や文様は荻堂式にはみられないので、大山式に含めてよいかと思われる。

以上、大山式およびその可能性のあるものについて述べた。しかし出土量が少なく、文様・器形ともにそのヴァリエーションの範囲をおさえることができなかったが、それについては今後の資料に期待したい。

#### E) 第五類土器（カヤウチバンタ式土器）

口縁部が花鉢状に肥厚する土器である。本トレンチでの出土は10点で、器形の復元可能のものは

ないが、大山貝塚で復元されたもの(5)を参考にすると、口径が胴の最大径よりも一般に大きく、底部は平底になる器形のようなものである。文様を施すものと無文のものがあり、文様を施す場合は、肥厚部・口唇部に施文するのが一般的であるが、本トレンチでは肥厚下に文様を施したものが1点発見されている。施文具は幅広の単篋を用い、叉状工具を使用したものは未発見である。本トレンチでは文様を施すもの6点、無文4点の計10点が検出されたが、いずれも小破片である。そのうちの6点を第18図11・15・17・19・20・22（第18図版1～3・5）に示した。出土状況は第3表のとおりである。

過去、カヤウチバンタ式土器のうち有文のものを地荒原A、時代の下るものを天久Aとそれぞれ仮称してきた(15)。しかし、本貝塚調査の結果、さらにヴァリエーションのあることが分った。そこで本文では従来の仮称を保留し、カヤウチバンタ式の呼称を暫定的に使用することにする。この土器については調査終了後、各発掘区のものについて総合的に検討したい。

以下、本トレンチ出土のカヤウチバンタ式について略述する。

第18図11は先端のやや細い単篋を用いて、口唇部に1条、肥厚部外面に3条の短沈線文を施すが、この文様が肥厚下におよぶかどうかは不明である。施文は深く、文様は鮮明である。色調は両面黄褐色を呈し、泥胎質の土器で石灰岩粒を僅かに混入する。器面はなでられ、擦痕はみられない。肥厚部は上部で厚く、下部で薄い。第Ⅱ層の出土である。

同図15は肥厚部外面に2条の押引文を施す泥胎質の土器で、口唇部は無文。下方は肥厚部直下で破損している。色調は両面とも橙色で、胎土には少量の石灰岩砂粒を混入する。焼成は普通。第Ⅱ層の出土である。

同図17は器面がアバタ状を呈する泥胎質の土器で、胎土には少量の石灰岩砂粒を含み、焼成は極めて悪い。文様は肥厚部外面に一条の押引文を施す。口唇部は若干内傾し、内面と接する部分は角

ばっている。器色は両面ともに黄褐色で、外面はなでられ滑かである。第Ⅲ層の出土である。

同図19は口唇部・肥厚部外面および同直下に1条の横捺刻文を施したもので、口唇部は丸味を帯びて内傾する。肥厚部の幅は狭く、他の典型的なものに比べると、寸詰りの感じを受ける。色調は外面暗褐色、内面黄褐色で、胎土は泥胎質。石灰岩砂粒を比較的多量に混入する。焼成は良い。第Ⅱ層の出土である。

同図20は口唇部の欠失したもので、肥厚部はかなり扁平化している。肥厚部外面にはシャープな沈線で綾杉文が施されている。器色は両面ともに赤褐色で、石英を少量含み、焼成は良好である。胎土は粒子が粗い。器面が石灰分で被われているため、擦痕の有無は確め得ない。第Ⅳ層の出土で、本トレンチでは最古の肥厚口縁土器ということになる。

同図22は口唇部を欠く無文の資料であるが、今回の採集品の中では断面形式が比較的整ったものである。泥胎質で、少量の石英質砂粒を含む。焼成は良好。表裏には僅かに擦痕が見受けられるが軽くなで消している。第Ⅲ層の出土である。

その他に、無文の第五類土器が4点出土している。いずれも茶褐色を呈し、胎土には石英の他に磁鉄鉱を含む。焼成は普通である。

以上、10点についてみると、泥胎質のものとうでないものがあり、出土量はおのおの5点である。前者には石灰岩片、後者には石英や磁鉄鉱を混入する傾向がみられる。これらの層位的出土状況をみると、前者は第Ⅱ層で多く（3点）、第Ⅲ層で2点、後者は第Ⅰ層で1点、第Ⅱ層で1点、第Ⅲ層で2点、第Ⅳ層で1点の出土となっており、両者の前後関係を暗示しているように思われる。

#### F) 第六類土器（宇佐浜式土器）

口縁部断面が三角形またはカマボコ状に肥厚し、尖底または丸底に終る器形で、口径は一般に胴径より小さい。この土器は、時間的に幅があり、文様を施すものと無文のものがある。

この土器も有文のものを地荒原B、時代の下降

するものを天久Bとそれぞれ仮称(15)してきたが、カヤウチバンタ式同様再吟味の必要があり、本文では暫定的にこれらを一括して宇佐浜式と呼ぶことにし、調査終了後に改めて細分編年を行いたいと思う。

本トレンチでは7点（第19図1～7、第18図版6～11）検出されたが、器形全体を推定できるようなものは皆無で、いずれも無文口縁の小破片ばかりである。第Ⅱ層で5点、第Ⅲ層で2点出土し、第1層および第Ⅳ層での出土はなかった。以下、本トレンチ出土の宇佐浜式土器について記述する。

第19図1～3・5・6の5点はいずれも胎土に多量の石英を含み、それらが器面に露出し、手ざわりがザラザラしているもので、同図1は肥厚部がやや扁平化し、表裏ともに茶褐色を呈し、焼成は比較的良好で、両面はなでられ、擦痕はみられない。肥厚部の厚さは最大12mm、胴部は7mm。第Ⅱ層の出土である。

同図2は断面が整った三角形を呈するもので、色調は暗褐色、焼成は良好で堅緻である。器面の調整は内外面ともになでによって行われ、滑らかである。器面調整の良好なのはこの1例だけである。石英を多量混入する。器壁の厚さは肥厚部で最大14mm、胴部で7mm、第Ⅱ層の出土である。

同図3は茶褐色を呈し、混入物は石英の他に大粒の石灰岩片がみられる。焼成は不良。器面はくずれ、擦痕の有無は不明、器壁の厚さは肥厚部で最大1cm、同直下で6mm。第Ⅱ層の出土である。

同図5は口唇部が丸味を帯びたもので、両面ともに茶褐色を呈し、焼成は普通、擦痕はみられない。器壁の厚さは肥厚部で12mm、同直下で9mm。第Ⅱ層の出土。

同図6は断面形式のくずれたもので、肥厚部は扁平化し、辛うじて断面は三角形を保っている。色調は明るい褐色。内面は茶褐色。焼成は普通。擦痕はみられない。器壁の厚さは肥厚部で11mm、同直下で7mm、第Ⅲ層の出土である。

同図7は口径推算10cm、器壁の厚さは肥厚部で最大6mm。胴部で5mmの小型の宇佐浜式である。色調は表裏ともに茶褐色を呈し、胎土は粗く、石

英を含む。焼成は普通。第II層の出土である。

同図4は泥胎質の土器で、肥厚部の形状は比較的整っている。胎土には少量の石灰岩砂粒を含み、焼成は良い。両面なでられ器面は滑かである。器厚は肥厚部で最大11mm、同直下で8mm。第II層の出土。

以上、宇佐浜式土器について記述したが、土器の諸特徴から同図4以外は、同一時期の所産と考えられる。この4の資料は泥胎質で石灰岩を含むことから、前記諸資料にやや先行する時期のものかと考えられる。

#### G) 第七類土器 (その他の土器)

第七類土器としたものは、奄美系土器を除き先述の第一類～第六類に含め得ないものをここにまとめた。したがっていろいろの土器をここで取り扱うことになるが、中には将来、型式設定の可能なものも含まれている。本文ではA～Eの5種に分けて説明したい。層位的出土状況は第3表のとおりである。

#### イ) 口縁部が肥厚するものは3点ある。

第18図18 (第18図版12)は口縁部の断面が四角形を呈するもので、口唇部は平担で幅が広い。文様は単篋を用いて押引文を口唇部に1条、肥厚部外面に1条施し、頸部では同種施文具による縦位の沈線文が2条施文されている。石灰岩砂粒を少量含む泥胎質の土器で、器面はポーラス。色調は外面は橙色、内面は赤褐色で焼成は悪い。第III層の出土。

同図16・21 (第18図版14・16)は口縁部を強く折り曲げたために、一見肥厚口縁に見えるもので、いわゆる疑似肥厚口縁である。16は折り曲げた部分が比較的大きく、口縁部の断面形状は前記18に近い。頸部には単篋描きの横走する2条の押引文が施されている。色調は表裏ともに橙色で、胎土は極めて少量の石灰岩砂粒を含み、焼成は悪い。泥胎質の土器で、器面はポーラス。第II層の出土。

21は口縁部を小さく折り曲げたもので、無文、泥胎質の土器である。色調は表裏とも茶褐色を呈

し、胎土には多量の石灰岩砂粒を含む。焼成は悪く脆弱である。第II層の出土である。

以上3点の土器は胎土・焼成・混入物等が一致し、出土層位からみて、大山式以後の所産と考えられるが、明確な時期は今のところ不明である。

ロ) 口縁部の肥厚しないものは10点検出された。そのうち主なもの4点を第19図9～12 (第18図版17～19)に図示した。

第19図9～12に示したものは口縁部が外反する無文の土器である。同図9・11に示した2点は胎土に多量の石英を混入する。

9は口唇部の断面が舌状に近いもので、表裏ともに茶褐色を呈し、焼成は普通。器面はなでによって調整され、両面とも滑らかだが、内面には調整痕が僅かに残っている。器壁の厚さは約7mm、第III層の出土。

11は口唇部の幅が比較的広く、平担である。外面は調整され滑らかだが、内面に調整痕が一部残っている。色調は両面茶褐色で、焼成は普通。第III層の出土である。

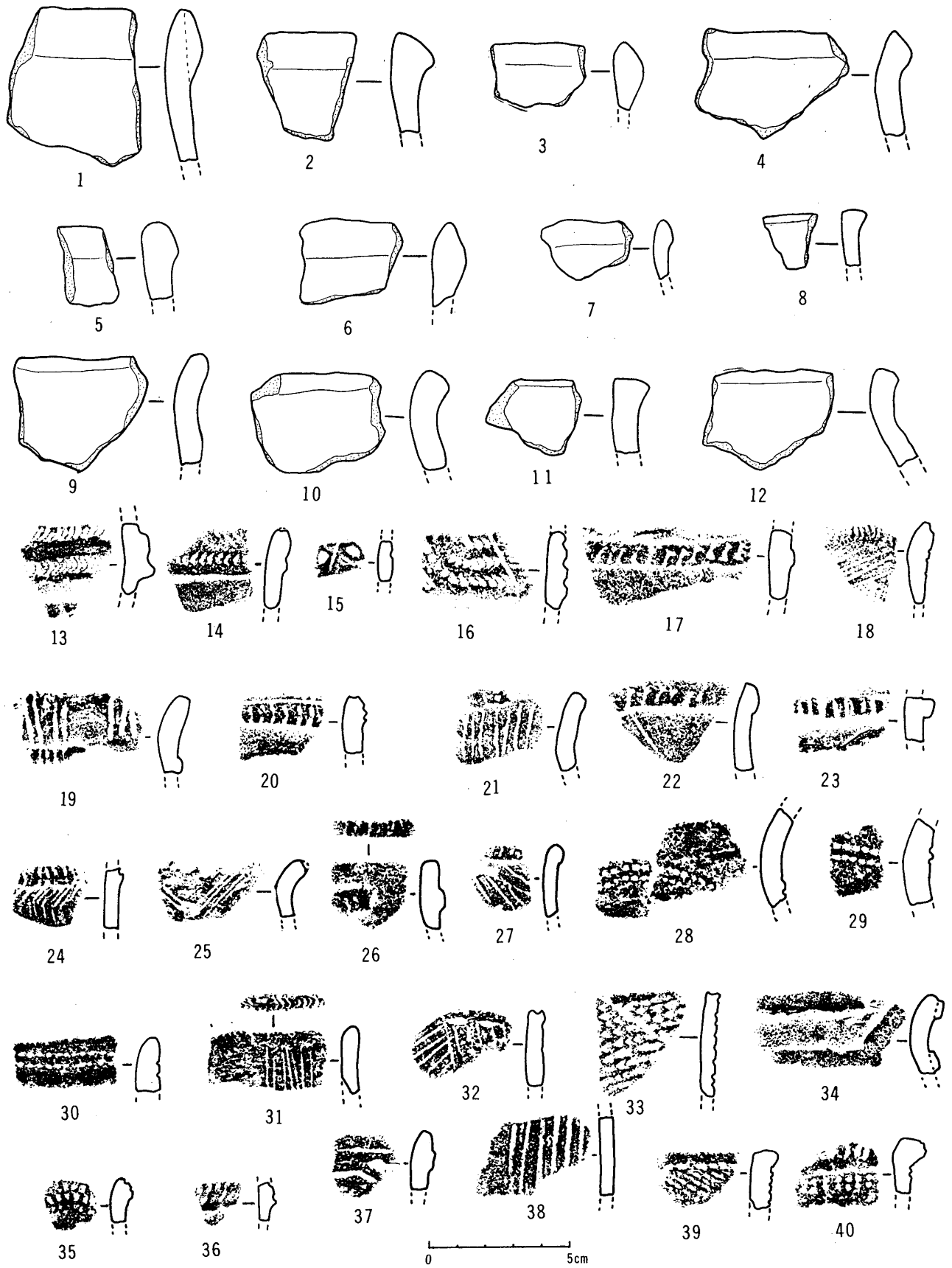
同図10・12の2点は器面がアバタ状を呈し、胎土には少量の石灰岩砂粒を含む焼成の悪い脆弱な土器である。前者は赤褐色、後者はやや黄色味を帯びている。10は第III層、12は第II層の出土である。

ここにまとめた10点についてみると、泥胎質のものが3点、胎土の粒子が粗く器面のザラザラしたものが7点、前者は第II層で2点、第III層1点、後者は第II層で5点、第III層で2点の出土となっている。

ハ) 第18図版4に示したものは、口径約8cmの壺形土器の口縁破片である。泥胎質の土器で、口頸部には2条の押引文が認められるが、下端部は文様の部分で破損し、以下は不明。口唇部にも同種文様が1条施されている。器色は表裏ともに黄褐色で、胎土には極めて少量の石灰岩砂粒を混入している。焼成は良好。器壁の厚さは約7mm、第II層の出土である。

#### ニ) 凸帯を施すもの

第18図10・14 (第17図版8・9)の2点は凸帯



第19図 Mトレンチの第六類土器（宇佐浜式＝1～7），第七類（その他の土器，8～12）  
および奄美系土器（13～40）

文を施す口縁破片で、同図10は口唇下約6mmの箇所  
に凸帯を1条圍繞したもので、凸帯上には刻目  
が施されている。器色は赤褐色を呈し、胎土には  
石英粒を多量混入する。焼成は悪く脆弱である。  
器面の調整は良い。第Ⅲ層の出土。

同図14は口唇の約3cm下方に横位の凸帯を施し  
ている。器色は両面ともに明るい褐色で、胎土に  
は多量の石英粒、少量の磁鉄鉱を含み、焼成は良  
好で固い。器面調整は良く、両面ともに擦痕を施  
した後、なで消しているが、消えきっていない。

これらの土器は胎土・焼成・混入物等からみると、  
前者は大山式、後者はそれよりやや下降する  
時期が想定される。

#### ホ) 搬入品とみられる土器

第14図4(第26図版1)の土器は図上復元の可  
能なもので、口径約15cm、高さ20cm、底径8cm、  
ピットM-7、第Ⅲ層40~50cmレベルの出土で、  
第12図4の荻堂式と折り重なって発見された。

この土器は底部から口縁部へ直線的に開く特殊  
な器形に属するが、均整さに欠け、頸部ではしま  
る箇所とそうでない部分がある。頸部と胴部の堺  
はやや膨れあがり、「く」字状の屈曲を示し、その上  
に篋描きの不規則な列点文を配している。この土  
器は口唇部が僅かに残っており、口唇上にも刺突  
文を施している。口縁部の破片が小さいため、平  
口縁かあるいは山形突起を有していたかは不明。

器色は暗褐色で焼成は良好。胎土には石英のほ  
か雲母を僅かに混入する。この土器は、先述のよ  
うに荻堂式に伴出したものであるが、器形・文様  
・その他の特徴が、伊波式や荻堂式と異なり、沖  
縄で焼成されたものとは思えない。搬入品と考え  
られるが、生産地は不明である。先述の出土状況  
から荻堂式に共伴する土器とみていいかと思う。

#### ハ) 奄美系土器

本トレンチ出土の奄美系土器は33個ある。その  
うち文様の明瞭なものを第19図13~40(第20図版  
)に示した。

型式分類は河口貞徳氏のそれに従った(16)。本ト  
レンチより出土した奄美系土器には①面縄東洞式、

②嘉徳Ⅰ式、③面縄前庭式、④喜念Ⅰ式のほか、  
⑤奄美的な文様をもつ土器もここに含めた。以下、  
前記諸型式について説明する。

#### 面縄東洞式(第19図13・14)

2点とも口縁部の破片である。13は口唇部を欠  
くが、口縁の肥厚部に爪形文を右から左へ押し  
しながら施文する。押しに際しては、力が加え  
られているため、施文部は深い凹線になっている。  
器色は暗褐色を呈し、焼成は良好で、堅緻な土器  
である。胎土には粒の粗い石英と、少量のチャ  
ートが含まれる。ピットM-6、第Ⅲ層20~30cm  
レベルの出土。

14も口縁の肥厚部に爪形文を施す。口唇部にも  
爪形文を施すが、同部摩耗のため文様は明瞭でな  
い。器色は赤褐色で焼きは良い。石英とチャ  
ートを胎土に混入する。両者とも小破片のため、口  
径・器形等詳細は不明である。ピットM-5第Ⅲ層0  
~10cmレベルの出土。

#### 嘉徳Ⅰ式(第19図15・16)

爪形文または刺突文と沈線文とを組み合わせ、  
文様を構成する。

15は小破片で施文部位は不明。刺突文と沈線文  
とを組み合わせている。器色は黒褐色を呈し、焼  
成も良好である。ピットM-4、第Ⅲ層20~30cm  
レベルの出土。

16は口縁の肥厚部に刺突文を施文し、それに斜  
沈線を加えたもので、刺突文の1つは上段から下  
段に斜めに走り、下段で屈折して横位の方向をと  
り、L字形に近い文様となる。口唇部は破損。口  
径は不明である。器色は茶褐色を呈し、焼成は良  
好である。ピットM-4、第Ⅲ層0~10cmレベル  
出土。両者とも、胎土には石英が含まれる。

#### 面縄前庭式(第19図17・19~27・35・36)

刻目凸帯を貼付した土器をここにまとめた。凸  
帯および刻目の特徴から、これらの土器は面縄前  
庭式に属すると考えられる。凸帯の上下に文様の  
認められるものと認められないものがあるが、後



者は破片が小さいためかもしれない。胎土には石英やチャートが含まれている。本トレンチでは12点の出土があり、そのうち口縁部は8点で、他は頸部の破片である。

頸部の破片は第19図17・23・24・36の4点である。17は器面が摩耗しているが、裏面には横位の擦痕がみられる。凸帯は扁平で、刻みは比較的深い。凸帯下方に文様は認められないが、凸帯上方での文様の有無は不明である。赤褐色の土器で、M-5、第Ⅲ層10~20cmレベルの出土。

23は本遺跡出土のこの種の土器では最も凸帯の厚いもので、断面は半円状をなす。刻目は比較的密で、深い。赤褐色の土器でピットM-7第Ⅲ層20~30cmレベルの出土。

24は頸部に羽状の沈線を施しているが、沈線は細く、浅い。凸帯も細く、その上に刺突文を施している。ピットM-5、第Ⅲ層10~20cmレベルの出土。器色は茶褐色。

36は胎土に石英を混入し、裏面にのみ横位の擦痕が認められる。色調は茶褐色、焼成は良好である。

口縁部の破片は8点である。同図19は面縄前庭式の典型的なもので、頸部には1条の凸帯がみられ、その上方には縦位の沈線が施されている。凸帯は細く、刻目は密である。黄味を帯びた茶褐色の土器で、ピットM-4第Ⅲ層40~50cmレベルの出土。

20は口唇部および扁平な凸帯上に叉状工具による刺突文を施す。器色は19と同じ。ピットM-2第Ⅲ層0~10cmレベルの出土。

21は口縁上端に凸帯を貼付するが、破損が著しい。凸帯には刺突文がかすかに認められる。凸帯下方に縦位の深い沈線を施す。表面はすすけて黒くなり裏面は19と同色。ピットM-5第Ⅲ層10~20cmレベルの出土。

22は口縁上端に幅広の扁平な凸帯を貼付する。凸帯上には刻文を施し、頸部には斜沈線の一部が認められる。赤褐色の土器で、ピットM-7第Ⅲ層の出土。

25は口頸部の破片で、凸帯は認められない。頸

部には方向の異なる斜沈線が施されている。凸帯は認められないが、色調・焼成・文様等の特徴から面縄前庭式の破片かと考えられる。M-5第Ⅲ層10~20cmレベルの出土。

26は凸帯の一部を残す破片で、口唇部および凸帯上に刺突文を施す。口頸部に文様は認められない。表面は黒褐色で、裏面は黄褐色である。M-5第Ⅲ層10~20cmレベルの出土。

27は口縁上端に凸帯を貼付したもので、凸帯上に刻目が浅く施されている。凸帯は細く、扁平である。凸帯下には浅い斜沈線が認められる。赤褐色の土器で、M-5第Ⅲ層0~10cmレベルの出土。

35は扁平な凸帯を口縁部に貼付したもので、凸帯上および口唇部に刺突文を施す。器色は赤褐色を呈し、焼成は良好である。M-5第Ⅲ層10~20cmレベルの出土。

凸帯には細いものと若干幅広いものがあるが、出土量に大差は認められない。凸帯は一般に扁平で、やや厚みのあるのは同図23の1点だけである。

#### 喜念I式(第19図28~30)

3点とも同一個体の破片かと思われる。胎土には石英と雲母が多量に含まれる。

30は口縁破片で、細隆帯文と刺突文が水平方向に施され、口唇部にも2条の点刻文が施されている。28の文様は孤状を呈し、29は斜位に施されている。他の奄美系土器に比べると、いずれも器壁は厚く、8mm前後である。器色は赤褐色を呈し、焼成は良好で、硬質である。28はM-5第Ⅲ層10~20cmレベルの出土。29・30は表面採集資料である。

その他の奄美系土器(第19図18・31~34・37~40、第17図版11)

奄美的文様を施文するもので、前記諸型式に含め得ないものを本項にまとめた。これらの土器はいずれも沖縄の土器とは異なるもので、38以外はすべて口縁破片である。

18は尖った口唇部の外面に縦方向の刻目があり、その下に4条の浅い沈線が認められる。器色は黄

褐色だが、口縁上端（外面のみ）は暗褐色である。胎土には石英が含まれ、焼成は良好である。口径は不明。ピットM-2, 第I層の出土。

31は口唇部にも刻文がある。口縁外面には浅い細沈線が縦に数本認められる。口径は不明で、胎土には石英・貝が含まれ、表面では擦痕が横位に施されている。器色は黒褐色で焼成は良好。M-5 第III層0~10cmレベルの出土。

32は口唇部と口縁上部に一条の点刻文があり、その下には方向を異にする斜沈線が数条認められる。器壁は薄く約5mmである。器色は赤褐色を呈し、焼成は不良で脆弱である。胎土には微細な石英が含まれる。M-1 第I層の出土。

33は器厚約5mmの薄手の口縁破片で、刺突文が左から右へ施され、文様帯は他の土器に比し、広いようである。また口唇部にも同種の文様を一条施す。色調は暗褐色を呈し、胎土には粒の粗い石英と雲母が含まれ、焼成は普通である。類例は沖縄においては阿嘉島のウタハ貝塚(17)、奄美では面縄第二貝塚(1)で報告がある。M-2 第III層10~20cmレベルの出土。

34は口縁と頸部にそれぞれ横位の凸帯を施し、両者を斜めの凸帯で結んでいる。凸帯は比較的厚いが、貼付は雑である。胎土には粒子の粗い石英・チャート・雲母等を混入する。器の表面はなでられ、滑かだが、裏面はくずれ、手触りがザラザラしている。器色は暗褐色を呈し、焼成は極めて良好、堅緻な土器である。この標品には沈線文はみられないが、焼成・胎土・混入物・色調等が面縄前庭式に類似し、時期的に近いものかと思われる。

37は口縁部の貼付文が途中で分岐して2本に分かれる。貼付文以外の文様はみられない。器面の保存が悪く、調整痕の有無は不明。胎土には石英が含まれている。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。M-5 第III層10~20cmレベルの出土。

38は薄手の胴部破片で、ペアになった沈線が縦に3組みられる。胎土には明度の高い石英が多量に含まれ、裏面には横位の擦痕が残る。器色は黒褐色を呈し、焼成は良好である。M-5 第III層0~10cmレベルの出土。

39は口縁上部に1条の連点文があり、その下位に細い連点文を斜めに施す。口唇部は少し外側に張り出している。胎土には石英と貝殻が含まれ、器色は橙に近い。焼成はやや悪く、脆弱である。M-4 第III層20~30cmレベルの出土。

40は肥厚した口唇部に叉状工具による点刻文、肥厚部外面に縦長の刺突文を施し、頸部にも点刻文が見受けられる。胎土には粒の粗い石英とチャート、石灰岩片が含まれ、器色は表面は暗褐色、内面は赤褐色を呈する。焼成は悪く脆い土器である。M-2 第II層20~40cmレベルの出土。

第17図版11に示したものは口縁破片で口径は推算11cm。口唇部で僅かに外反し、胴部がやや脹らむ小型の深鉢器形かと思われる。文様は口唇部に単篋の押し引き文を施すが、口縁部は無文である。器厚は破片下方で7mm、上方に行くに従って薄くなり、口唇部では3mmを計る。器色は表裏ともに赤褐色を呈し、胎土の粒子は細かく、少量の石英を含む。焼成は普通。この土器は胎土や色調などから奄美系の土器とみられる。ピットM-4 第III層0~10cmレベルの出土。

以上奄美系土器について記述した。これらの土器は第3表のように主として第III層で出土した。しかし、これらの土器が沖縄諸島のどの型式の土器に共伴するのかは本トレンチではおさえることができなかった。

#### I) 底部

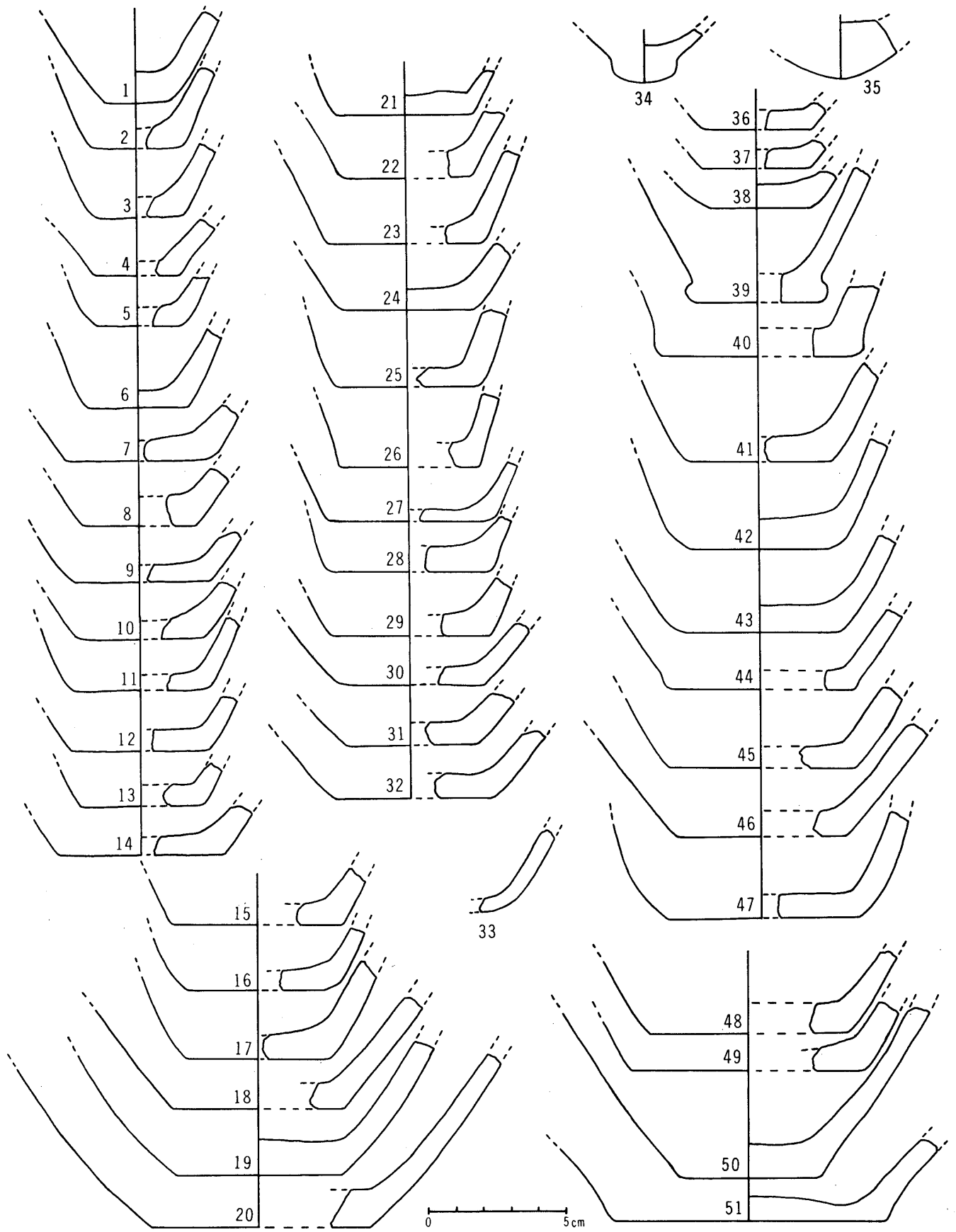
Mトレンチで得られた底部は表面採集品1個を含めると143個である。その中で底部形状の比較的明瞭なものを第20図（第19図版）に示した。底部は3種に大別できる。すなわち、平底、丸底、尖底の3種である。

#### イ) 平底

平底はさらに下記の3種に細分される。

- ① 胴部へ移行する立ち上がりの部分が僅かに外曲するもの
- ② 胴部へ直線的に移行するもの
- ③ くびれているもの

このうち最も出土量が多かったのは①で、全体



第 20 図 M トレンチ出土の土器底部

の約85%を占め、次に②が13%で多く、③のくびれ平底は僅かに1個であった。底部がほぼ完全に残っているのは1個（第20図50，第19図版1）であるが、底径の推算可能なものは52個ある。そのうち図示した48個についてみると、①の場合、底径の最大は10cm，最小は2.3cmで4～6cmのものが最も多い。また②の場合，最大は7.8cm，最小は5.2cmで，6～7cmのものが最も多く，4～5cmのものがそれに次ぐ。③のくびれ平底（第20図39・第19図版15）の底径は約5cmである。

記サイズの底部には大山式に属するものもあるかもしれない。しかし，大山貝塚発見の大山式土器には3cm前後のものがあることから，大山式の底径は概ね3～5cmにおさまるか推察される。

①・②についてみると，底部の厚さは5～14mmで，中央部の盛り上がったものも1例（第20図51）ある。胎土の混入物は石英やチャートで，外面は比較的良く調整され，滑らかである。器色は赤褐色や茶褐色を呈するものが最も多く，部分的に黒褐色を呈するものもある。以上の特徴に胎土や焼

第8表 Mトレンチの土器底部

形態	底径	ピット								計
		1	2	3	4	5	6	7	不明	
平底	① 2～2.9						1			1
	① 3～3.9					1				1
	① 4～4.9		1	1	1		4	2		9
	① 5～5.9		1	4	1		4	3		13
	① 6～6.9		2	2	2		1			7
	① 7～7.9				1		3	3		7
	① 8～8.9			1			1			2
	① 9～9.9			1	1		1			3
	① 10～10.9			1						1
	② 5～5.9				3					3
	② 6～6.9								1	1
	② 7～7.9	1		1				1		3
	③ 5～5.9						1			1
	底径不明	6	23	21	13	2	14	9		88
丸底							2		2	
尖底						1			1	
計	7	27	32	22	4	32	18	1	143	

類例遺跡（伊波・熱田原・荻堂・嘉手納貝塚）出土の底部についてみると形状は①，②に属し，底径は6cm前後のもの（5～7cm）が最も多く，本遺跡出土の①，②のもので，5～7cmのサイズのものには伊波式や荻堂式の底部と考えてよいであろう。また，本トレンチ出土の完形の大山式土器（第18図1）についてみると底径が4.7cmあり，前

成などの観察を加えると本トレンチ発見の大部分の平底は伊波式・荻堂式・大山式のいずれかに属するものであろう。

③のくびれ平底は沖縄諸島では新石器時代後期に盛行する型式であるが，同前期では皆無である。つまり，伊波式・荻堂式・大山式土器あるいは一連のカウチバンタ系土器の底部とは見做し難い

のである。しかし、同期の浦添貝塚では若干くびれるタイプが報告されており、本例も奄美系土器と関連するものではないかと考えられる。

ロ) 丸底

丸底は2例ある(第20図33・35)。

35は中央部の厚さが2cmもある比較的厚底の破片で、焼成は普通である。器色は赤褐色を呈し、胎土には粗い石英・チャートが多量に含まれる。また底部外面には巻き上げの痕らしきものが認められる。M-6第Ⅲ層20~30cmレベルの出土である。

33は35と比べて器厚が5mmと薄手の底部破片で、焼きは良くない。赤褐色の土器で、胎土は細かく、石英を混入する。M-6第Ⅲ層20~30cmレベルの出土。

この両者のうち前者の丸底は、胎土が粗く、粒の粗い石英を多量に混入することや焼成などの点よりすると、中期グループに属するものかと考えられる。後者は色調・焼成・混入物などの特徴が前期的であり、大山式前後の資料かと思われる。

ハ) 尖底

第20図34(第19図版14)は本遺跡唯一の乳房状尖底で、ピットM-5の第Ⅲ層の最下部(地山直上)より出土した。器壁は薄く、器色は黒褐色を呈し焼成は良好である。胎土には多量の石英のほか雲母が散見される。調整痕はみられない。本標品を前記諸型式土器と比較検討すると、尖底という器形・混入物・焼成・色調等の特徴から、第一類土器の底部かと推察される。第一類土器は一般に厚く、その点この尖底土器の器壁は薄手に属するが、第4次調査では薄手の第一類土器も発見されており、しかもこの底部は最下部の出土であるから、第一類土器の底部とみてよからう。

室川貝塚発掘調査参加者

第一次調査 1974年12月26日~1975年1月5日

比嘉賀盛 上原 静 岸本義彦 玉城初子 中村 愿  
比嘉春美 宮城利旭 山田 正 吉本直子

第二次調査 1975年7月8日~7月18日

玉城朝健 平安秀子 上条とき子 末吉利恵子 津嘉山 健  
比嘉賀盛 岸本義彦 中村 愿 宮城利旭 山田 正  
(以上冲国大)  
嘉手川重紀 島袋友道 謝花 寿 桃原用保 徳永盛勇  
平識善正 (以上冲大)

第三次調査 1976年8月1日~8月25日

東江千栄子 翁長和成 儀保盛行 謝敷宗勝 島袋優子  
比嘉安雄 山内勝美 与那嶺 克 阿利直治 玉城朝健  
平安秀子 比嘉賀盛 比嘉春美 宮城利旭 山田 正  
比嘉栄哲 宮城隆一

## V テスト・ピット (0-7)

### i) 層序

ピット0-7はMトレンチとSトレンチの間に位置(第3図)している。序文で述べたようにMトレンチを設定した地区は貝塚を構成せず、Sトレンチでは焼土層下に貝層がみられた。このような両トレンチの相違を検討するためにピットR-7とQ-7の西北方延長上、つまり、両トレンチの間に0-7のテスト・ピットを設けたわけである。しかしながら、本ピットは大部分が造成時に攪乱を受け、未攪乱層は僅かに下部に認められただけであった。

層序は(第21図)5層からなり、第Ⅲ層以下が未攪乱層である。

第Ⅰ層は20~70cmで、Mトレンチ南方部と同じくシルト質泥岩の崩壊土が主である。南壁で厚く北壁側へ傾斜しながら、厚さを減ずる。ガラス片や鉄片などを含む攪乱層で、先史遺物としては土器や骨器が出土している。

第Ⅱ層も攪乱層である。厚さ20~60cmの暗褐色土層で北壁で最も厚く、攪乱がかなりの深度までおよんでいる。この層はピットの南西隅で切れている。ガラスの破片やアフリカマイマイ(戦時中に移入)のほか、土器や石器が発見された。土器の量はどの層よりも多かった。

第Ⅲ層は黒褐色土層で南壁側にのみみられた。最も厚い所は54cmで、平均15cm前後の厚さを有する。未攪乱層で人工遺物は土器だけである。

第Ⅳ層は南壁と東壁の接する東南隅の一部に残存する混貝土層で、厚さは20cm前後である。この混貝土層はSトレンチの焼土下の貝層に続くものと思われる。また、Sトレンチでみられた焼土層はこのピットでは認められなかった。整地作業によって消滅したものと思われる。人工遺物は土器だけである。

第Ⅴ層は10~50cmの黄褐色混礫土層で、以下は石灰岩の岩盤である。本層出土の人工遺物も土器だけである。

以上によってみると、南壁側では第Ⅲ層以下の

未攪乱層が認められたが、北壁側ではかなりの深度まで攪乱を受け、最下層の第Ⅴ層だけが未攪乱であった。このことから、このピットを1つの境として以北の部分が造成時に損壊を受けた部分ということになる。

### ii) 自然遺物

本ピットの自然遺物は第9表の通りで、食料の残滓と考えられる遺物(獣魚骨や貝類)と自然礫とに大別される。

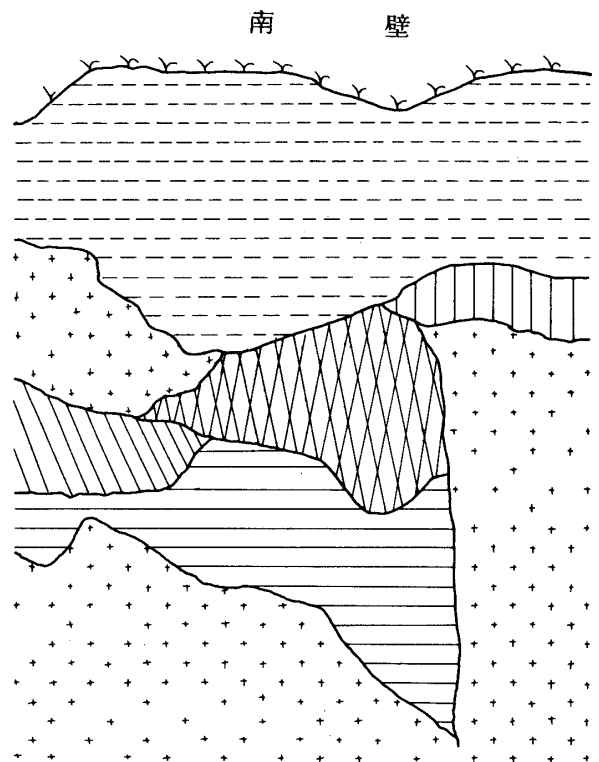
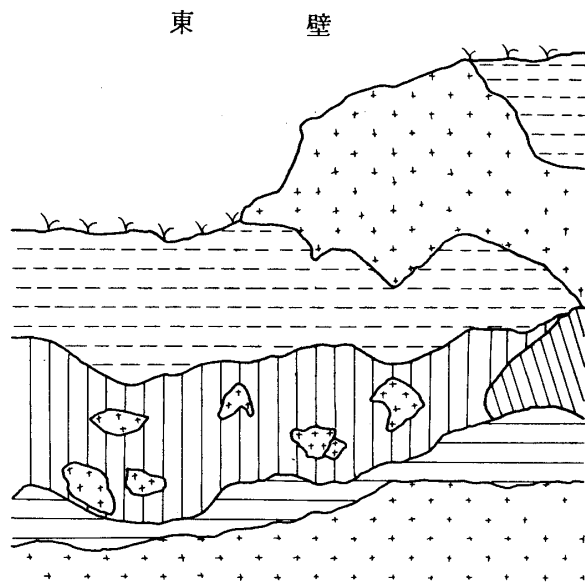
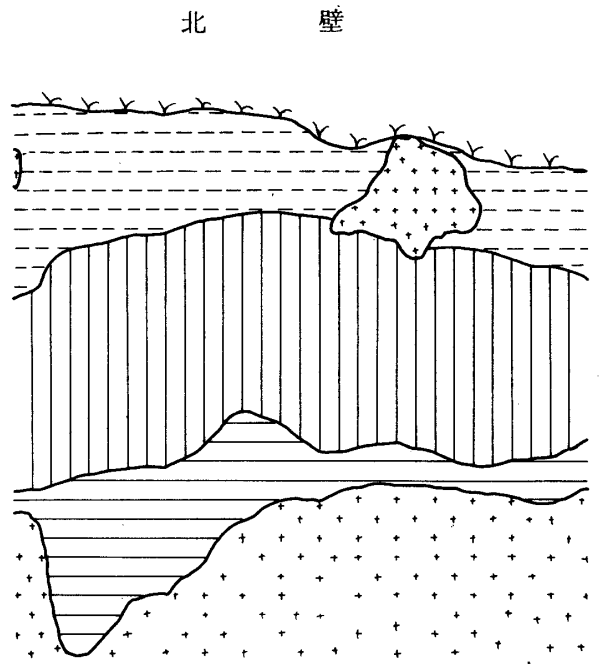
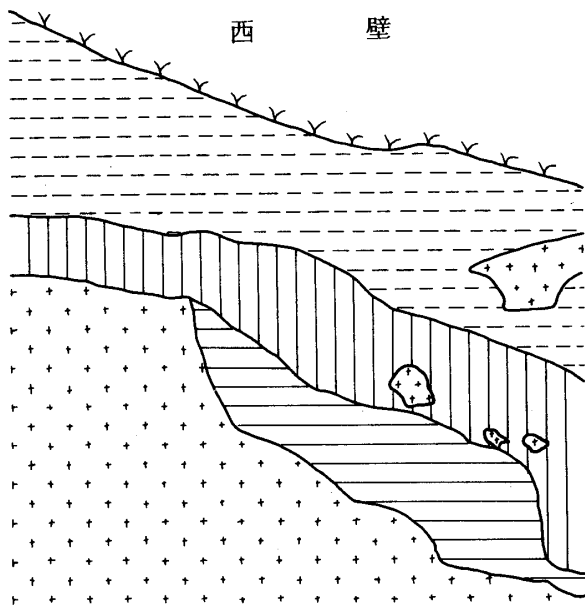
食料残滓と考えられる遺物には貝殻や獣魚骨の他、亀の甲らやカニのハサミ等があるが、いずれも第Ⅱ層(攪乱)で最も多かった。しかし、全体的に出土量は僅少である。







第Ⅳ層は前述のように混貝土層である。しかし、この貝層は東南隅の一部に見られただけで、ピット全体には広がっていなかったから、特に貝類の量的サンプルの採集は行わなかった。最も多かったのはアラスジケマンガイで、その他にイソハマグリやシャコガイ、リュウキュウザルボウなどが僅かながら見受けられた。Sトレンチの貝層の北端に当たるものと考えられる。

獣魚骨には、猪やジュゴン、ブダイの歯などがみられたが、未だ正式な同定は行っていない。

第9表 自然遺物出土表

種類	食料残滓		自然礫							合計			
	獣骨	魚骨	カニの甲	カニのハサミ	砂岩	砂質岩(島尻層群)	混質	輝緑	粘板		石英	チャートの剥片	
Ⅰ		3									1	4	
Ⅱ	64	7	8		6	1	2	1	1		1	1	93
Ⅲ	15	6	6	1	2	1		1					32
Ⅳ		2											2
Ⅴ	11	1	7						1		1	1	22
計	92	14	24	1	8	2	2	2	1	1	1	2	153



-  シルト質泥岩層
-  暗褐色土層
-  黒褐色土層
-  混貝土層
-  黄褐色混礫土層
-  石灰岩

0 50 cm

第21図 ピット0-7 側壁図

自然礫は破損のものも含め19個出土したが、そのほとんどが攪乱層（II層）の出土である。石質は、砂岩が比較的多く、他に砂質千枚岩やシルト、粘板岩、輝緑凝灰岩などがみられた。それらの大部分は石器製作用の母岩として持ち込まれたものであろう。

### iii) 人工遺物

#### A) 石器

本ピット出土の石器は2個で、いずれも第II層（攪乱部）の出土である。

第22図29（第21図版17）は輝緑凝灰質千枚岩製の扁平な片刃石斧で、刃部の一端が欠損している。打欠痕や敲打痕の消えきらない個所もあるが、両面とも一応磨研が施されている。

長さ8.5cm、幅4.5cm、厚さ1.1cm

同図30（同図版16）は刃部の破片で、泥質千枚岩製である。刃部は両面ともよく磨かれている。横断面は扁平である。幅5.1cm、厚さ1.6cm

#### B) チャートの剥片

チャートの剥片が第I層、第II層および第V層でそれぞれ1点の計3点検出されたが、製品は含まれていない。

#### C) 骨牙製品

骨牙製品には実用品と装飾品の2種があり、それぞれ1個の発見である。

第22図27（同図版15）は獣類の長管骨を利用したもので、一端をポイント状に加工しているが頭部は欠損している。加工はラフで、先端部内面にのみ研磨を施している。刺突具の一種であろう。第I層（攪乱部）の出土である。現資料の長さ5.2cm、幅1.8cm、厚さ6mm。

同図28（同図版14）はイノシシの牙を加工したもので、完形品である。先端近くには牙を一周する浅い溝が繞らされ、下端部では内側だけに刻みが施されている。おそらく紐をくくるための刻みであろう。下端部の外側を一部L字状に加工し、加工面は研磨が施されている。腕輪などの一部を

なすものかと思われる。第II層（攪乱部）の出土で、長さ7.5cm、幅約1.2cmである。

#### D) 土器

土器は完形品はなく、すべて破片で142個の出土であった。これらの土器をMトレンチの型式に従って分類すると第10表のとおりで、第一～第四類土器に限られ、第五類および六類は出土していない。以下、本ピットの土器について記述する。

第10表 土器出土表

層序	種類							合計
	第一類	第二類	第三類	第四類	類別不能	無文口縁部	無文胴部	
I	1	1				1	13	16
II	8	3		1	4		62	78
III			1		1		13	15
IV							2	2
V	5	2		1	2	1	2	18
合計	14	6	1	2	7	1	3	108

##### a 第一類土器

Sトレンチの地山で単独に出土したもので、本貝塚最古の土器である。表採で1個（第21図版3）第II層で8個、第V層で5個の計14個の破片が得られた。口縁破片や底部は含まれず、すべて胴部の破片である。そのうち5個は文様を有する。第22図1～5に示した標品で、すべて第II層の出土である。

Mトレンチの分類にしたがえば、この土器は次の3種に大別される。

第1種 篋で文様を描いたもの

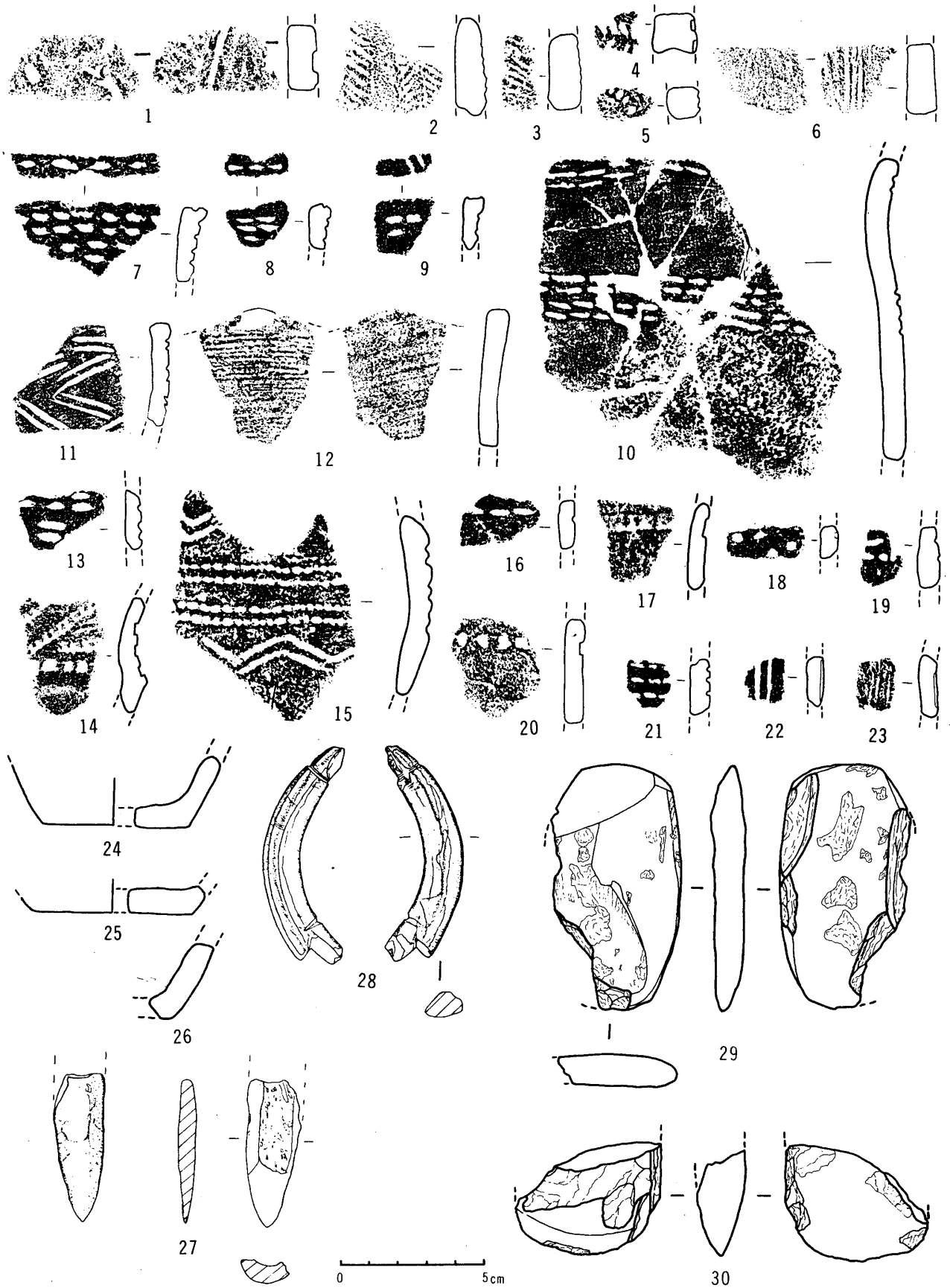
第2種 篋と貝の腹縁を使用したもの

第3種 貝の腹縁のみによるもの

以上の3種であるが、本ピットでは第1種のみ得られ、第2～3種の出土はなかった。

同図1（同図版2）は、左端に篋による列点文の一部が見え、拓影では明瞭でないが、右端では沈線文が斜めに走っている。沈線はきわめて浅い。裏面には条痕が斜めに施されている。器厚は9mm





第22図 ピット0-7出土の人工遺物

で、器色は表裏共に黒褐色である。胎土には石英を多量混入し、また僅かながら雲母もみられる。

2（同図版1）は羽状の沈線を縦位に施したもので、左に1列、右に2列認められる。器厚は約1cmで、器色は表が黒褐色、裏は茶褐色である。胎土には多量の石英と少量の雲母が含まれている。

3（同図版4）は沈線文を斜位に浅く施したものである。器厚は1cmで、器色は表が茶褐色、裏は黒褐色である。胎土には多量の石英が含まれている。

4は沈線を羽状に配している。器厚は1.4cmで、器色は表が黒褐色、裏が茶褐色である。胎土には石英を多量に含み、また僅かながら雲母もみられる。

5は列点文が孤状に施されている。裏面は破損しているが、残存部の厚さは1cmである。器色は表裏共に黒褐色で、多量の石英を含む。

6は条痕を施す例で、裏面は明瞭だが表面はなでられ消えかかっている。器厚は約9mmで、器色は表裏とも茶褐色である。石英を多量混入する。

第一類土器は一般に脆く、焼成は不良である。また、本貝塚出土の他の型式と比較すると器壁は厚く、器色も異なっていて、無文胴部破片でも、他の土器から区別することは容易である。

#### b 第二類土器

第二類に属する土器は第22図7～13の7点である。

同図7～9（同図版5・8・10）は口縁部の破片で、点刻文が水平方向に施されている。同図13は同種の文様を施す胴部破片である。この4点は伊波式に分類できると考えるが、破片が小さく下記3種のどれに含めるべきかは不明である。

#### 第1種

口縁部と胴上部に点刻文、連点文、短沈線文などを水平方向に施文し、両文様間、つまり頸部部分を無文のまま放置するもので、本ピットでは1個の発見があった。同図10に示した頸～胴部の破片で、この破片から全形の復元を試みたものが

第22図版1である。この土器は第II層および第V層出土の破片を接合したもので、本ピットの土器では最大の破片である。

口径は推算19cm、胴の最大径は約16cm、器高約22cm、本遺跡ではやや大型の土器で、口縁部は外反し、胴上部が僅かに脹らむ平底の土器で、チャートや石英の破片を多量含む。胎土の粒子は粗く脆弱である。擦痕は見受けられない。器厚は約8mm。

文様は先端が叉状になった工具を使用し、短沈線を水平方向に施している。胴上部に2組、上端つまり口縁に近いところでは文様の最下段の一部が残っている。後者の文様は右上りの方向であるので、その上方に山形突起がくるものと思われる。この種の土器の口縁部文様は普通2組施されているので、復元に際し、一般的な施文方法を採用した。

#### 第2種

同図11（同図版6）は口縁の破片で、最上段に2条1組の横位短沈線文、その下に叉状工具による羽状文を配している。下端欠損のため下段の文様は不明。胎土の粒子は粗く石英粒を多量含む。焼成は比較的よい。第I層の出土。第2種はこの1片のみで、同種IIに属するものである。器厚は約6mm。

#### 第3種

同図12（同図版7）に示したもので、無文の伊波式と考えられるものである。山形の形状や口頸部のカーヴが伊波的である。この標品は山形頂部が若干破損している。表裏に粗い擦痕が横方向に密に施され、焼成は比較的良好である。暗褐色の土器で、胎土は粗く、多量の石英、少量のチャートを混ざる。器厚は約7mm、第V層の出土。

#### その他

同図16・18・19・21の4片には点刻文が施されている。伊波式に属するものかと考えるが、破片が小さいので、分類を保留した。いずれも胎土は

粗く、石英を多量混入するが、チャートを少量含むものもある。21を除き焼成は悪い。同図22は平行の沈線が縦に走っている。伊波式か萩堂式のいずれかに属するものであろう。同図23は器面摩耗のため文様が拓影でははっきりしないが、細沈線が縦に3本、斜めに1本見える。沈線が極めて細く奄美的な感じの土器である。16・18・21の3点は第II層、22は第III層、19・23の2点は第V層の出土である。

同図14（同図版9）は頸部の破片で、半截竹管状工具で、横と斜めの方向に押し引き文を密に施している。胴部から頸部に至る部分の屈曲が著しく、九州の影響を受けた器形かと推察される。しかし、胎土や混入物、焼成等からは沖縄の前期の範疇におさまる土器である。文様の構図は萩堂式より伊波式に近い。石英を多量に含む焼成のよい土器であるが、器形の点では注意を要する土器である。器厚は屈曲部で8mm、頸部は約5mm、第II層の出土である。

#### c 第三類土器

萩堂式で同図15（同図版11）に示した1点だけである。本標品は頸～胴部の破片で、口縁部へ向って若干径が小さくなる。器面は摩耗しているが文様は明瞭である。現破片の最上部は鋸歯文、その下に2組の連点文、最下段に鋸歯文を配している。鋸歯文は短沈線を組み合わせたもので左から右の方向に描いている。多量の石英、少量のチャートが含まれている。胎土は粗い。焼成は普通。器色は茶褐色、器厚は8mm、なお、胴径の最大は推算13cmである。第III層の出土。

#### d 第四類土器

同図17・20に示した2点で、いずれも胴部破片である。20（同図版12）は第V層の出土で、単篋により点刻文を施す。胎土は粗く石英が多量含まれている。表裏ともに茶褐色を呈する。器厚は7mmでもろい。17（同図版13）は第II層の出土である。器面が著しく磨滅しているので文様は明瞭ではないが、幅のある単篋を用いて押し引き文を施

している。胎土には少量のチャート、多量の石英がみられる。器色は表裏ともに赤褐色で、器厚は7mmである。極めてもろい。

この2点は横捺刻文を施すということで、第四類としたが、Mトレンチの土器にみられたように、小破片では萩堂式か大山式か区別しがたいものがある。したがって、正確には不明の部に含めた方がよいかもしれない。しかし文様からすると大山式より下るものではないと考えられる。

#### e 底部

底部は平底が3個得られた。24は底径約5.2cm、底部の厚さは約8mmである。25は底径約5.6cm、底部の厚さは約9mmである。いずれも第V層の出土である。26は底径推算7cm、底部の厚さ約9mm、第I層の出土。内側に斜めの条痕がみられる。上記の3点とも器色は茶褐色で石英を多量含むが、チャートの破片もみられる。

#### iv) 小 結

以上が本ピットの土器であるが、文様でみると第一～四類に限られ、第五類以下の時代の下降する土器がみられない。このことは造成時の攪乱がかなりの深度にまでおよび、そのため第III層上部が大きく削り取れたためかとも考えられる。

前記一～四類土器の出土状況を第10表にまとめたが、第III～IV層が著しく攪乱を受け、いずれも南壁部に僅かに残存する程度であったから、全般的に出土量が少なく、これら四類の土器の前後関係をおさえることはできなかった。

## VI お わ り に

以上、Mトレンチおよびテスト・ピット(O-7)の出土遺物について記した。ピットO-7は、前述のように攪乱が深部におよび、未攪乱層は小範囲にみられたただけであった。石器や骨器はすべて第II層以上の攪乱部で発見され、そのため土器との共伴関係は不明である。

土器は第一～第四類の古い時期のものに限られ、第五類以降の新しい時期のものはみられなかった。以上の土器の層位的出土状況をみると、第一類土器が第V層に比較的多かったほかは、他の土器は層位にバラツキがあり、先後関係をおさえるところまではいかなかった。

Mトレンチでは最下部の地山も含めV層認められた。このトレンチの基盤は石灰岩礫を含む赤色土(マーチ)で、起伏が激しく、そのため上位の層も深淺二様の堆積の状況を示していた。遺物は第III層で最も多く、次いで第II層、第IV層の順に減少している。

本トレンチでは貝製品の出土はなかった。骨製品は8点の出土があり、実用品と装飾品に大別される。量的には後者が多かった。しかし、出土をみたものはほとんどが従来知られているもので、中には用途不明のものも若干ある。後者については今後の資料を俟って検討したい。

石製品は7種類あり、うち実用品は6種で、他の1種は装飾品である。後者は輝緑凝灰岩に研磨を加え、1孔を設けた小型の製品で、西長浜原遺跡(18)や種子島の有孔製品(7)、出水貝塚の玉(19)などに類するものであろう。

本トレンチの石器のなかで、特に注意を惹くのはチャートの製品である。本トレンチでは表採品も合わせると45点のチャートの剥片が発見されている。この種の剥片は最初、城岳貝塚(20)で注意された。しかし、その後発見例の報告がなく、戦後になって本貝塚や渡具知東原遺跡(9)で再び注意されて以来、最近では数遺跡で出土が知られている。製品としては城岳貝塚、室川貝塚、隅原遺跡(21)など数遺跡で石鏃が知られているが、渡

具知東原ではスクレイパー、ドリル、石槍等が報告(9)され、本貝塚Mトレンチではグレイヴィング・ツールが第III層で1点出土し、新資料を追加することができた。本遺跡発見のチャートの剥片の中には実際に使用されたものもあるかと推察されるが、この面の研究は今後に残される。

土器は型式不詳のものも含め七類に分類した。その中で最も多かったのは伊波式土器および荻堂式土器である。伊波式土器の中では第1種が最も多かったが、中段を縦位沈線や斜沈線で埋める第2種1の文様も比較的多かった。後者の文様は伊波貝塚(12)では若干報告されているが、熱田原貝塚では未発見である。また熱田原貝塚では鋸歯文を加える例が伊波貝塚より多い。このことから、熱田原貝塚は伊波貝塚より若干時期の下る遺跡ではないかと考えられるのである。だとすると第2種1の文様は伊波式の中では古式の部類に属するものかもしれない。しかし、層位的に押えられたわけではないので、今後の資料を俟って決定したい。

荻堂式土器は従来の資料に新資料を追加することができ、器形・文様ともにヴァリエーションのあることが分った。この土器は器形・文様が大山式と関連するようで、従来の編年観を修正する必要があるかもしれない。つまり、伊波式より新しい土器と考えられるのである。本トレンチで層位的に明確におさえられたわけではないが、第IV層における両者の出土状況は、前記の器形・文様上の観察とともに、そのことを暗示しているようにみられる。

カヤウチバンタ式系統の土器および宇佐浜式系統の土器についても資料を追加することができた。これらのうち有文のものをそれぞれ地荒原A、地荒原Bと仮称し、また時代の下るタイプについては天久A、天久Bと仮称してきたが、室川の調査を通じ、再検討の必要が生じた。これらの土器については今後も資料の増加する可能性があり、室川の調査が終了した段階で、改めて再検討したいと考えている。

以上、Mトレンチ出土の土器について概観した。これらの土器に次回発表予定のSトレンチの土器を加えると各型式とも資料は豊富となり、概念がより明確になるものと思われる。各型式の概念については、次回以降、資料のととのったものから提示していくことにする。

本トレンチでは奄美系の土器も32点検出された。型式の判明するのは4種で、いずれも第Ⅲ層中位以上で出土した。そのことから伊波式・萩堂式より後出のものと考えられるが、沖縄のどの型式に並行するかは、今のところ不明である。

本トレンチの土器についてあと一言付言したいのは、第14図4の土器である。この土器は前にも記したように第12図4の萩堂式に重なって発見されたもので、器形・文様とも伊波式や萩堂式とは異なり、焼成は比較的良く、また雲母を含むことから、搬入品と考えられる。しかし、産地は不明である。おそらく奄美以北の所産であろう。この土器が前述の萩堂式と平行関係にあるとすれば、縄文後期初頭の時代が考えられる。この土器の製作地についても今後注意していきたい。

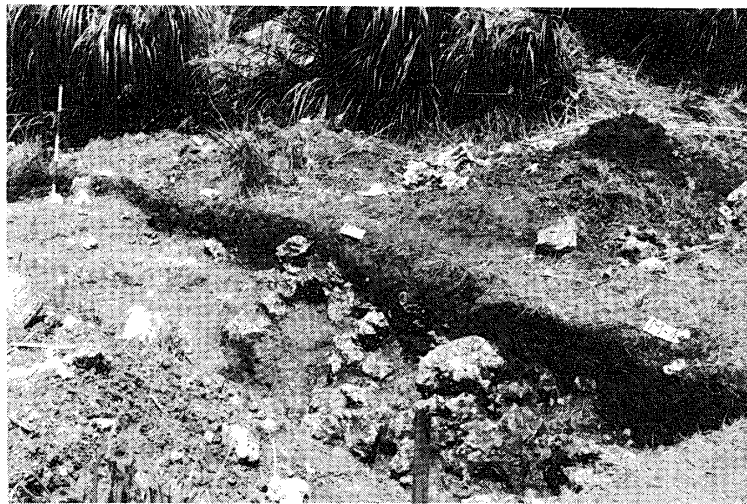
## Ⅶ 註

- 1 国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・原口正三・野口義磨 「奄美大島の先史時代」『奄美—自然と文化』 九学会連合奄美大島共同調査委員会編 1959
- 2 河口貞徳・上村俊雄・多々良友博・平島勇夫・肱岡降夫「嘉徳遺跡—大島郡瀬戸内町嘉徳砂丘遺跡の調査」 鹿兒島考古第10号 1974
- 3 新田重清 「沖縄浦添市浦添貝塚出土の市来式土器について」 古代文化 第23巻第9・10号 1971
- 4 木崎甲子郎編 沖縄の自然 平凡社 1975
- 5 賀川光夫・多和田真淳 「沖縄宜野湾村大山貝塚調査概要」 文化財要覧 琉球政府文化財保護委員会 1960
- 6 島田貞彦 「琉球崎樋川貝塚」 歴史と地理 1932
- 7 国分直一 南島先史時代の研究 慶友社 1972
- 8 白木原和美 「徳之島の先史的所見」 南日本文化第3号 鹿兒島短期大学 1970
- 9 高宮廣衛 「曾畑層の石器」『渡具知東原』 読谷村文化財調査報告第3集 読谷村教育委員会 1977
- 10 高宮廣衛・C・W・MEIGHAN 「熱田原貝塚の土器」 沖縄国際大学文学部紀要社会編 第1巻第1号 沖縄国際大学 1973
- 11 当間嗣一 「大地に埋もれたシマの歴史」 渡名喜島遺跡群発掘調査ニュース(1)沖縄県渡名喜村 1977
- 12 大山柏 琉球伊波貝塚発掘報告 1922
- 13 新田重清・嵩元政秀 「嘉手納貝塚発掘報告書」 琉球政府文化財保護委員会 文化財要覧 1960
- 14 高宮廣衛 「伊平屋村の先史遺跡」 沖大論叢 第3巻2号 1963
- 15 高宮廣衛 「いわゆるカヤウチパンタ式および宇佐浜式土器について」 沖縄国際大学文学部紀要社会学科編 第2巻第1号 沖縄国際大学 1974
- 16 河口貞徳 「奄美における土器文化の編年について」 鹿兒島考古第9号 1974
- 17 城間勇雄・宮里愿・太田守雄 「阿嘉島の先史文化」 豊高郷土史第2号 豊見城高等学校生徒会郷土研究クラブ 1969
- 18 西長浜原遺跡 発掘調査ニュース第4号 西長浜原遺跡調査会 1977
- 19 河口貞徳 「出水貝塚」 鹿兒島県文化財調査報告書第5輯 1958
- 20 小牧実繁 「那覇市外城嶽貝塚発掘報告書」 人類学雑誌第42巻8号 1927
- 21 高宮廣衛・比嘉春美・岸本義彦・宮城利旭・中村愿・山田正・吉本直子・上原静 「具志川市隅原遺跡発掘調査概報」 沖国大考古創刊号 1976

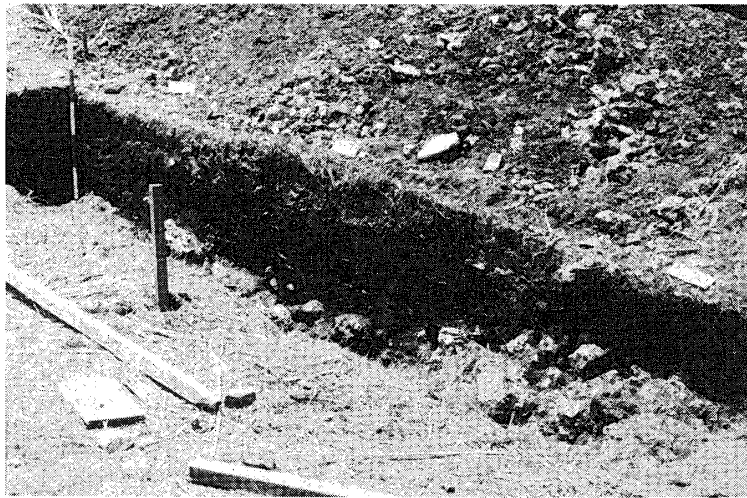


第1图版 遺跡近景

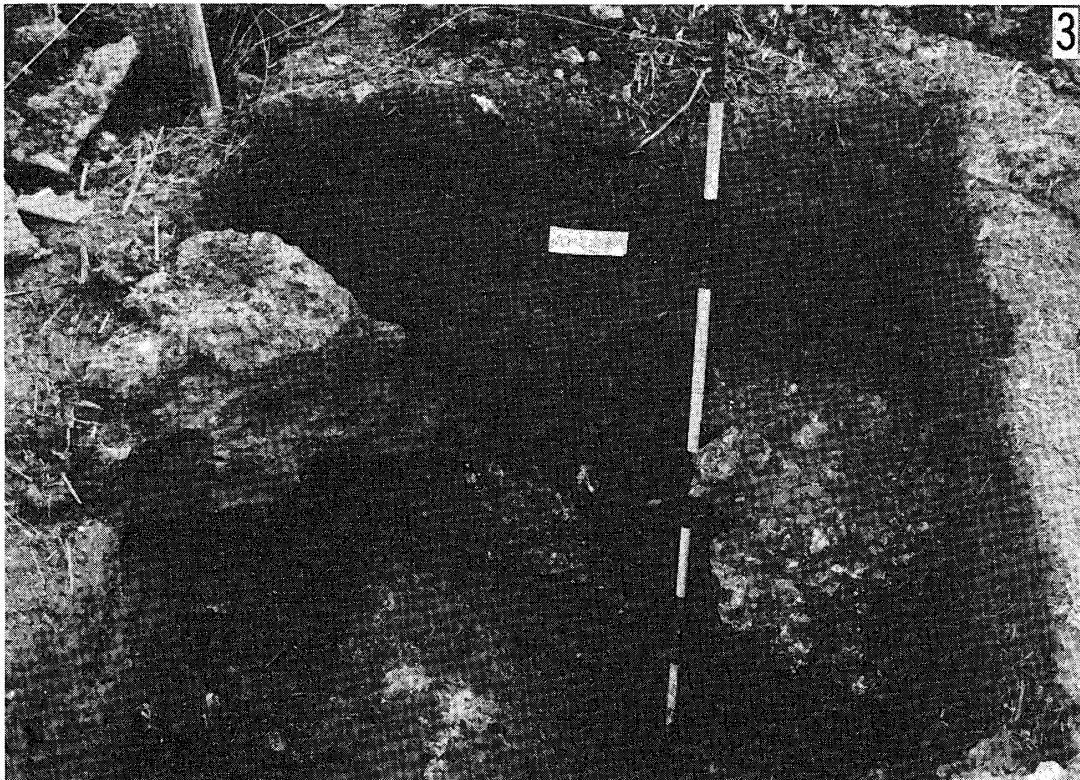




1

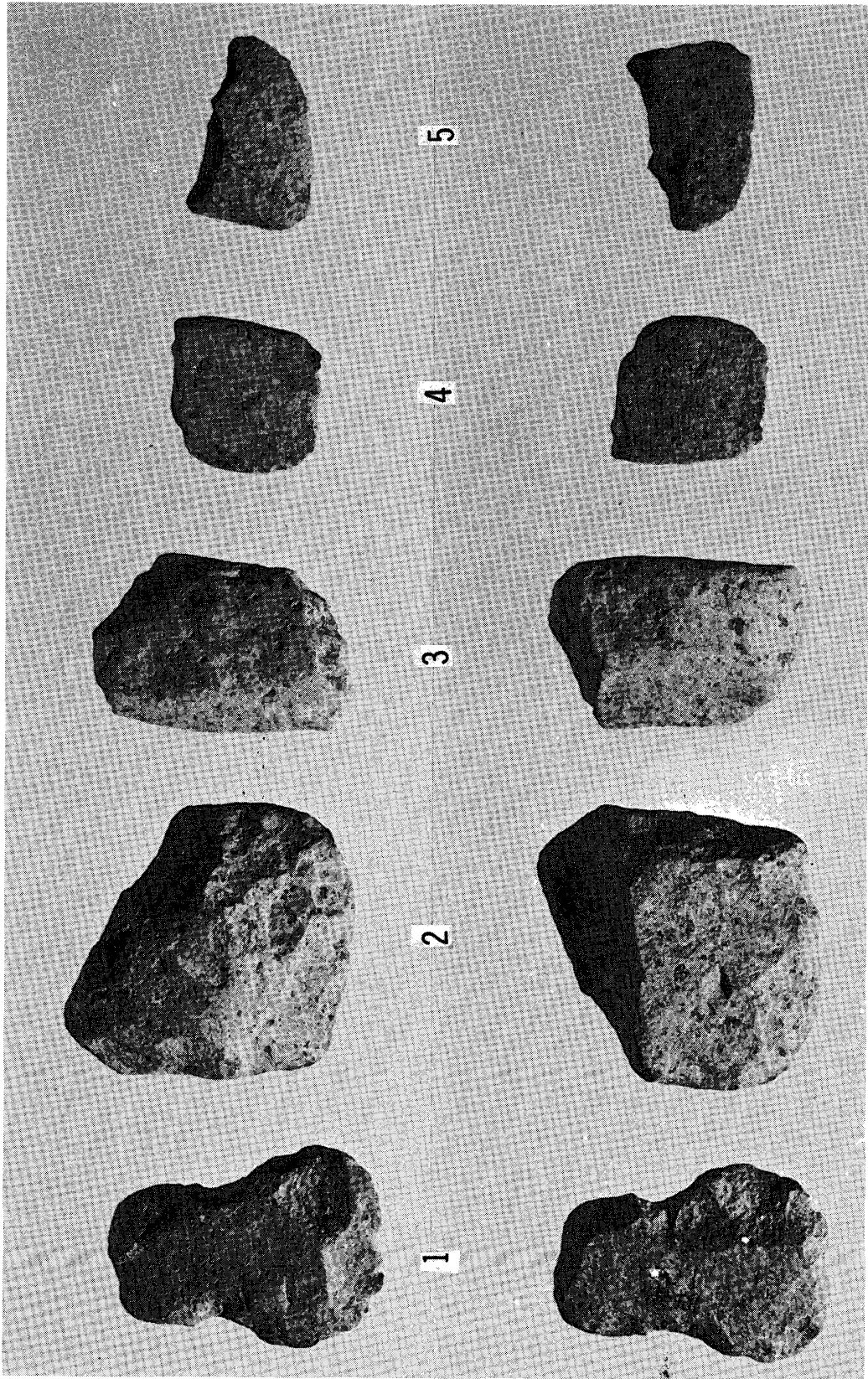


2

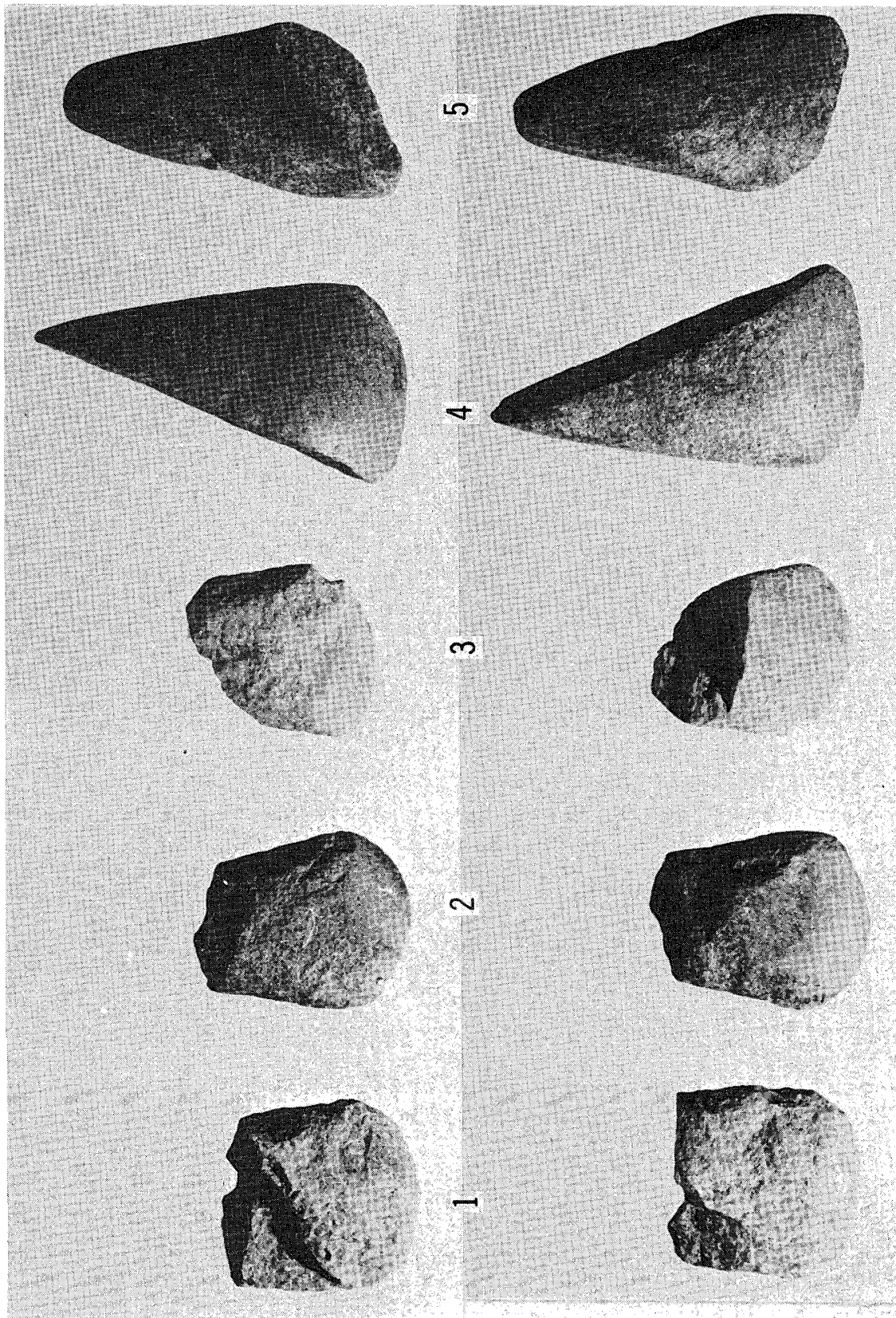


第 2 図版 1. Mトレンチ 1～4 東壁 2. Mトレンチ 5～7 東壁  
3. 0-7 南壁



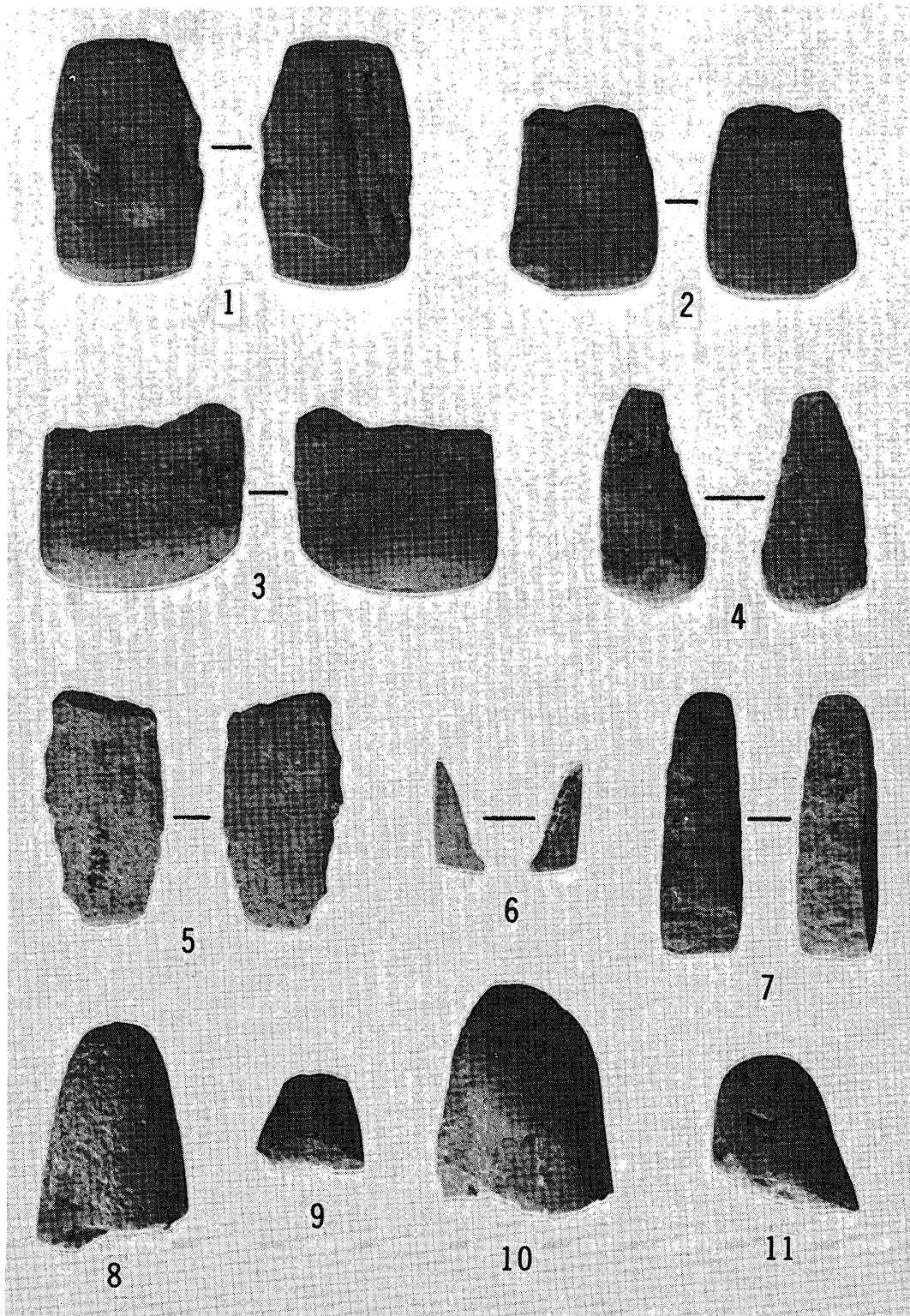


第3図版 Mトレンチの石斧（上=表，下=裏，1の長径=7.2cm）

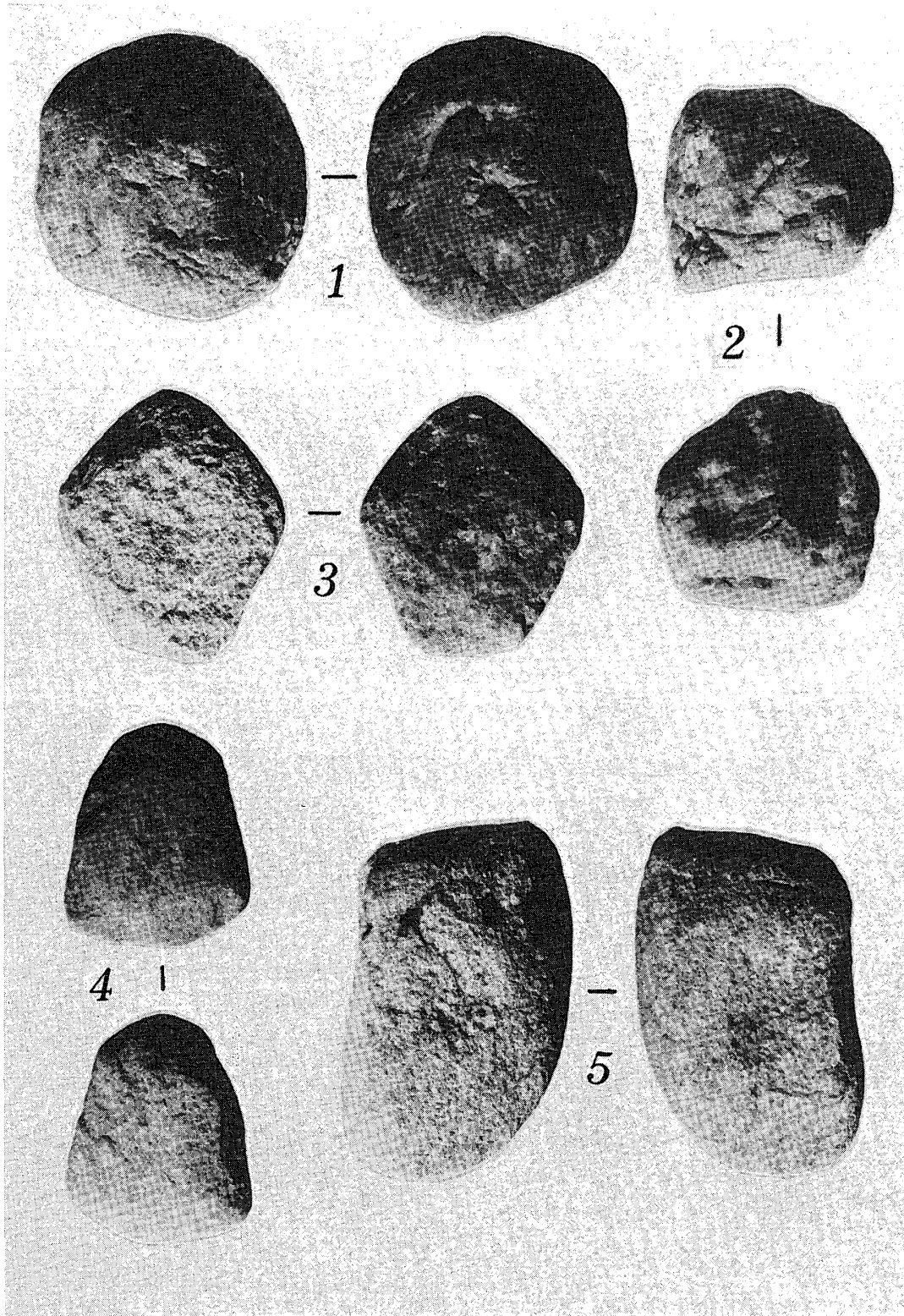


第4図版 Mトレンチの石斧（上=表，下=裏，2の最大幅=5cm）

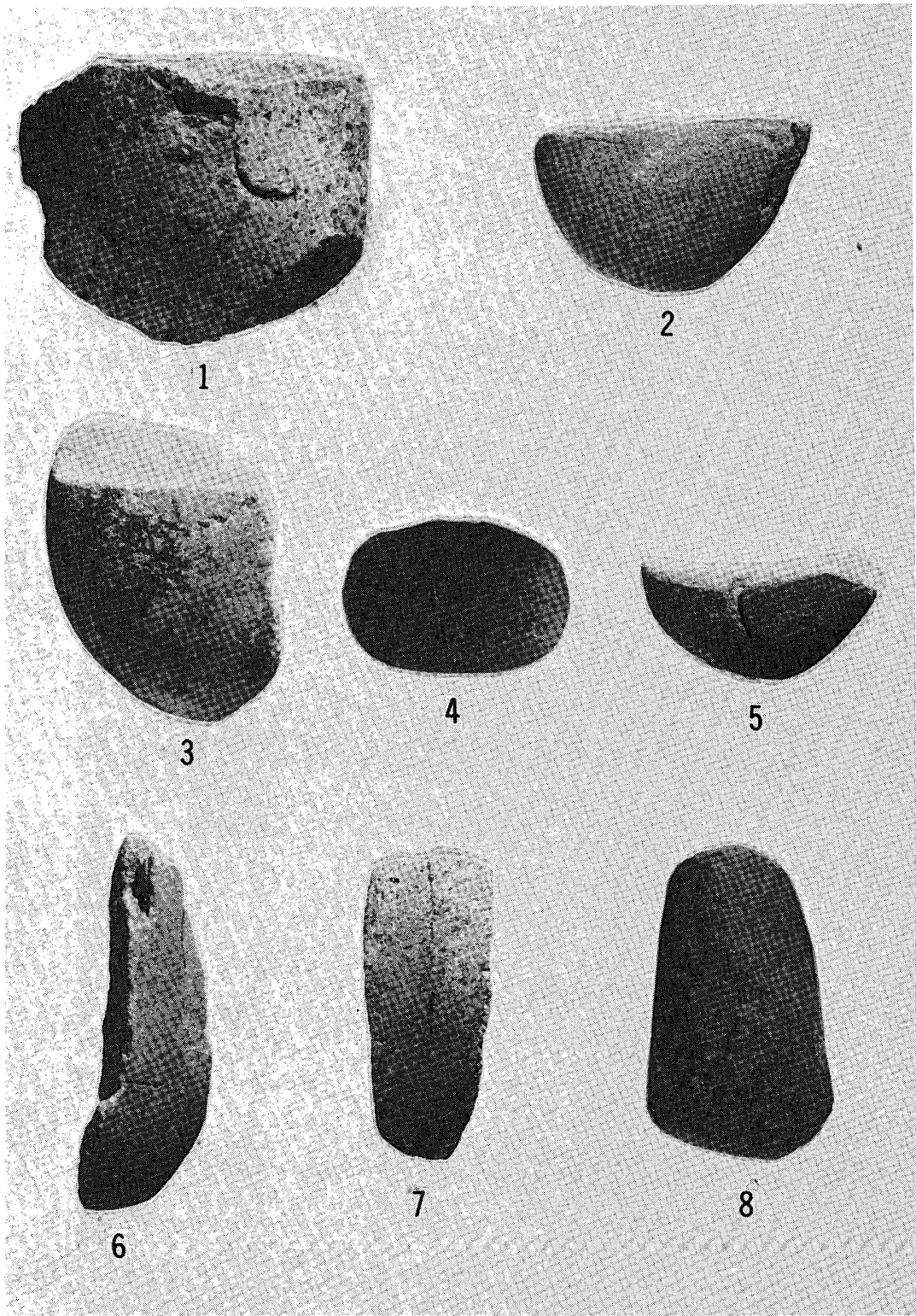




第5図版 Mトレンチの石斧 (1の長径 = 7.8 cm)

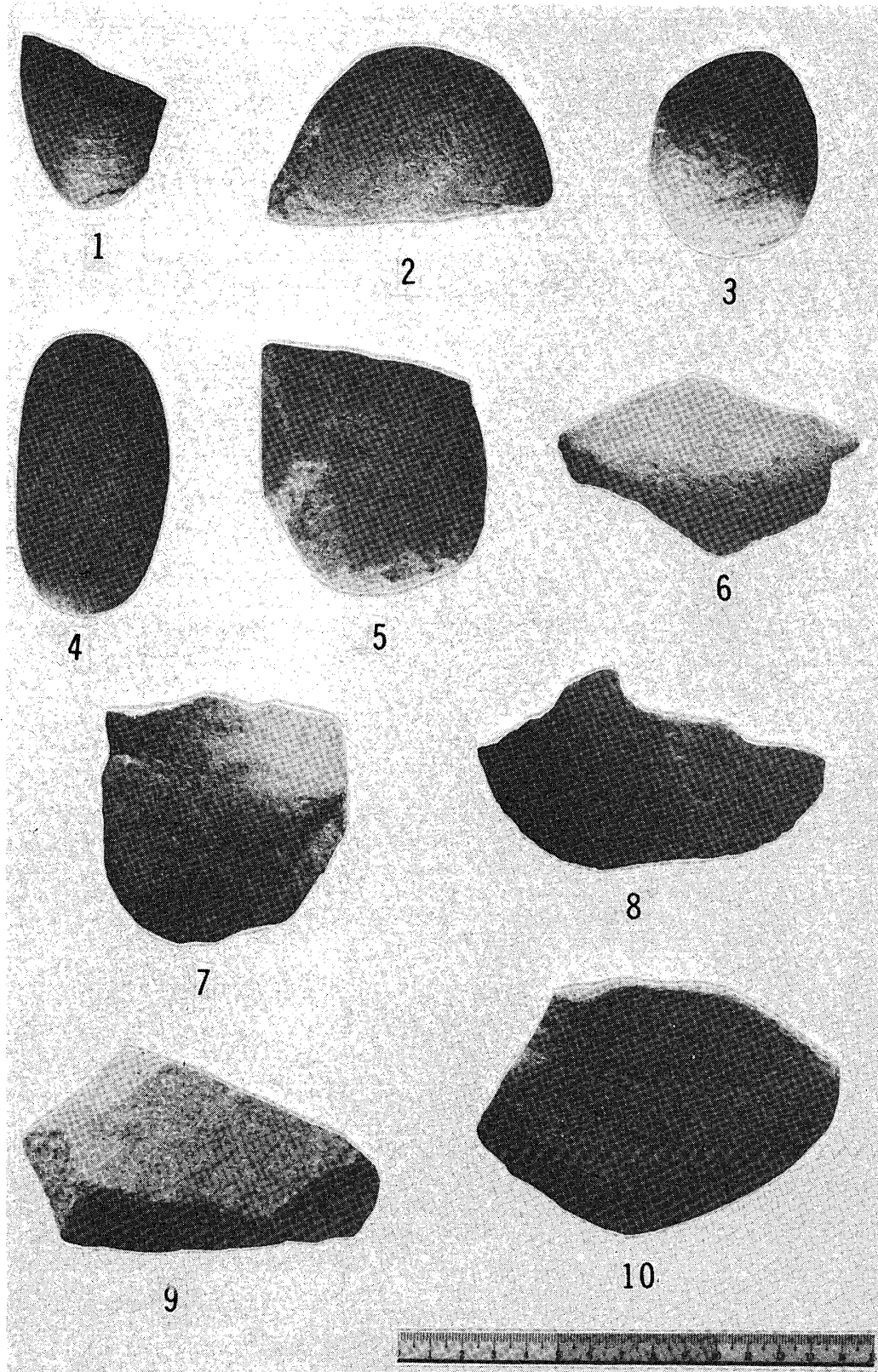


第6図版 Mトレンチの石斧 (5の長径 = 11 cm)

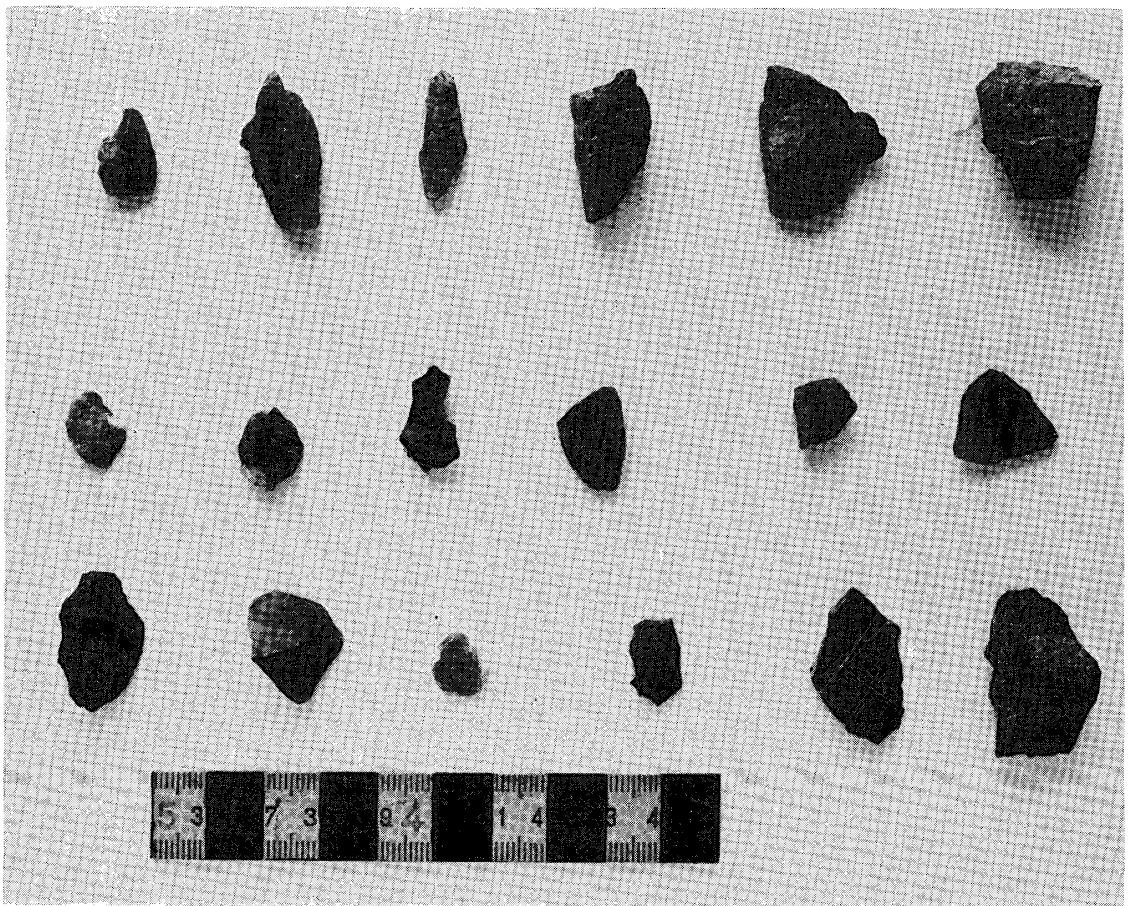
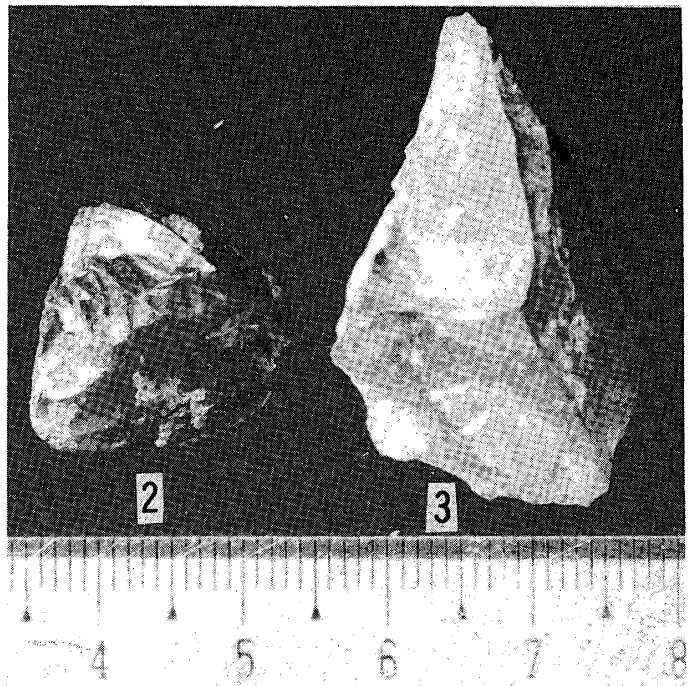
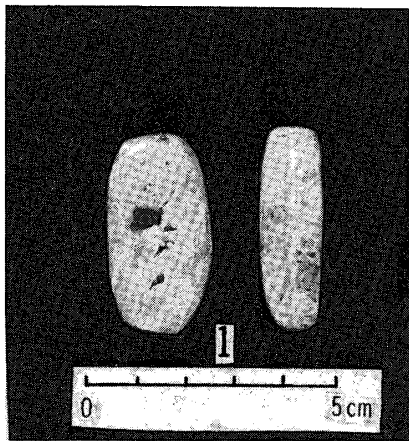


第7図版 Mトレンチの石器 (8の長径 = 9.7 cm)

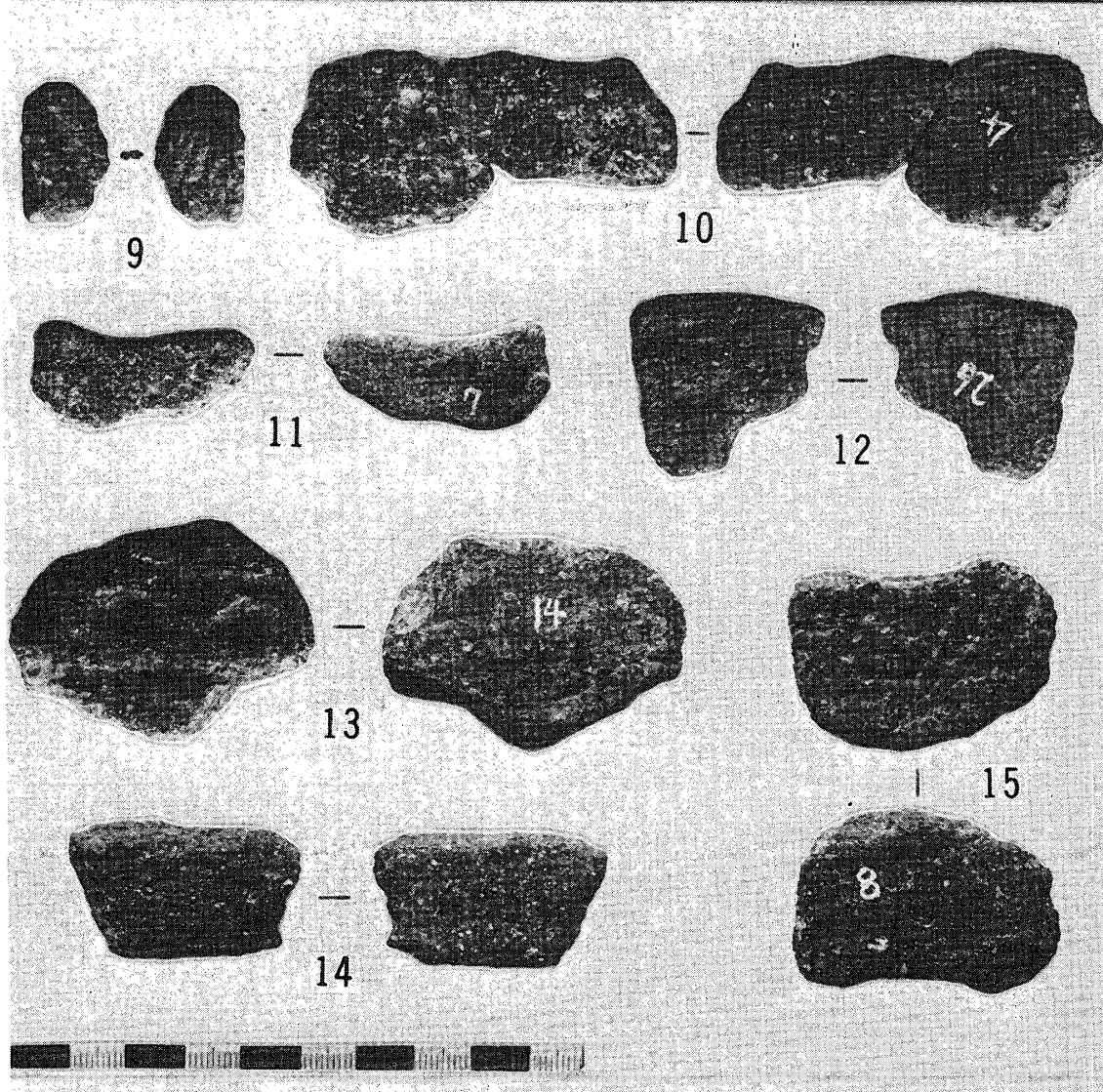
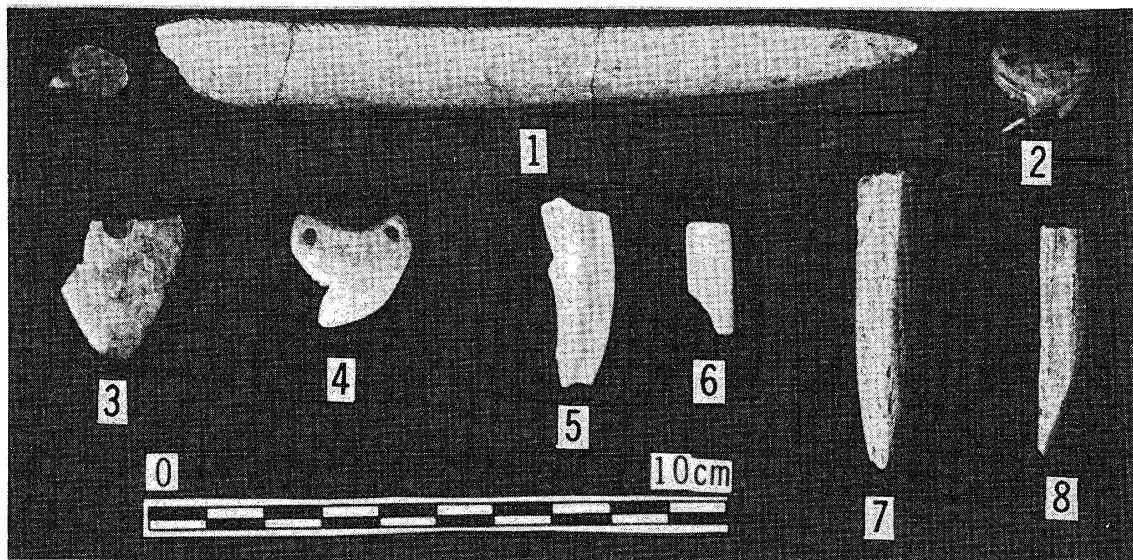




第8図版 Mトレンチの石器

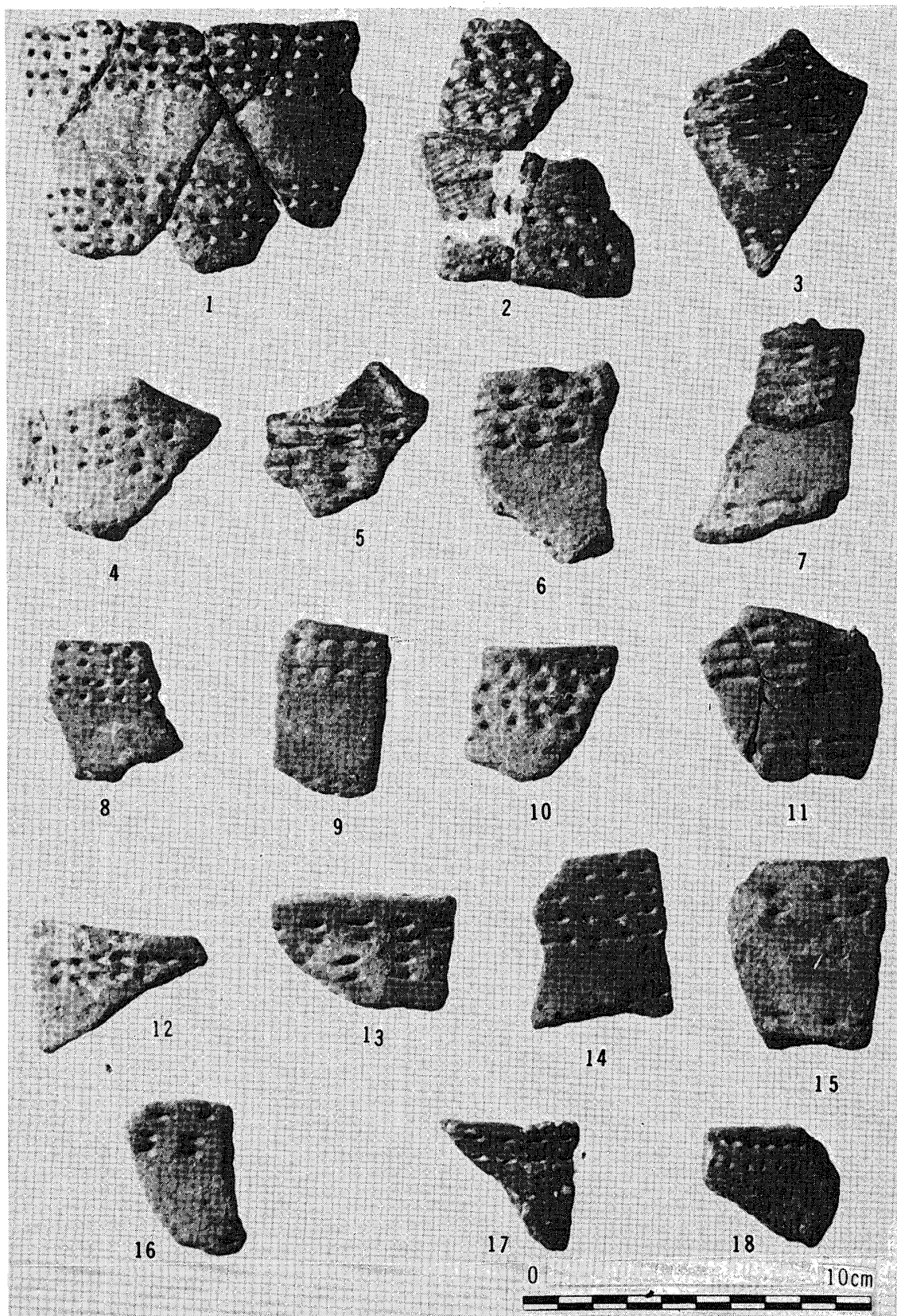


第9図版 石製装身具・チャート製品およびチャートの剥片

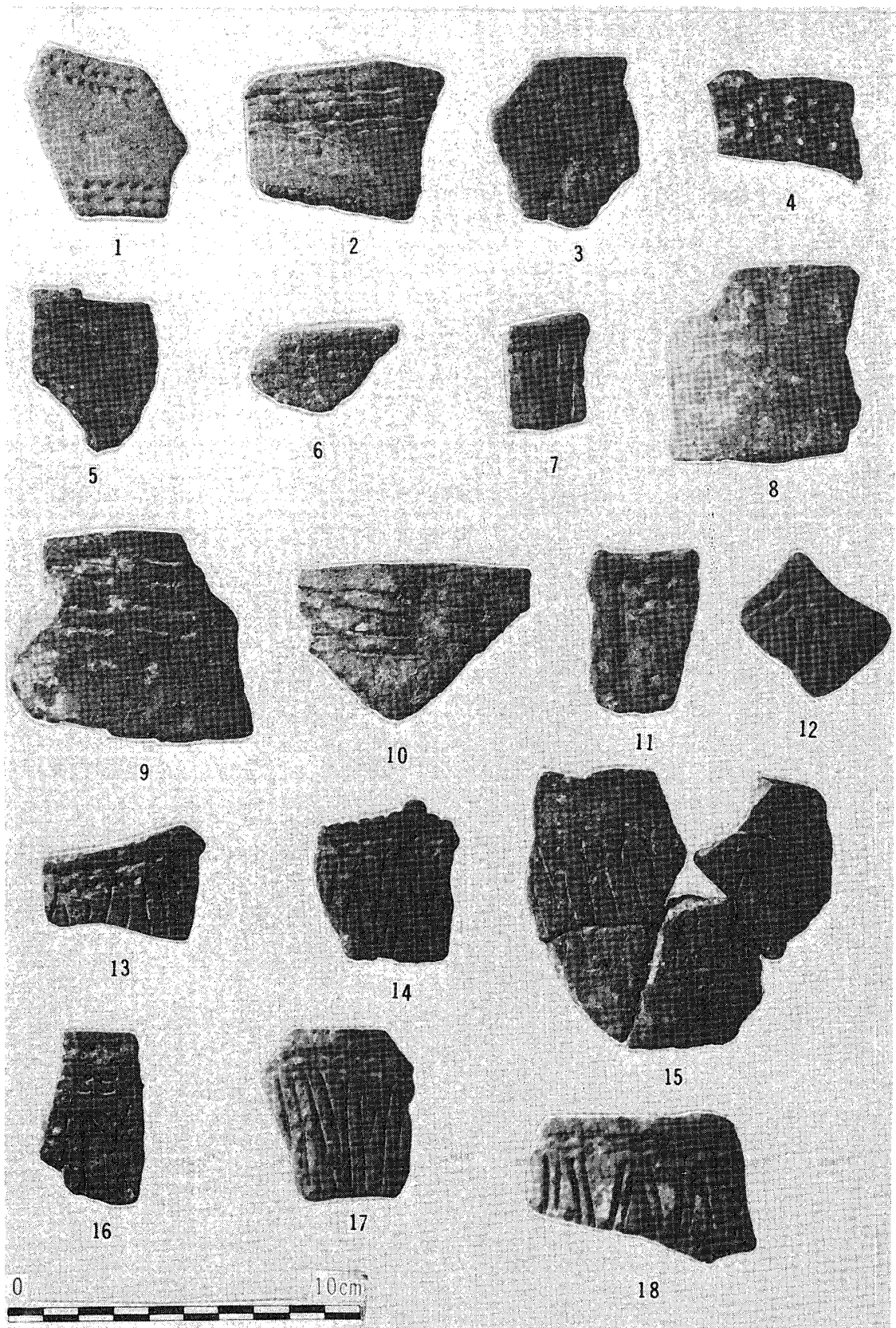


第10図版 Mトレンチの骨器と室川下層式土器



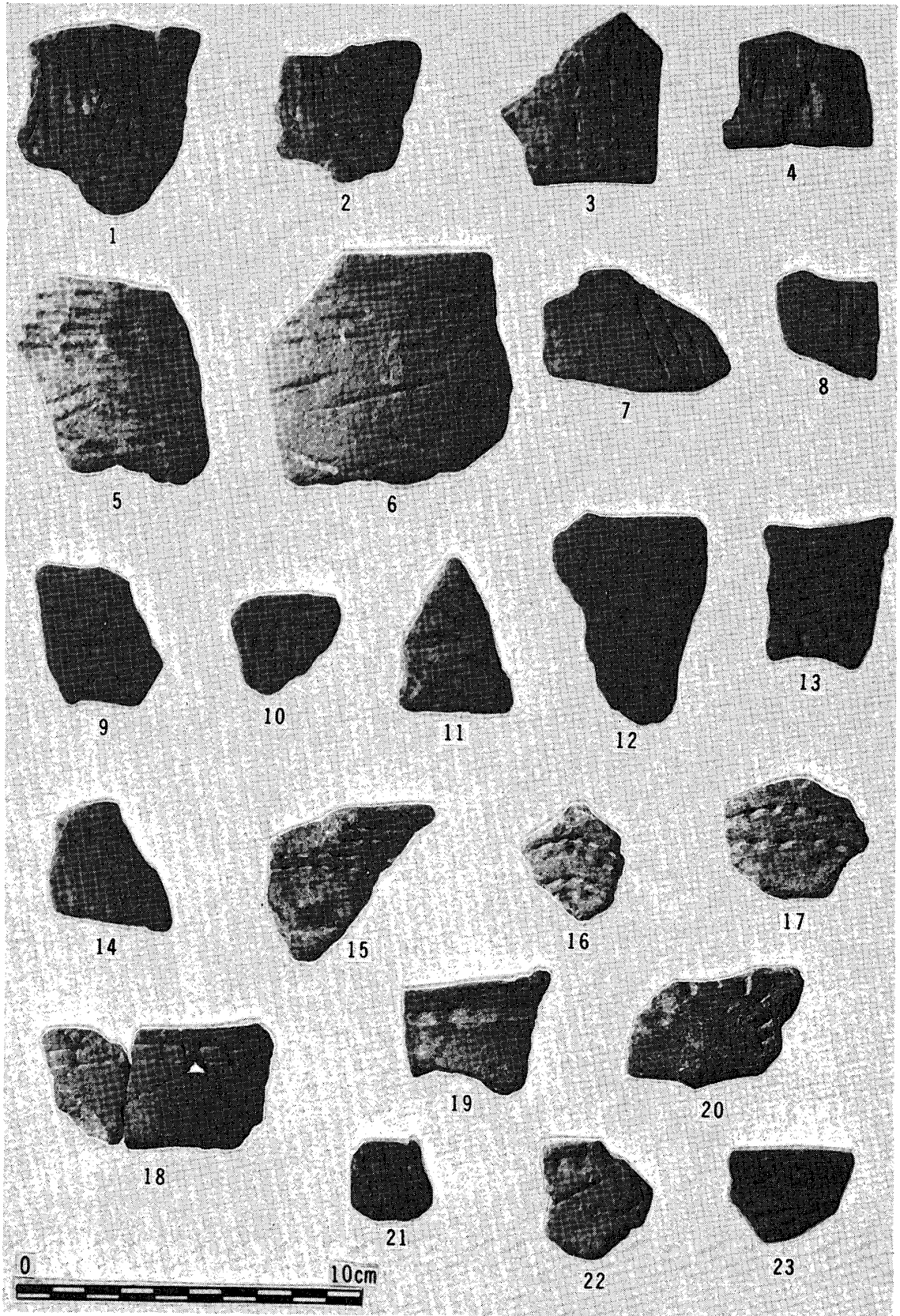


第 11 図版 M トレンチの土器 (伊波式土器)

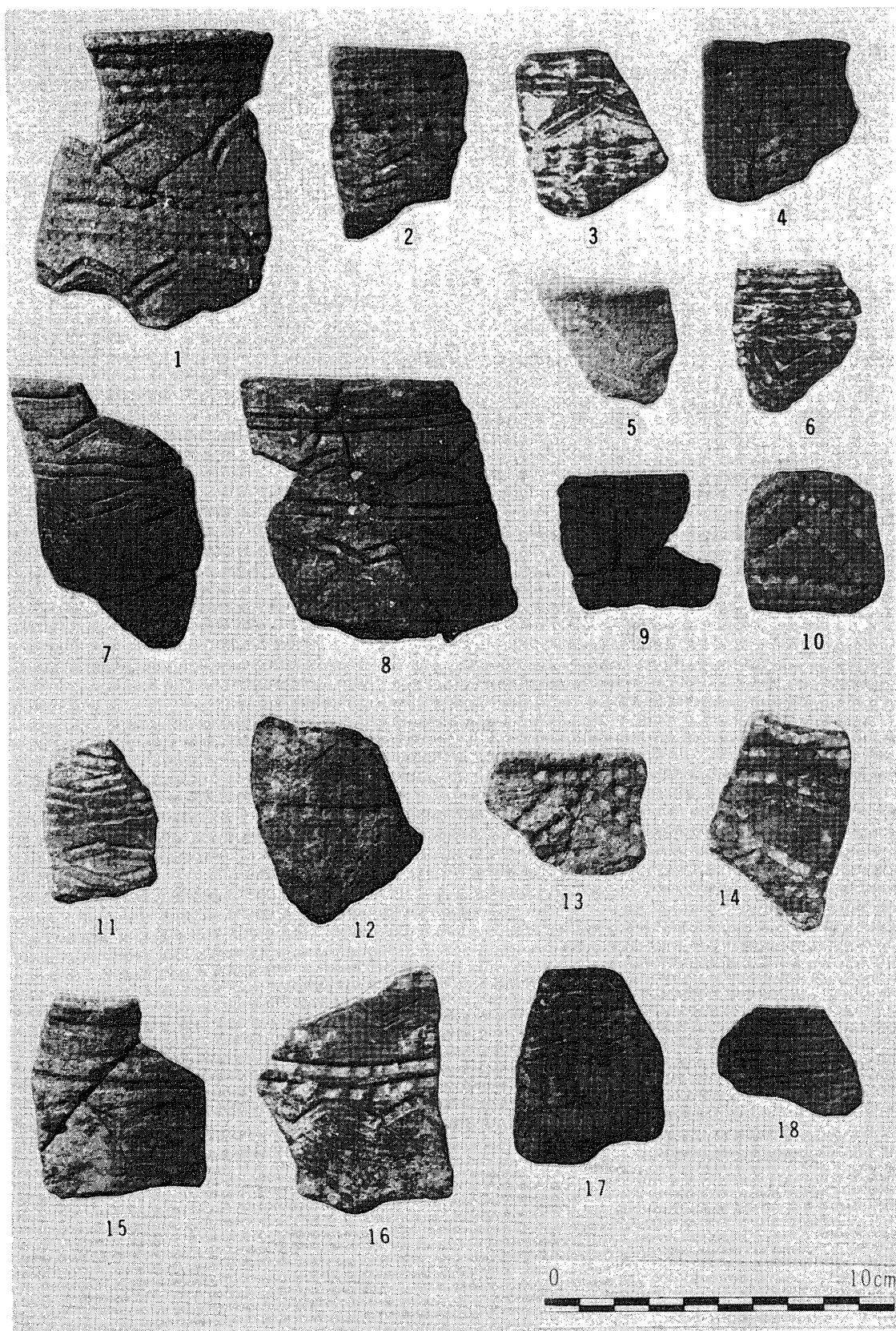


第12図版 Mトレンチの土器 (伊波式土器)



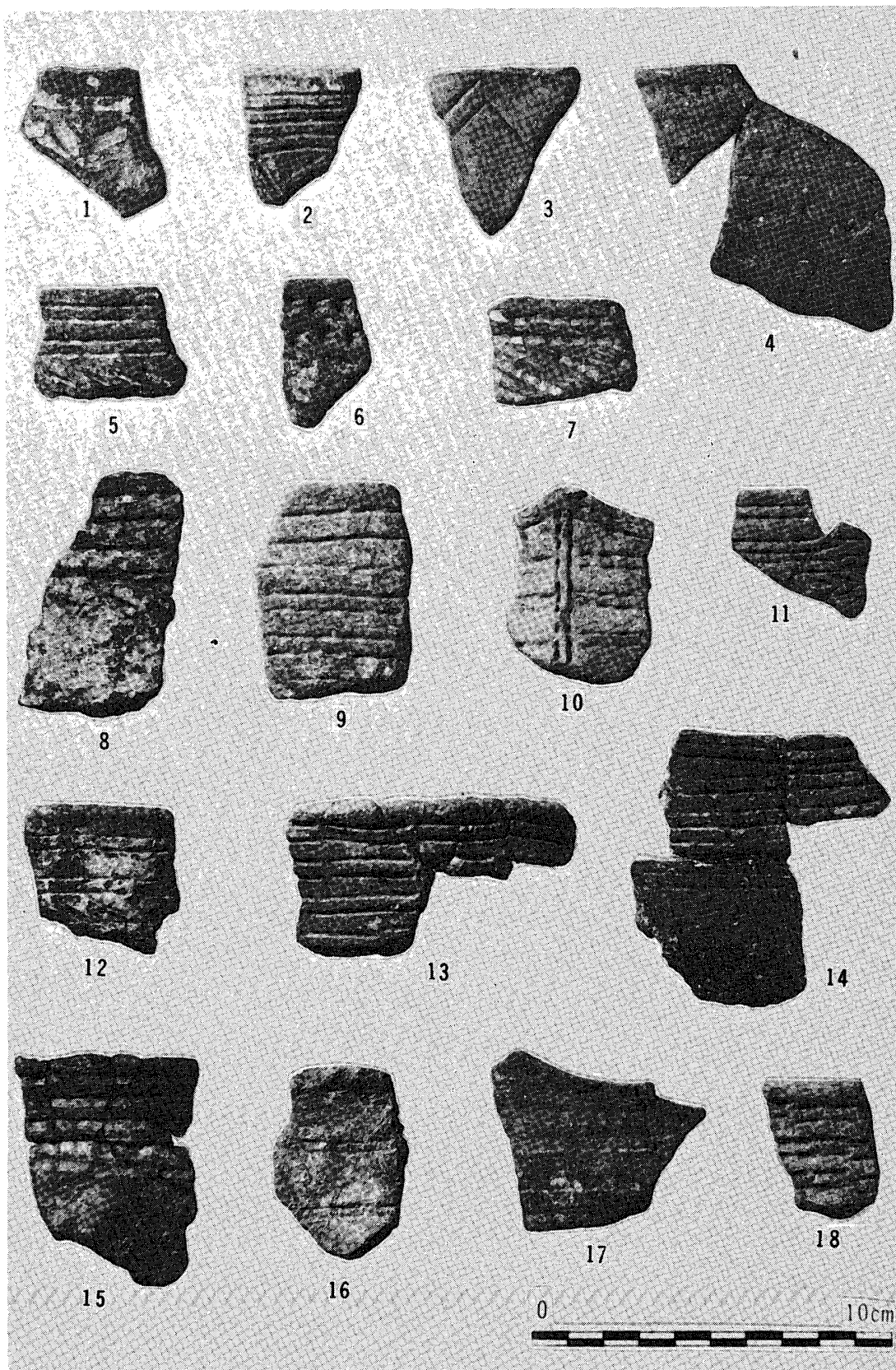


第13図版 Mトレンチの土器（伊波式土器）

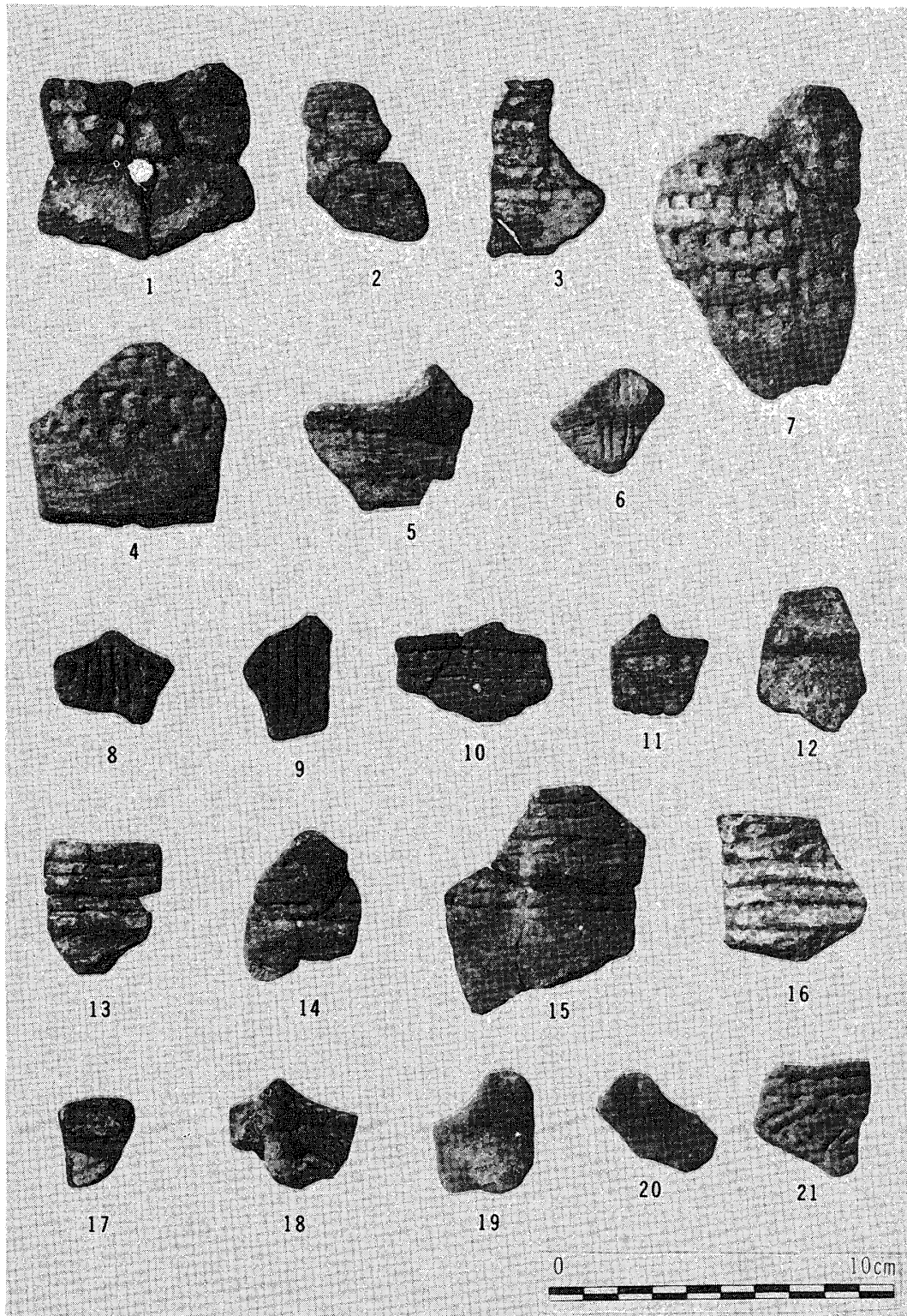


第 14 図版 Mトレンチの土器（荻堂式土器）

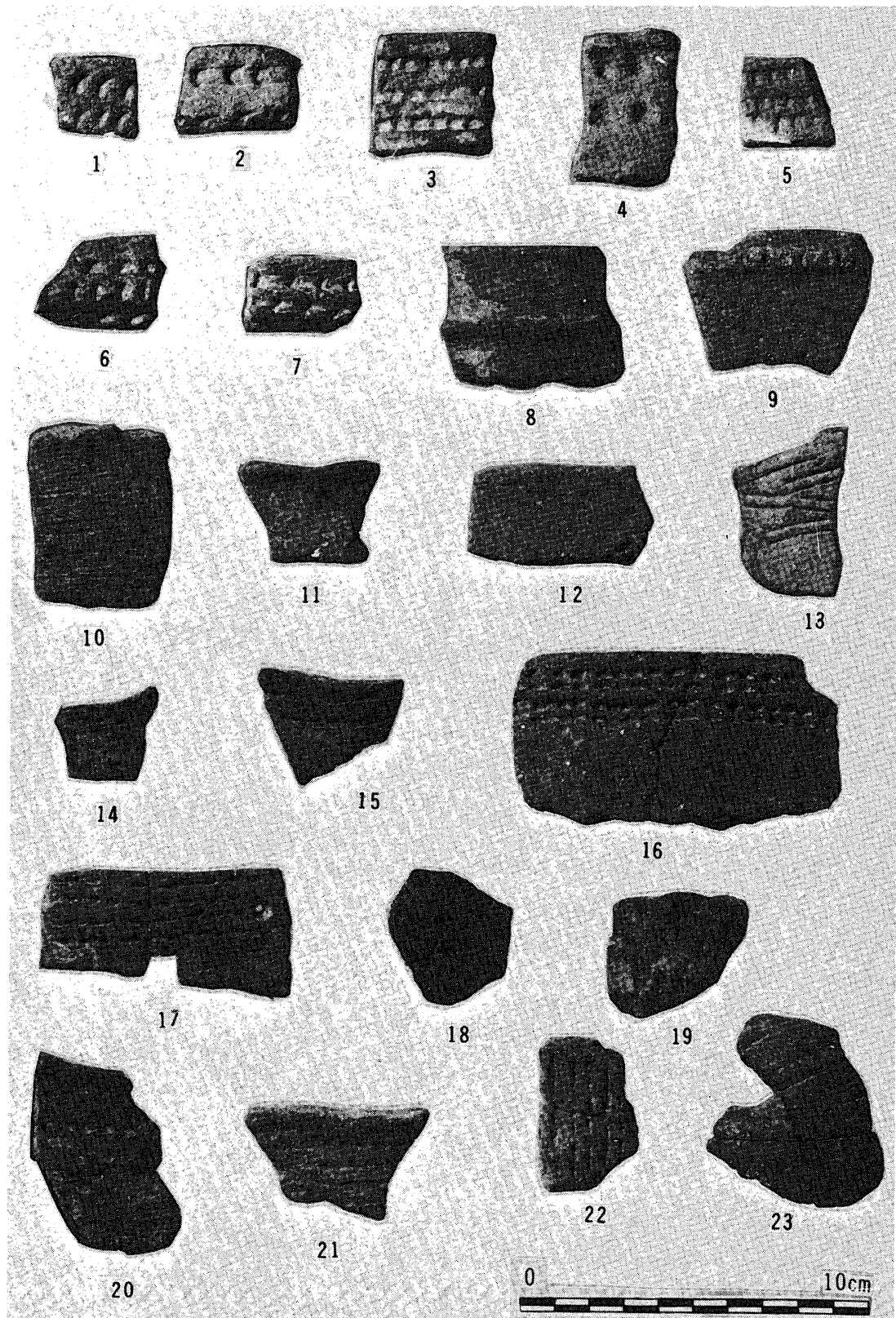




第 15 図版 M トレンチの土器 (荻堂式土器)

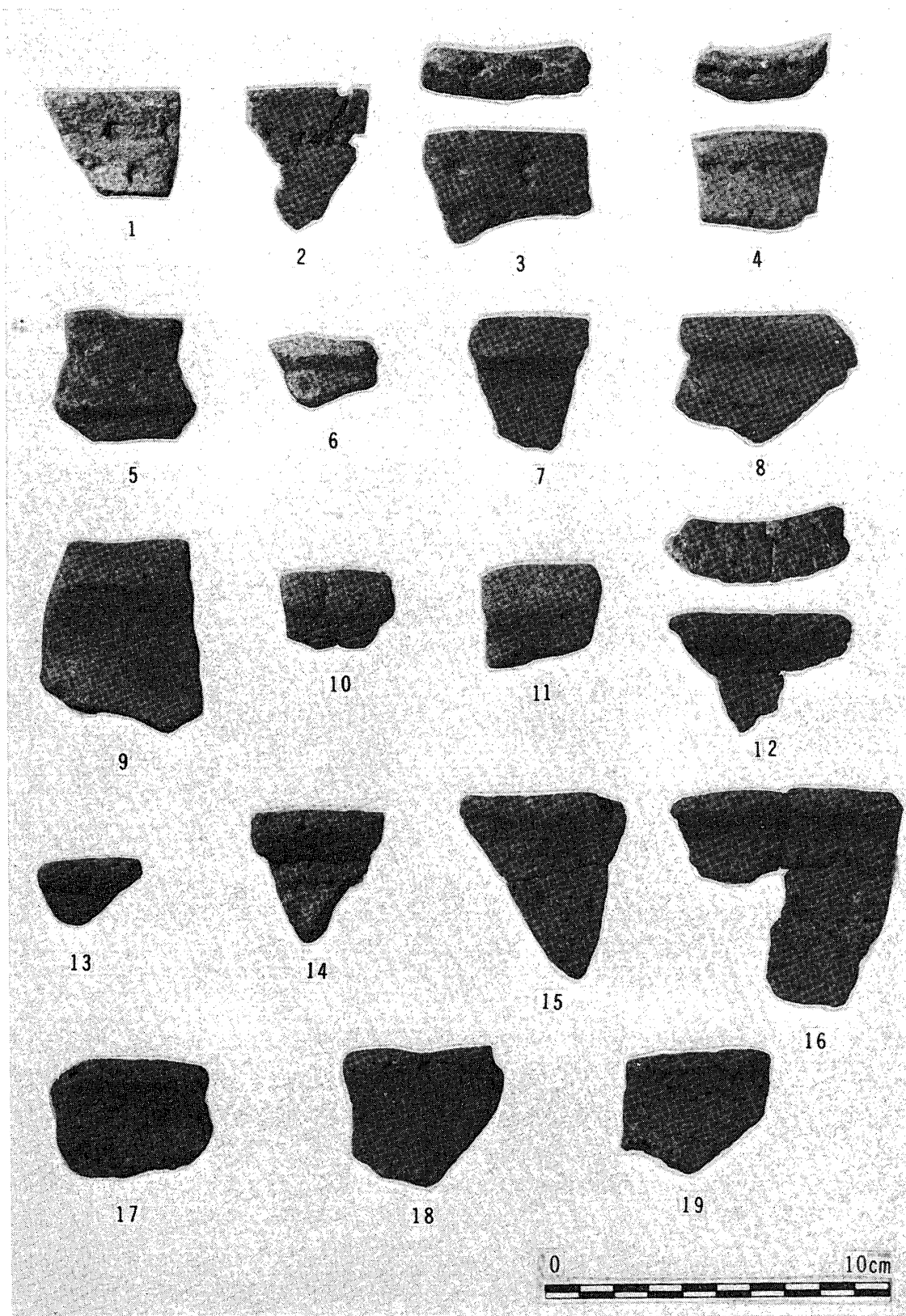


第16図版 Mトレンチの土器（荻堂式土器）



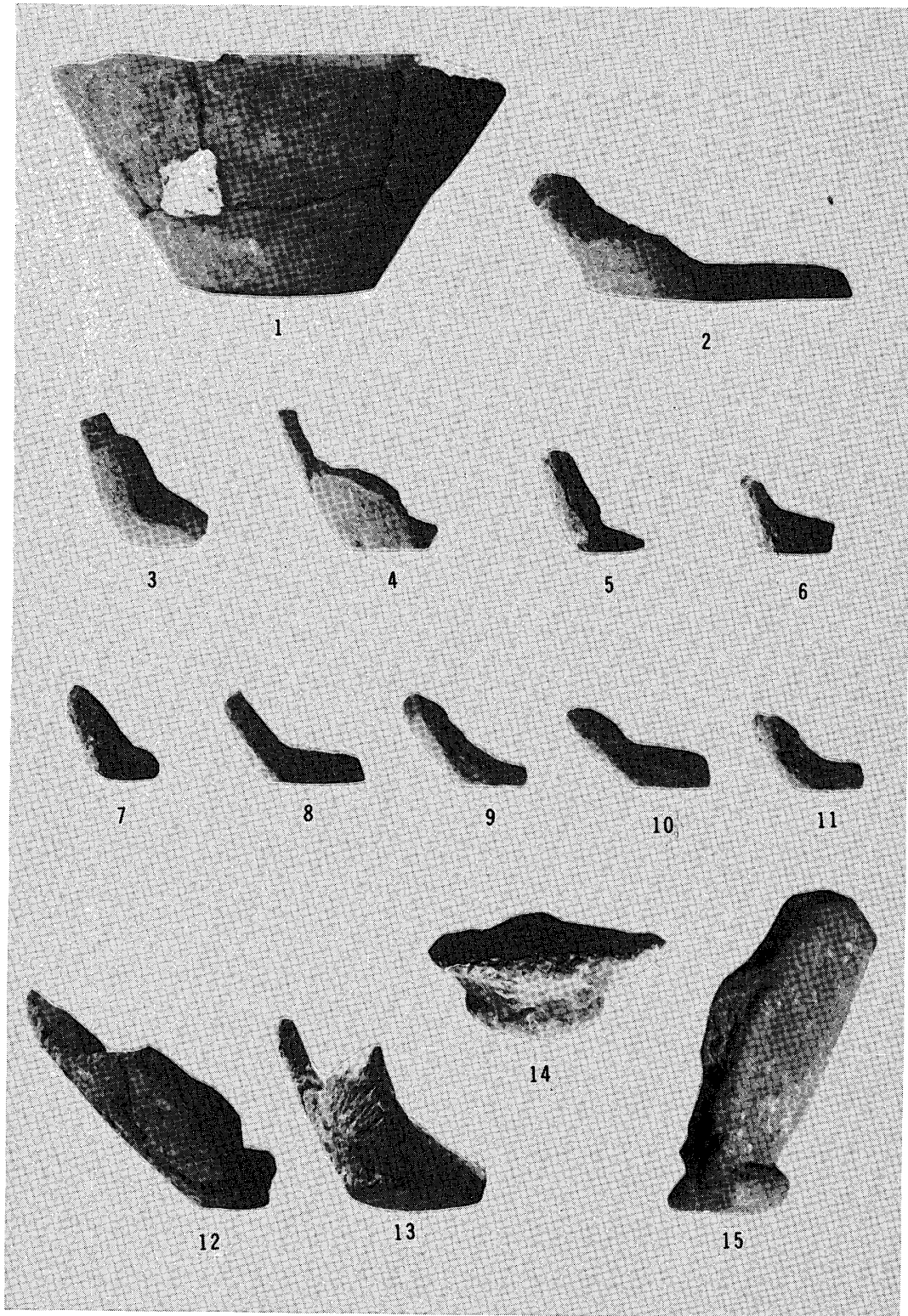
第17図版 Mトレンチの土器（1～7＝大山式とみられる土器，8，9，11，12は「その他の土器」，10は無文の伊波式土器，13～23は伊波式か萩堂式か不明の土器）



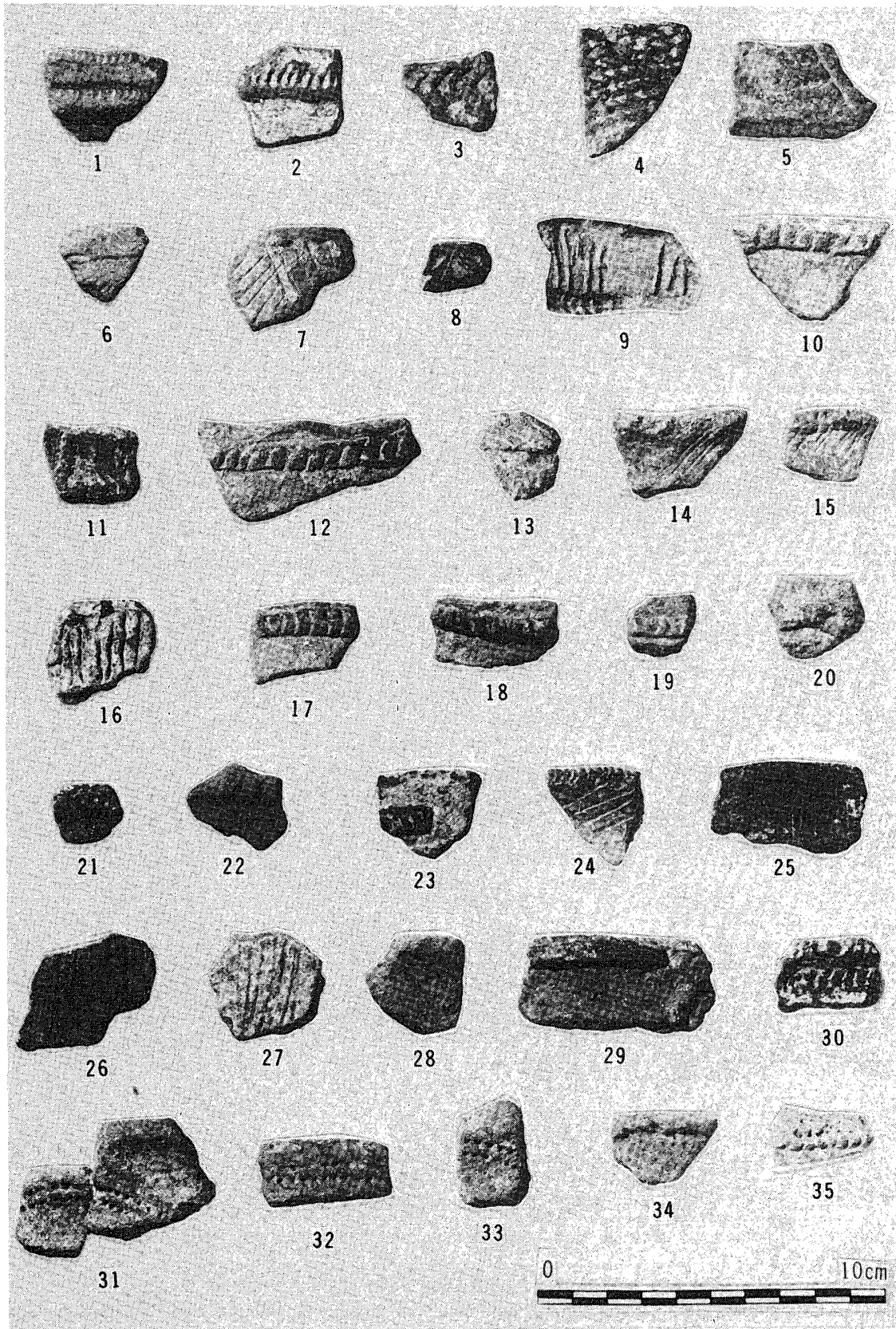


第18図版 Mトレンチの土器（1～3・5はカヤウチパンタ式土器，6～11は宇佐浜式土器，4・12～19は「その他の土器」）

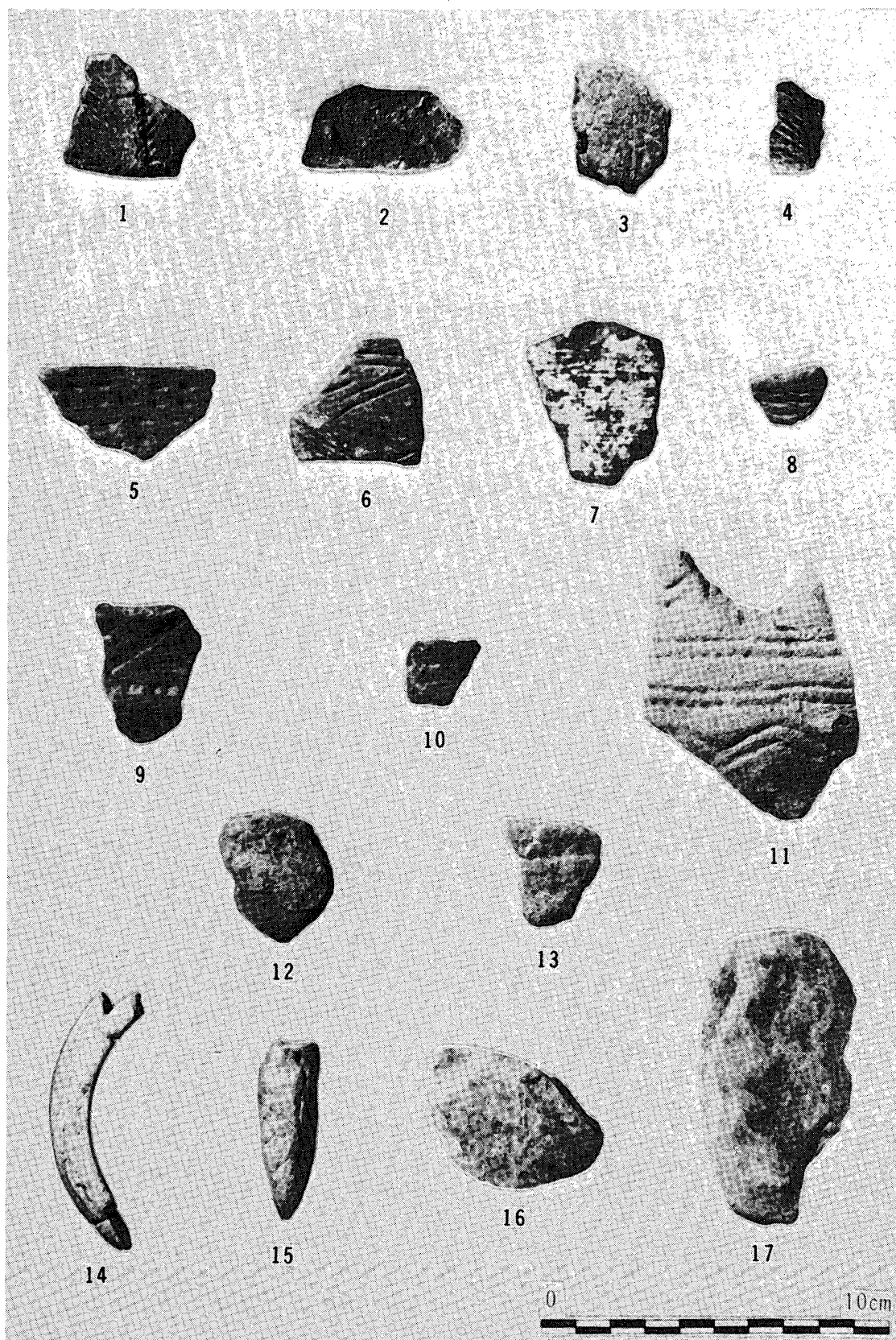




第19 図版 Mトレンチの土器底部 1～13= $\frac{1}{2}$  , 14・15= $\frac{1}{1}$

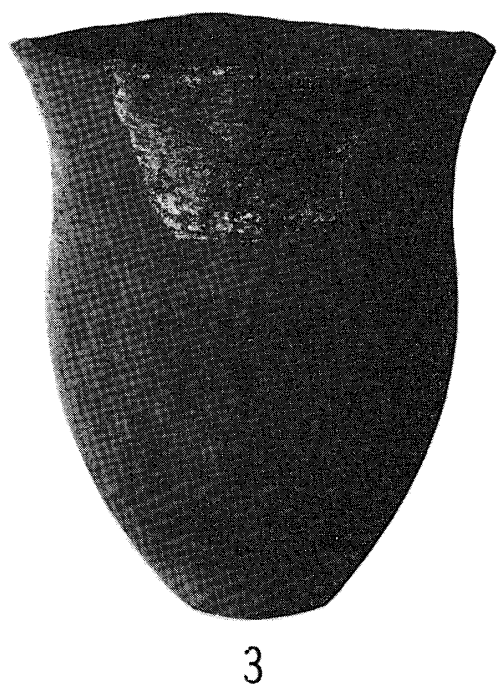
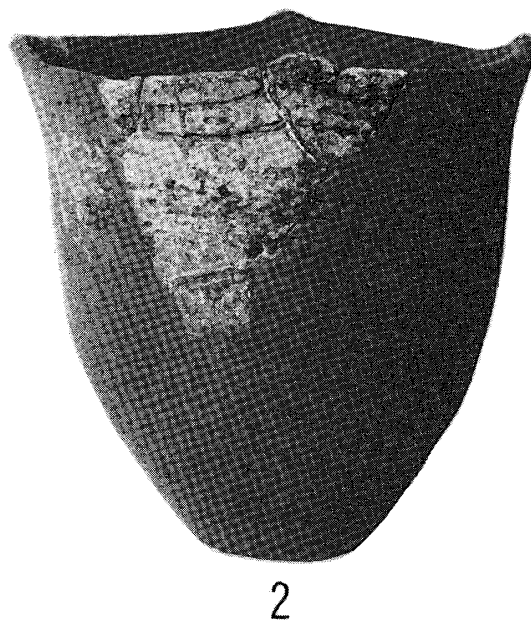
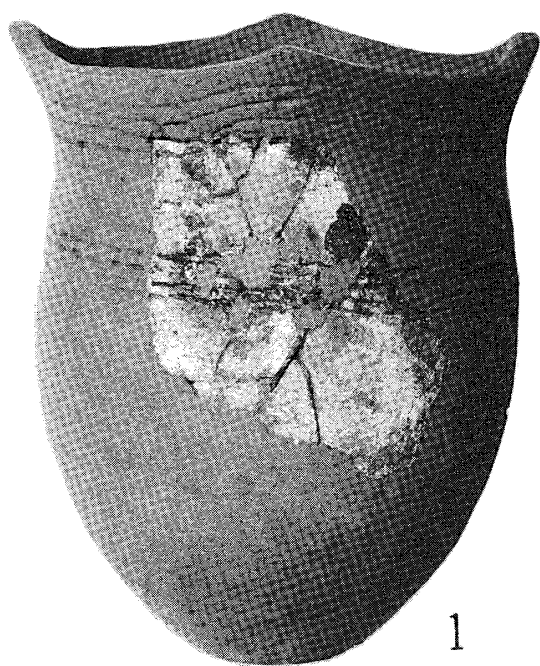


第 20 図版 Mトレンチの土器（奄美系土器）

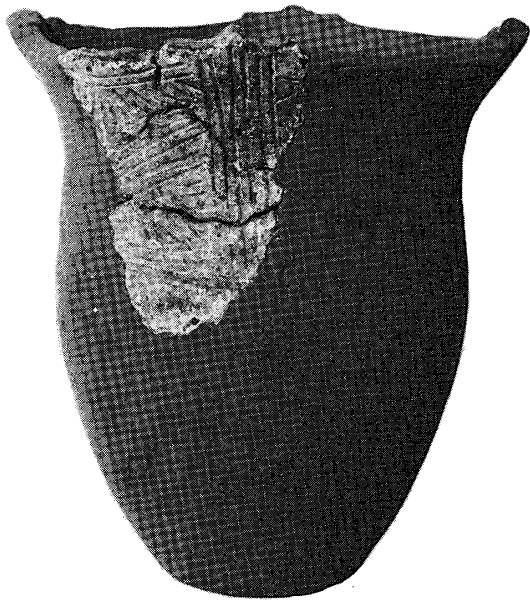


第 21 図版 ピット O-7 の出土遺物

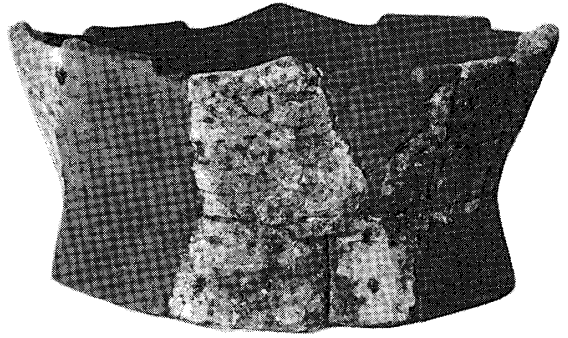




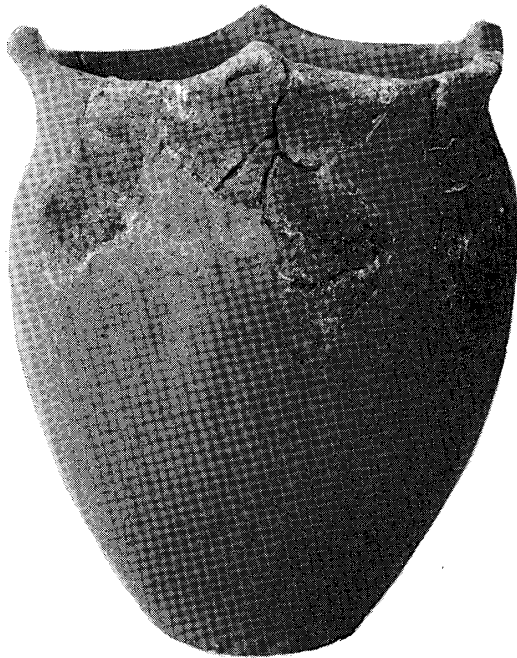
第 22 図版 伊波式土器



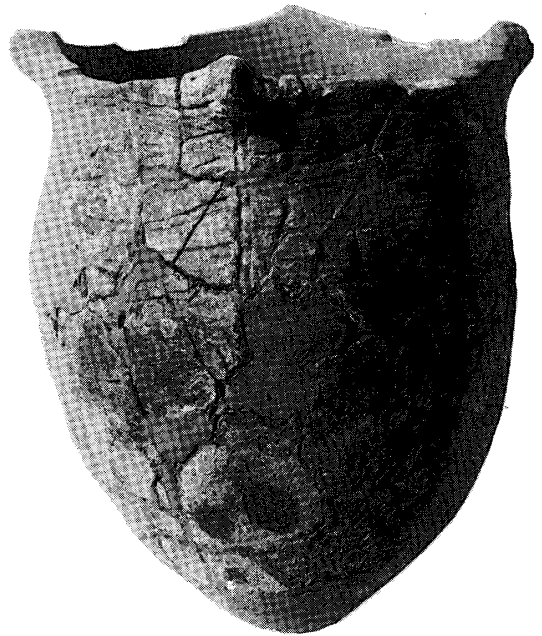
1



2

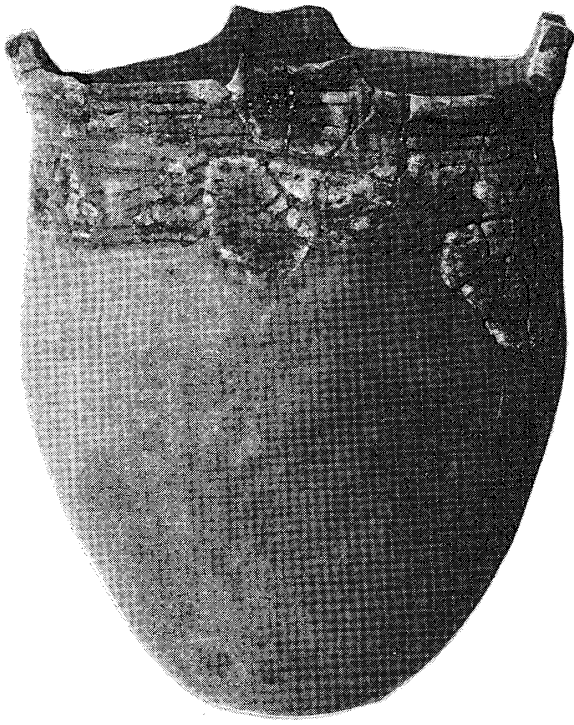


3

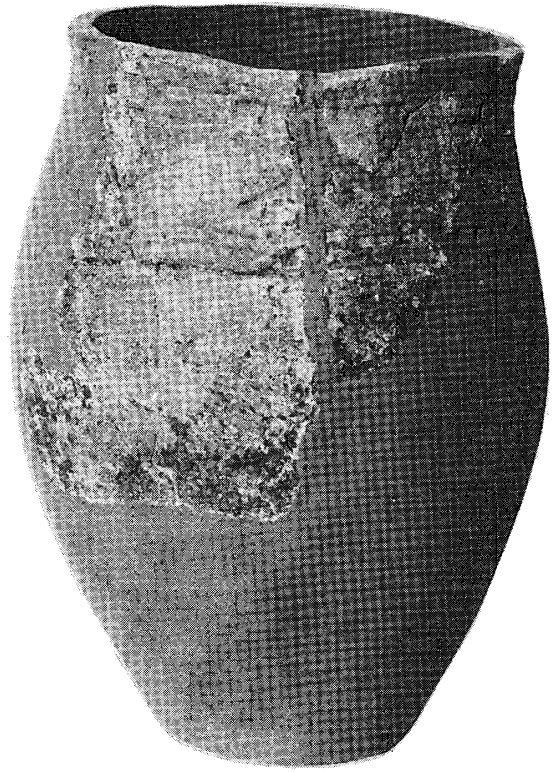


4

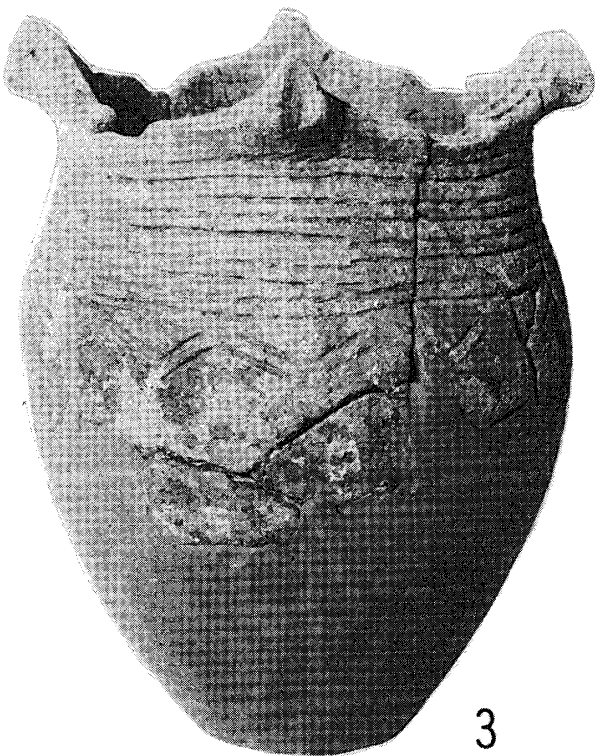
第 23 图版 1 · 2 伊波式土器 3 · 4 荻堂式土器



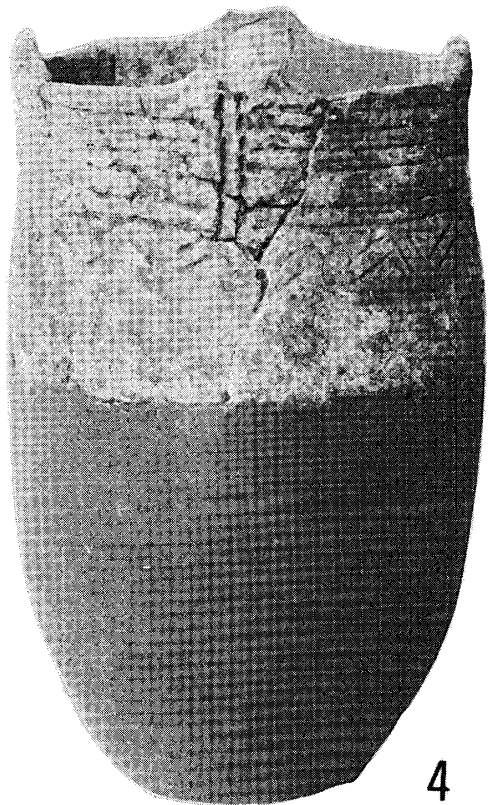
1



2

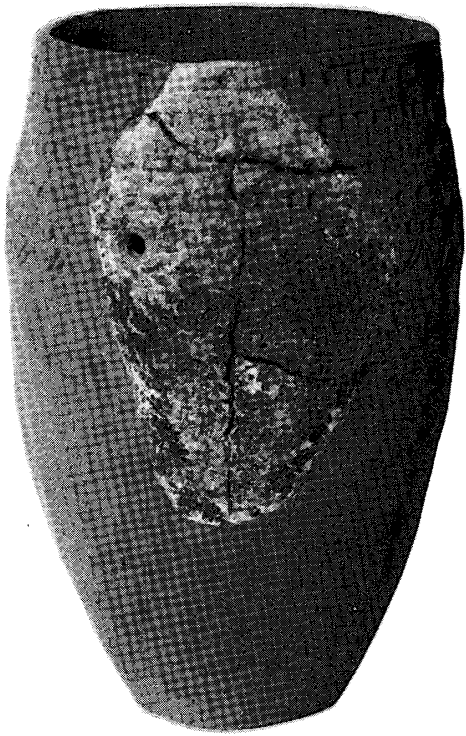


3

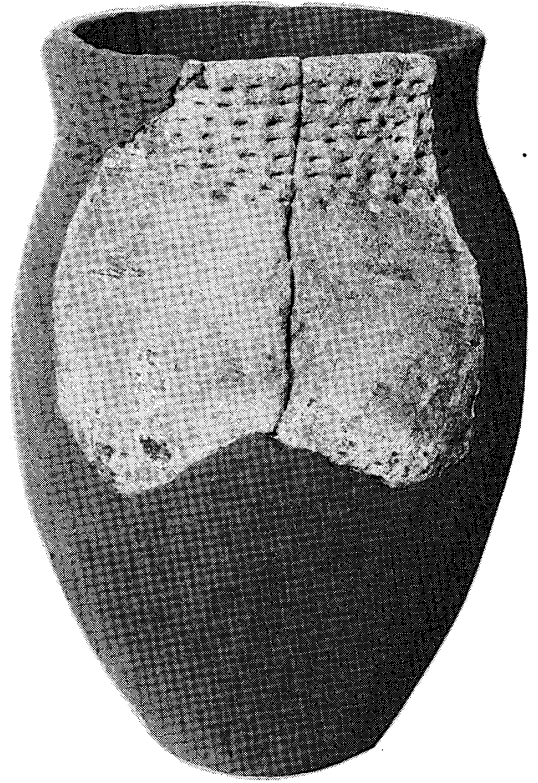


4

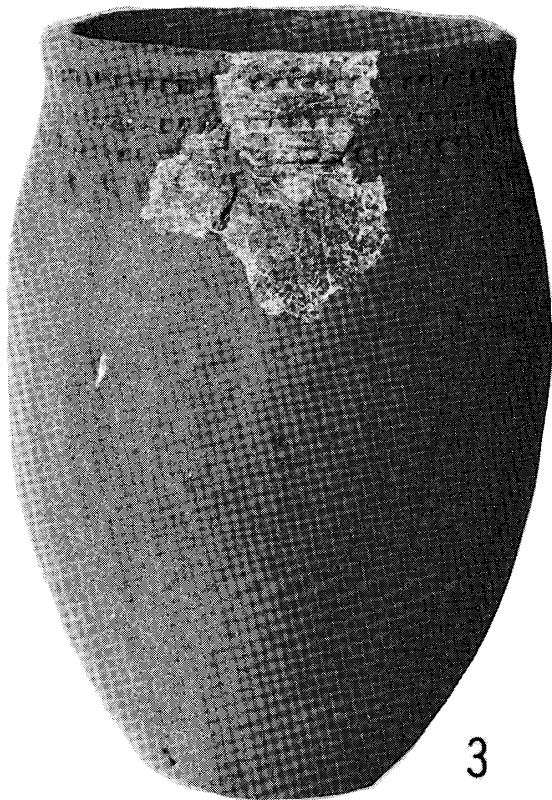
第 24 图版 荻堂式土器



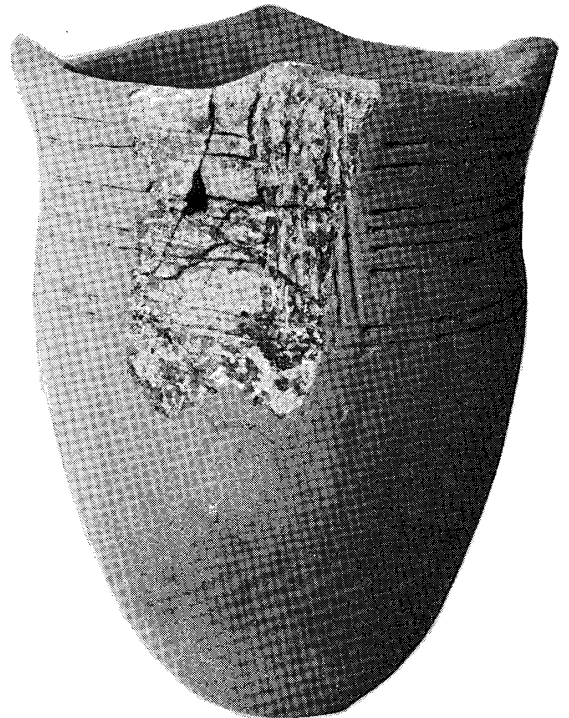
1



2



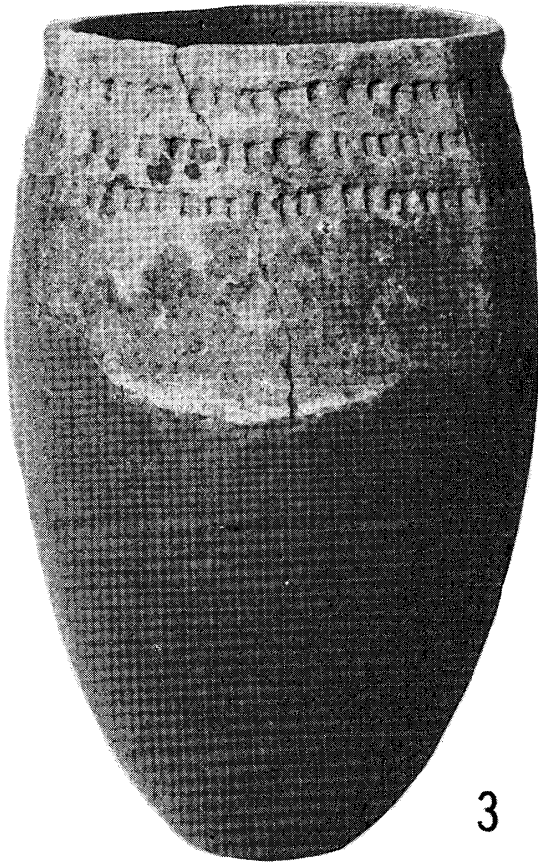
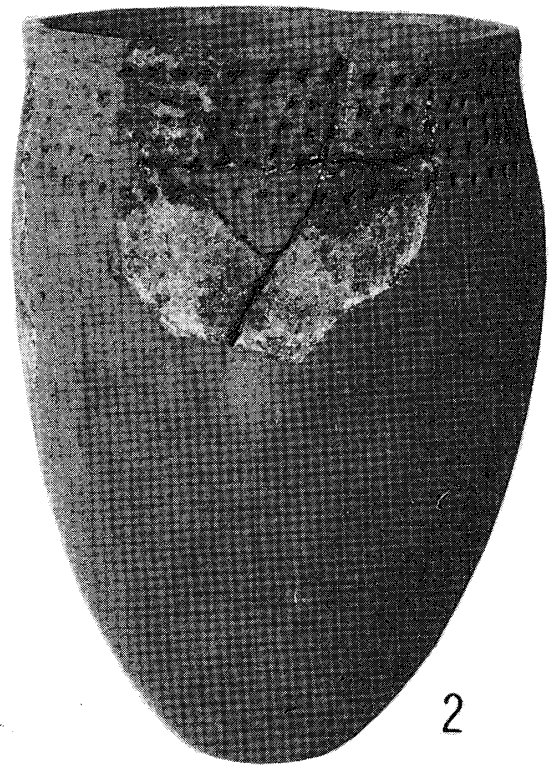
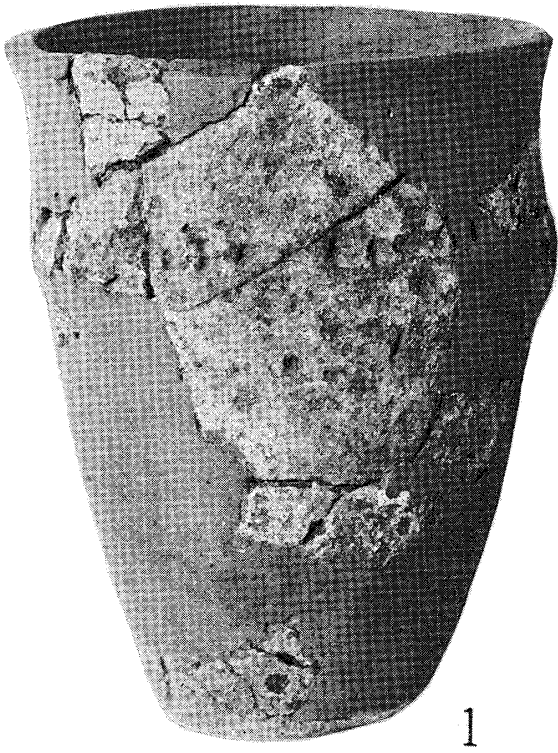
3



4

第 25 図版 荻堂式土器





第 26 図版 1 移入土器, 2~4 大山式土器